

来れ我等の王神に叩拝せん

徹夜禱晩課

オビホード (スラヴ語)

聖歌隊

f f

ア ミン プリイジチェ パクラニムシア ツアレヴィ
А - минь. Приидите, поклонимся Цареви

ナシエ ムウ ボー グウ プリイジチェ パクラニムシア
наше-му Бо - гу. Приидите, поклонимся

イ プリパжем フリストウ、ツアレヴィ ナシエ ムウ、ボー グウ
и припадем Христу, Цареви наше-му Бо - гу.

ブリイジチェ パクラニムシア イ プリパジェム サマムウ
Приидите, поклонимся и припадем Самому

Фристу, Царви и Бо-гу на-ше-му
Христу, Царви и Бо-гу на-ше-му.

ブリイジチェ パクラニムシア イ プリпаジェーム イエー ムウ
Приидите поклонимся и припа-дем Е - му.

5

10

【 晩 課 】

輔： 君や祝讚せよ。

司： 光栄は一體にして生命を施す分かれざる聖三者に常に帰す、今も何時も
世々に。

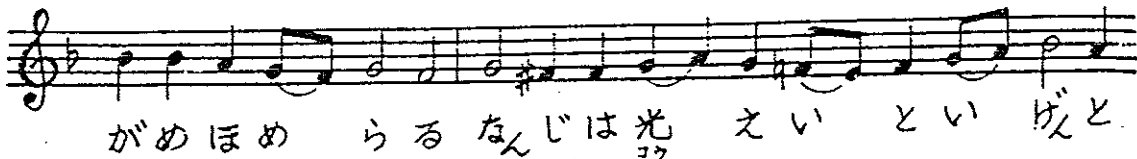
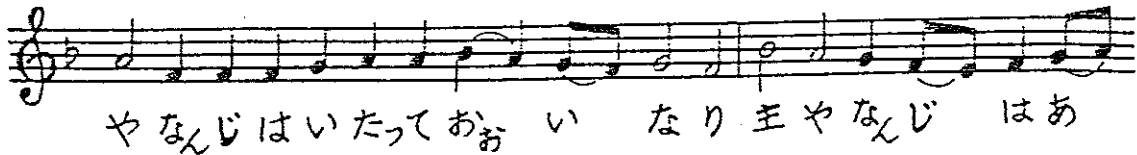


司： 来たれ我等の王神に叩拝せん。
来たれハリストス我等の王神に叩拝俯伏せん。
来たれハリストス我等の王と神の前に叩拝俯伏せん。
来たれ彼に叩拝俯伏せん。

< 我 が 霊 >

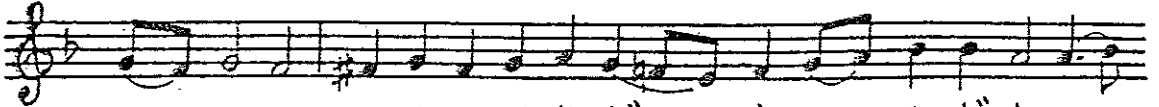
内 南 寺持D-リク 入ってまたら
香炉 南内
フレンドン → 後取

ねめ5かに





をこら む れり 主やなんじ はあ がめほ



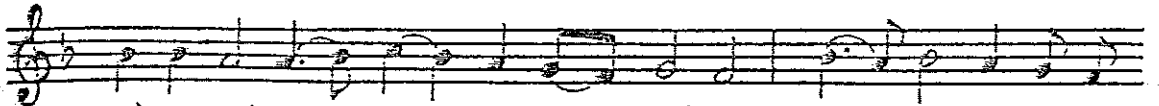
め らる やまのいただ きに みずたつ



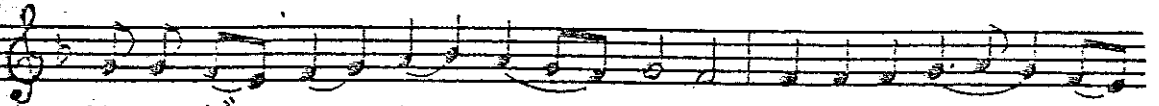
み ず たつ 主やなんじのしわざ は



き い なり やまのあいだ に み



づながる み ずな がる 主やなんじの



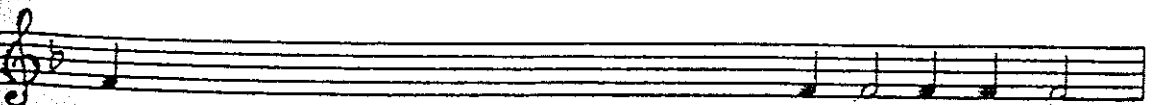
しわざ は き い なり みなちえ を



もってつくれりちえをもってつくれり 光え

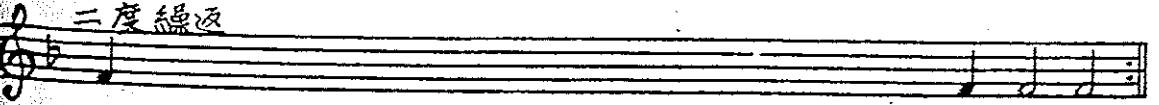


いはなんじばん ぶつをつくりし主に きす



光栄は父と子と聖神にきす今もいつ世世にアミン

二度繰返



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神や光栄は汝に帰す

輔：^{きこう じゅんわ ごくほうじょう てんか たいへい} 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の為に主に祈らん。

詠：「主憐れめよ」

輔：^{やまい うれ かんなん あ とりこ} 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、膚となりし者、
及び彼等の救いの為に主に祈らん。

詠：「主憐れめよ」

輔：^{もろもろ うれい いかり あやうき まぬか} 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが為に主に祈らん。

詠：「主憐れめよ」

輔：^{なんじ おんちよう まっ たす すく あわ まら} 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐れみ護れよ。

詠：「主憐れめよ」

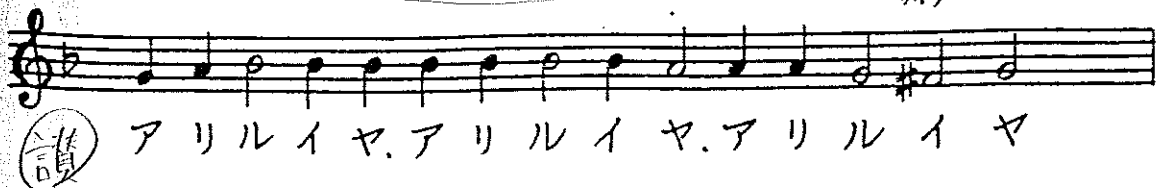
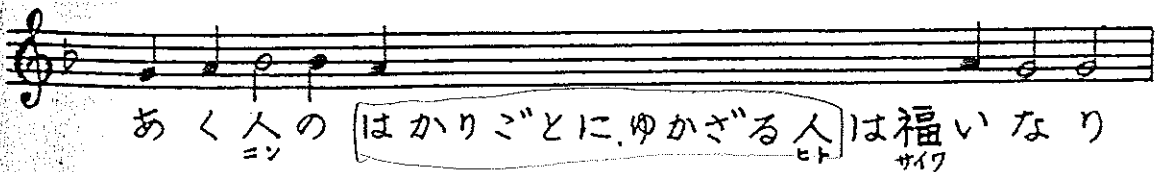
輔：^{しせい しけつ いた さん び じょさい しょうしんじょ えいていどうじょ} 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリ
^{しよせいじん き おく おのれ み たが おのおの み もっ なら} やと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並び
^{ことごと いのち まっ かみ いたく} に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。



司：^{けだしおよ こうらい ぞんき ふくはい なんじ せいしん き いつ よよ} 蓋凡そ光栄・尊貴・伏拝は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に。



< 悪人の謀 > 疎く歌おうとひない



主は義人の道を知る悪人の道はほろびん アリルイヤ
マジン

アリルイヤアリルイヤ おそれて主につとめよおの

いでその前に喜びよ アリルイヤアリルイヤアリル
ヨロコ

イヤ およそ彼をたのむものは福いなり アリルイヤアリ
チク

ルイヤアリルイヤ 主やたてよわが神やわれを救いたまえ
スツ

アリルイヤアリルイヤアリルイヤ 救いは主による
スツ

なんじの降福はなんじの民にあり アリルイヤア
コ-ツツ アミ

リルイヤアリルイヤ 光栄は父と子と聖神に

帰す今もいつも世世にアミン アリルイヤアリ

ルイヤアリルイヤ

< 小 聯 禱 >

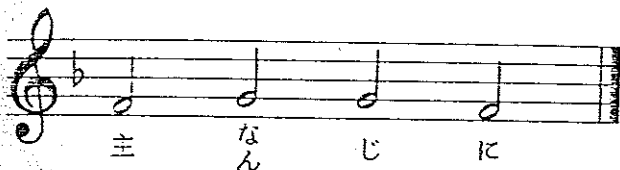
輔： 我等復又安和にして主に祈らん。



輔： 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐れみ護れよ。



輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。



司： 蓋権柄及び国と権能と光栄は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に。



大のレク用竟 7070-17

香炉 オルレツ

↓
炉儀

↓
香炉受取
フロン渡
香炉渡

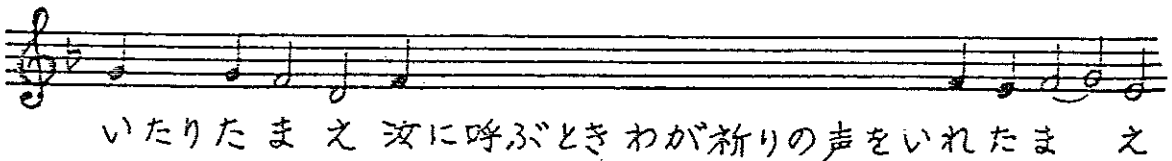
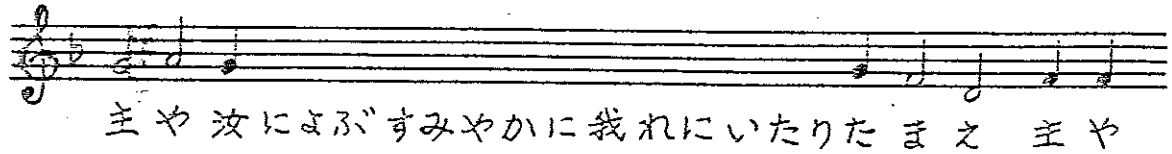
光榮... で
南門

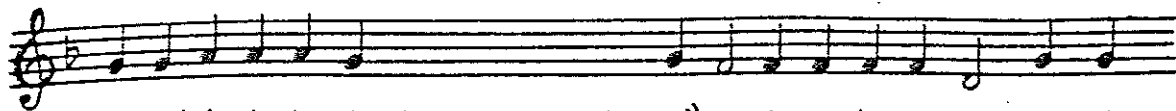
※ 「主や爾に呼ぶ」は“その週の調”を用いる。

祭日の場合には“祭日経”の指示に従う。

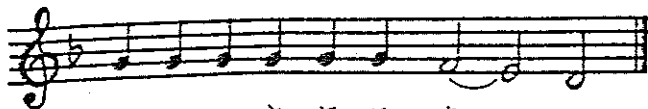
第1調の場合	……	7頁の「主や爾に呼ぶ」を用いる。
第2調の場合	……	9頁の //
第3調の場合	……	12頁の //
第4調の場合	……	14頁の //
第5調の場合	……	16頁の //
第6調の場合	……	19頁の //
第7調の場合	……	21頁の //
第8調の場合	……	23頁の //

< 主や爾に呼ぶ > (第1調)





わが手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん主や



われにききたま え

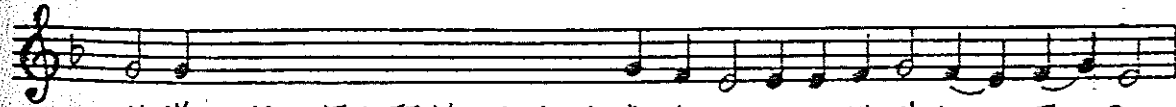
誦： < 主日の讃頌〔スティヒラ〕 > (第 1 調)

(句) わが^わ霊^{たましい}を^{ひとや}獄^ひより引き出だして、我に^{なんじ}爾^なの名^{さんえい}を^{たま}讃^{たま}栄^{えい}せしめ給え。
聖^{せい}なる^{しや}主^{しや}よ、我^わが^{くれ}晩^いの^{いの}祈^{いの}りを^い納^いれて、我^{われ}等^らに^{なんじ}罪^{つみ}の^{ゆるし}赦^{ゆるし}を^{たま}与^{たま}え給^{たま}え、爾^{なんじ}は^{ひと}独^{ひと}り^{ひとり}世界^{よこ}に^{よこ}復^あ活^らを^あ顕^あしし^あ者^あな^あら^あば^あなり。

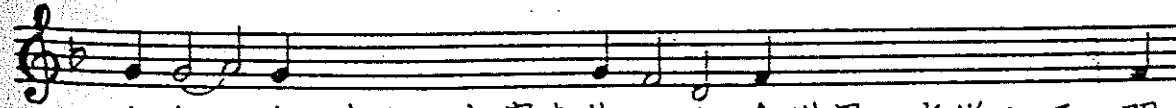
(句) 爾^{なんじ}恩^{おん}を^{たま}我^{われ}に^{たま}賜^{たま}わ^{たま}ん^{たま}時^{とき}、義^ぎ人^{じん}は^{かこ}我^{われ}を^{かこ}環^{かこ}らん。
人^{ひと}々^々よ、シ^しオ^おン^んを^うめ^めぐ^ぐり、こ^これ^れを^を囲^{かこ}み^みて、こ^この^の中^{ちゆう}に^に死^しよ^り復^ふ活^{ぼく}せ^せし^し主^{しゆ}に^に光^{こう}栄^{えい}を^ま帰^{かへ}せ^せよ、彼^{かれ}は^は我^{われ}等^らを^を不^ふ法^{ぽう}よ^り救^{すく}い^いし^し吾^{われ}が^が神^{かみ}な^なら^らば^ばなり。

(句) 主^{しゆ}よ、わ^われ^れ深^{ふか}き^きと^とこ^ころ^ろよ^より^り爾^{なんじ}に^に呼^よぶ。主^{しゆ}よ、我^{われ}が^が声^{こゑ}を^を聴^きき^き給^{たま}え。
人^{ひと}々^々よ、来^きた^たれ、歌^{うた}い^いて^てハ^はリ^りス^すト^とス^すを^を捧^{たも}み、そ^その^の死^しよ^り復^ふ活^{ぼく}せ^せし^しを^を讃^{さん}栄^{えい}せん、彼^{かれ}は^は敵^{てき}の^の誘^い惑^ごよ^り世^よ界^{かい}を^を救^{すく}い^いし^し吾^{われ}が^が神^{かみ}な^なら^らば^ばなり。

< 光栄 … 生神女讃詞〔ドグマティク〕 > (第 1 調)



光栄は父と子と聖神にきすいまもいつも世世に ア ミン



ひとより生れて主宰を生みし全世界の光栄と天の門
マ シュザイ ウ

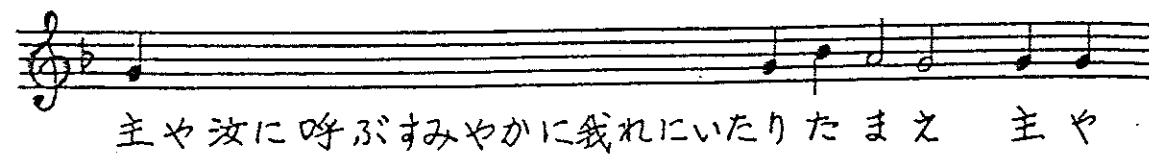
C D



なる童貞女マリヤ 諸神使のうた 諸信者のかざり
 なるものをほめうとゞ べしか れは天とひとしく
 神の宮とひとしき者としてあらわれたりか れはあだ
 のへだてをやぶり 和睦を結び 国をひらけり われらは
 かれを信の固めとなし 彼より生れし 主をふせぎまもるもの
 と な す い さ め よ 神の民や い さ め よ 主はてき
 にかたき 全能者なればなり

※ 25頁の「睿智、謹みて立て」へ移る。

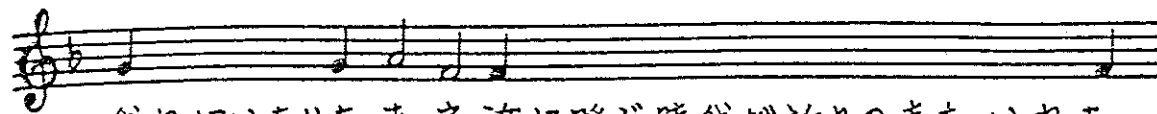
< 主や爾に呼ぶ > (第2調)



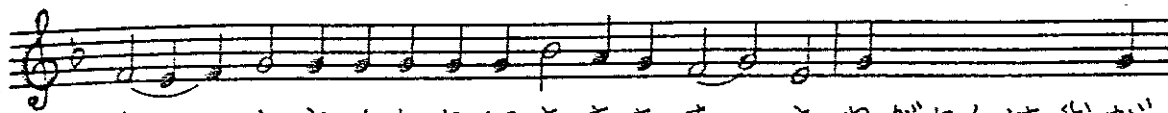
主や汝に呼ぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や



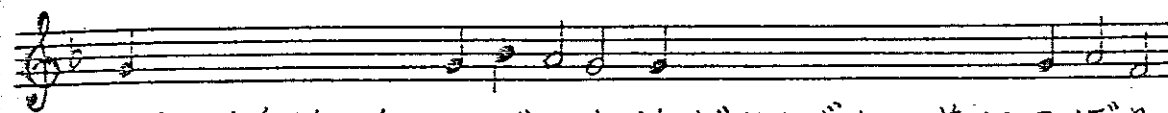
我れに聞きたま え主やなんじに呼ぶすみやかに



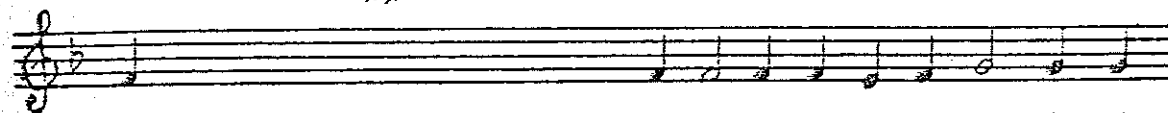
我れにいたりたま え汝に呼ぶ時我が祈りの声をいれた



ま え主やわれにききたま えねがわくは我が



いのりは香_{ユーロ}の香_{カオ}りのごとく汝がかんばせの前にのぼり



我が手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん主や



われにききたま え

誦： < 主日の讃頌〔スティヒラ〕 > (第 2 調)

(句) 我^りが^{たましい}を^{ひとや}獄^ひより引き出だして、我^{なんじ}に^な爾^{さんえい}の名^{たま}を讃^{たま}榮^{たま}せしめ給え。
来^きたりて、世^よの無^なき先^{さき}に父^{ちち}より生^{なま}まれし神^{かみ}の言^{ことば}、童^{どう}貞^{てい}女^{じょ}マリヤより身^みを
取^とりし者^{もの}に伏^{ふく}拝^{はい}せん。けだし彼^{かれ}は自^{みづか}ら望^{のぞ}みし如^{ごと}く、十^{じゅう}字^じ架^かを忍^{しの}びて、葬^{ほうご}
り^に付^つされたり。死^しより復^{ふく}活^{かつ}して、われ迷^{まよ}える人^{ひと}を救^{すく}い給^{たま}えり。

(句) 爾^{なんじおん}恩^{たま}を我^{われ}に賜^{たま}わん時^{とき}、義^ぎ人^{じん}は我^{われ}を環^{めぐ}らん。
ハリス^わトス^ら吾^がが救^{きう}世^{せい}主^{しゅ}は我^{われ}等^らを罪^{つみ}する書^{かき}券^{つけ}を十^{じゅう}字^じ架^かに釘^{くわ}うちて之^{これ}を抹^けし、
死^しの権^{けん}を空^{くわ}しくし給^{たま}えり。我^{われ}等^らその三^{さん}日^{じつ}目^めの復^{ふく}活^{かつ}に伏^{ふく}拝^{はい}す。

(句) 主よ、われ深きところより爾に呼ぶ。主よ、我が声を聴き給え。
我等は天使首と共にハリストスの復活を讃め歌わん。けだし彼は我等の
蓋の贖罪主および救世主なり、且つおそるべき光栄と強き能力とをもつ
て又来たりて、その造りし世界を審判せん。

< 光栄 … 生神女讃詞〔ドグマティク〕 > (第 2 調)

光栄は父と子と聖神にぎす今もいつも世々にアミン

恩寵きたりて法律のかげはされりもゆるいばらの焼け

ざりしごとく 眞女は生みし後き永く童貞女

なり炎の柱のかわりに眞の日は出でてひか

モイセイのかわりにわがたましいの救者 父と

はあらわれたり

※ 25頁の「睿智、謹みて立て」へ移る。

< 主や爾に呼ぶ > (第 3 調)

主や汝に呼ぶすみやかに我にいたりたまえ 主や
 我れに聞きたま え 主や汝に呼ぶすみやかに我れ
 にいたりたまえ 汝に呼ぶとき我が祈りの声をいれたま
 え 主やわれにき きたま え ねがわくは我が祈り
 は香炉の香りのごとく 汝がかんばせの前のほり
 我が手をあぐるは暮れの祭のごとくいれられん 主や
 われにき きたま え

誦: < 主日の讃頌〔スティヒラ〕 > (第 3 調)

(句) わ たましい ひとや ひ い なんじ な さんえい たま
 (句) 我が霊を獄より引き出だして、我に爾の名を讃栄せしめ給え。
 ハリストス救世主よ、爾の十字架にて死の権は滅ぼされ、悪魔の誘惑は
 空しくせられたり。信をもって救われる人の族は恒に歌を爾に奉る。
 (句) なんじおん たま とぎ ぎじん めく
 (句) 爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

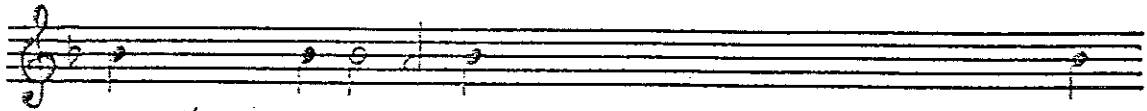
主よ、爾の復活にて万有は照らされ、樂園は再び開かれたり。ことごとく
 の造物は爾を讃め揚げて、恒に歌を爾に奉る。

(句) 主よ、われ深きところより爾に呼ぶ。主よ、我が声を聴き給え。
 我は父及び子の能力を崇め、聖神の権を歌い、分れず造られざる神性、
 一体の三者、世々に王たる者を讃め揚ぐ。

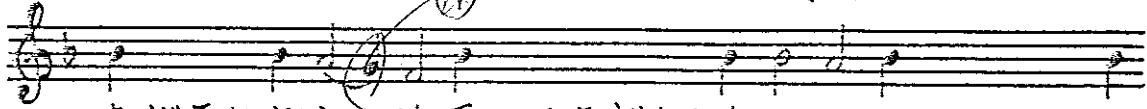
< 光荣 … 生神女讃詞 [ドグマティック] > (第 3 調)



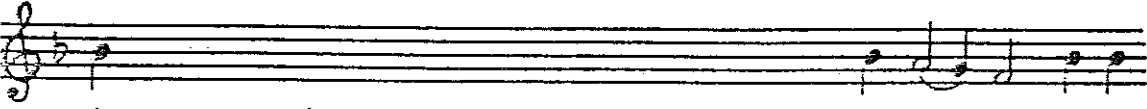
光 榮 は 父 と 子 と 聖 神 に 帰 す 今 も い つ も 世 世 に ア ミ ン



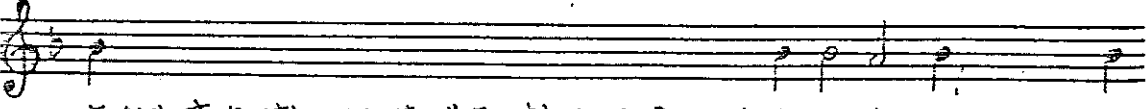
い と 尊 と き も の や わ れ ら い か で 汝 が 神 人 を 生 み し に



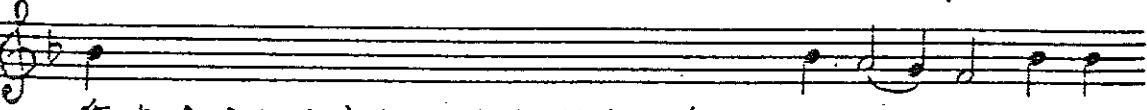
お ど ろ か さ ら ん や 至 っ て き ず な き も の や 汝 は 夫 の い が



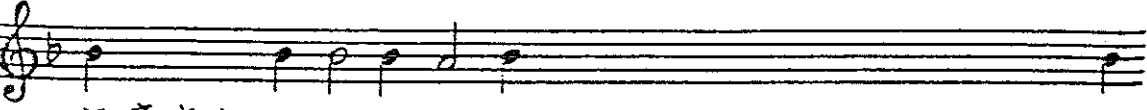
な い を う け ず し て 世 の な き 先 より 母 な く 父 に 生 ま れ い さ



さ か も 変 り 或 い は ま じ り 或 い は 分 れ を う け ず 二 つ の 性 の



負 を 全 う し て 守 れ る 子 を 父 な く 身 に て 生 め り 故 に



母 童 貞 女 女 さ い や 正 し く 汝 を 生 神 女 と う け と む る も の の

誦： < 主日の讃頌〔スティヒラ〕 > (第 4 調)

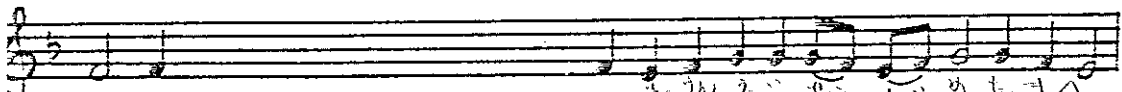
(句) 我が霊を獄より引き出だして、我に爾の名を讃栄せしめ給え。
 ハリストス神よ、我等絶えず爾が生命を施す十字架に伏拝して、爾が三日目の復活を讃栄す。けだし全能の主よ、爾はこれをもって人の朽ちたる性を新たにして、我等に又天に昇るを賜えり、独り仁慈にして人を愛する主なればなり。

(句) 爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。
 救世主よ、爾は甘んじて十字架の木の釘せられて、木の戒を犯しし罰を解けり、有能者よ、地獄に降りて、神として死の縛を断ち給えり。故に我等爾が死よりの復活に伏拝して、歎びて呼ぶ、全能の主よ、光栄は爾に帰す。

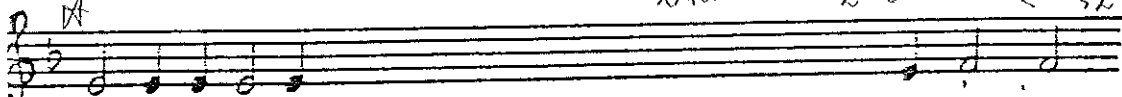
(句) 主よ、われ深きところより爾に呼ぶ。主よ、我が声を聴き給え。
 主よ、爾は地獄の門を破り、爾の死をもって死の国を滅ぼし、人類を朽壞より救きて、世界に生命と不朽と大いなる憐れとを賜えり。

< 光栄 … 生神女讃詞〔ドグマティク〕 > (第 4 調)

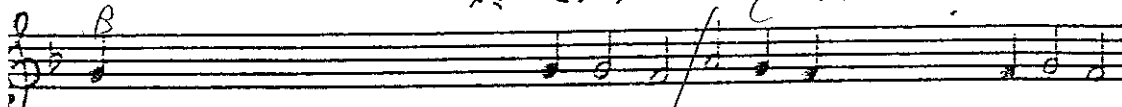
♪分音とシ、Aリト



光栄は父と子と聖神に帰すいまもいつもよよにアミン
も 聖 子 と 聖 神 に 帰 す い ま も い つ も よ よ に ア ミ ン



生神女や汝によりて神の先祖となりし預言者ダヴドは
カミ セン ソ ヨ ゲン シヤ



汝に大いなることをなせしものになんじのことを歌いよべり
ノ オ



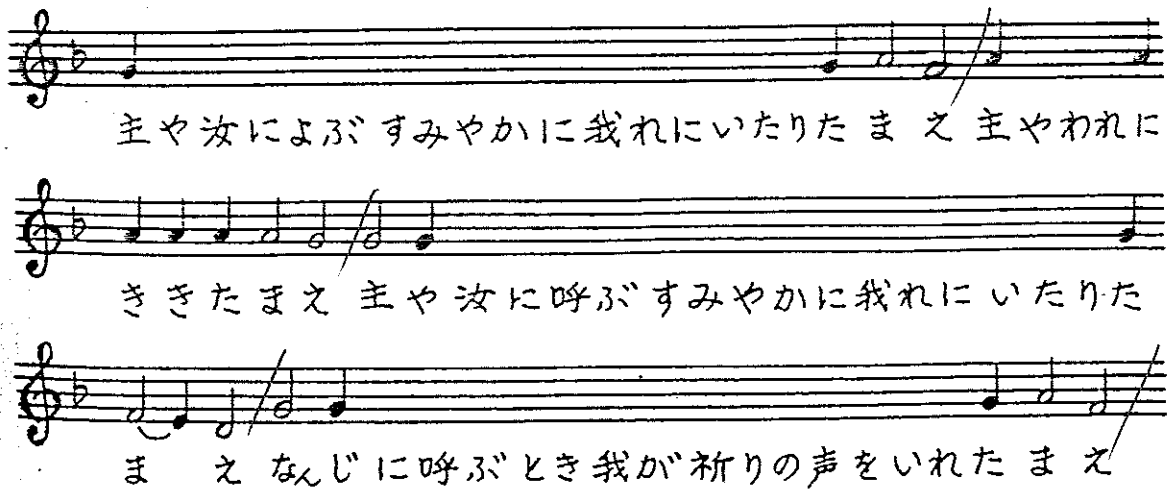
女王は汝の右に立てりけだし父なく汝より甘んじて人の
クワ 右



 性_{セイ}をとりしか み 父 へ おおいにして豊_{トヨ}なるあわれみを
 たもつ_{タモツ}の主 はなんじが母にして命_{イナヒ}のなかだちたるを表わして
 欲_{ヨク}にくちたるおのれのかたちをあらた め山_{ヤマ}の中に
 迷_{マヨ}いし羊_{ヒツジ}をえて 肩_{カタ}におき父の前にたづさ えおのれの旨_{ムネ}に
 よりてこれを天算_{テンザン}にあわせ て世界_{セカイ}を救いたまえり

※ 25頁の「睿智、謹みて立て」へ移る。

< 主や爾に呼ぶ > (第 5 調)



 主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ主やわれに
 ききたまえ 主や汝に呼ぶすみやかに我れにいたりた
 ま え なんじに呼ぶとき我が祈りの声をいれたまえ

主やわれにききたま え ねがわくは我がいのりは

香炉コウロの香カオりのごとく汝がかんばせの前にのほり

我が手をあぐるは暮クれのまつりのごとくいれられん

主やわれにききたま え

誦： < 主日の讃頌〔スティヒラ〕 > (第 5 調)

(句) 我がわ霊たましいをひとや獄ひより引き出だして、我なんじに爾なの名さんえいを讃さんえい榮たませしめ給え。

ハリストスよ、爾とうとは尊とくとき十字架あくまにて悪はずか魔まを辱はしめ、復活たくせいしにて罪ざんのえいはりを鈍にぶくし、我等なんじを死しの門かどより救すくい給たまえり。独どく生子せいしよ、我等さんえい爾なんじを讃さんえい榮たます。

(句) 爾なんじ恩おんを我わに賜たまわん時とき、義ぎ人じんは我わを環めぐらん。

人類なんしゆに復活たくせいしを賜たまう主なんじは羊よの如ごとく屠ほ宰ふりのたか為かに引ひかれたり。地じ獄ごくの君きみはこれこを畏おそれ、悲かなしみの門かどはあまみげられたり、けだし光あ榮まの王みハリストスは入いりて、縛なわに在ある者ものに出いでよと言いえり。

(句) 主なんじよ、われ深ふかきところより爾なんじに呼よぶ。主なんじよ、我わが声こゑを聴きき給たまえ。

大おほいなる奇ま跡せきや、見みえざる者ものの造ぞう成せい主しゆは、人ひとを愛あいするによりて、身みにてか苦しくるみを受け、不ふ死しの者ものは復ふく活かいせり。諸しよ民みん諸しよ族ぞく来きたりて、これこに伏ふく拝はいせん、けだしその恵めぐみによりて、我わ等らは迷まよいより脱だれて、三さん位いにして唯ただ一いつなる神かみを歌うたうを習ならえり。

< 光荣 … 生神女讃詞〔ドグマティック〕 > (第 5 調)

光 榮 は 父 と 子 と 聖 神 に 帰 す い ま も い つ も 世 世 に ア ミ ン

む か し く れ な い の う み に て 婚 姻 を 知 ら さ る 嫁 の 象 記 る

さ れ た り か し に に は モイセイ 水 を わ か つ も の こ こ に は

ガブリエル き せ き に つ と む る も の な り か の 時 イザライ は

足 を ぬ ら さ ず し て 深 み を あ ゆ み い ま 童 貞 女 は た ね な く し て

ハリス を 生 め り 海 は イザライ の 渡 り し 後 も と の ま ま 通 ら

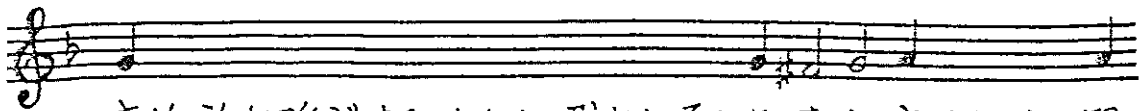
れ ず き ず な き も の は エムヌイル を 生 み し 後 も と の ま ま 玷 な し

永 遠 に し て い と 永 遠 な る も の 人 と な り て あ ら わ れ し か み や

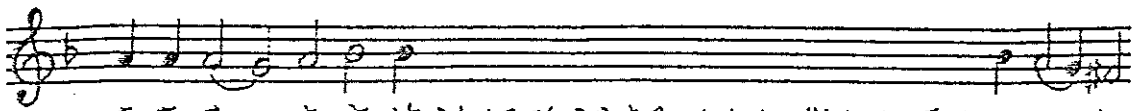
われら を あ わ れ み た ま え

※ 25頁の「睿智、謹みて立て」へ移る。

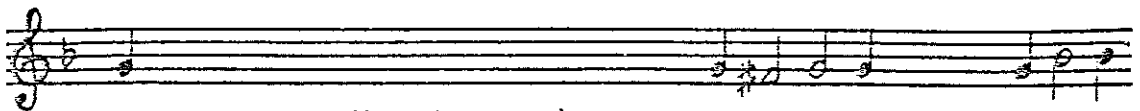
< 主や爾に呼ぶ > (第 6 調)



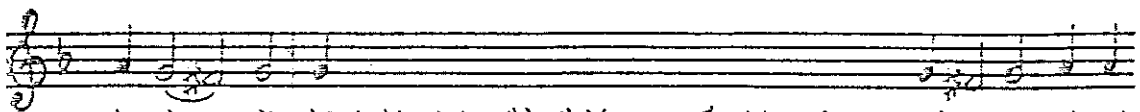
主や汝に呼ぶすみやかに我れに至りたまえ 主やわれに聞



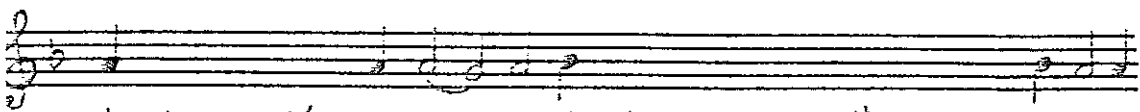
きたま え主や汝に呼ぶすみやかに我れに至りたまえ



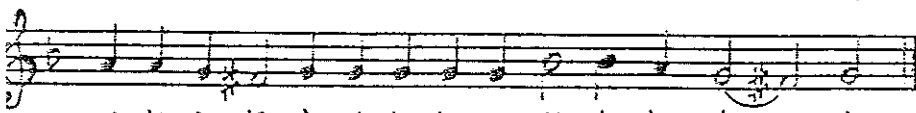
汝に呼ぶとき我が祈りの声をいれたまえ 主やわれに聞き



たま えねがわくは我が祈りは香炉の香りのごとく 汝が



かんばせの前にのぼり 我が手をあぐるは喜の祭のごとく



いれられ 主やわれにききたま え

誦: < 主日の讃頌〔スティヒラ〕 > (第 6 調)

(句) 我が霊を獄より引き出だして、我に爾の名を讃榮せしめ給え。
 地獄に勝つハリストスよ、爾は十字架に上れり、死者の中に自由なる者、
 己の光より生命を流す者として、死の暗闇に座する者を己と共に復活せ
 しめん為なり。全能の救世主よ、我等を憐れみ給え。

(句) 爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。
 今ハリストスは死を滅ぼして、かつて言いし如く復活し、世界に歡喜を
 賜えり、我等皆呼びてかく歌わん為なり、生命の泉、近づき難き光、全

のう きゅうせいしゅ
能の救世主よ、我等を憐れみ給え。

(句) 主よ、われ深きところより爾に呼ぶ。主よ、我が声を聴き給え。
主よ、我等罪人いずこに爾ことごとくの造物に居る者を避けん、天には
爾自ら住む、地獄には爾死を滅ぼせり、海の深みに入らんか、主宰よ、
かしこには爾の手あり。我等爾に走り付き、爾に伏拝して祈る、死より
復活せし主よ、我等を憐れみ給え。

< 光栄 … 生神女讃詞〔ドグマティック〕 > (第 8 調)

光栄は父と子と聖神に帰す今もいつも世世にアミン
を ぬ さい せ し め エ カ ま あ へ

至聖なる童貞女や誰か汝を福なりと言わざらんや
シ セイ ドウ ジョ ヲレ サワラ イ

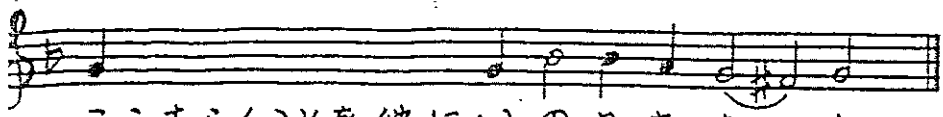
誰か汝の至つて清き産を歌わざらんや世のなき先に父
ヲレ イ 19 サン サキ

より光る独生の子は汝清きものより言いかたく身を取りて
ドウ セイ 19 サワラ

出で本性の神は我等の為に本性の人となれり
イ ホン セイ カミ ホン セイ

その位一つにして相分かれずその性二つにして相失なわす
19 ヒト アイ ワ セイ ツウ アイ ウシ

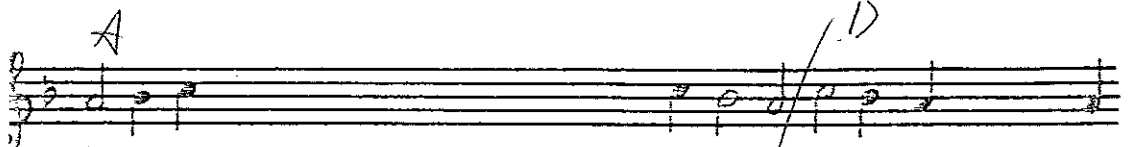
清くして至つて福なるものや我がたましいの憐れみを
19 19 サワラ アワ



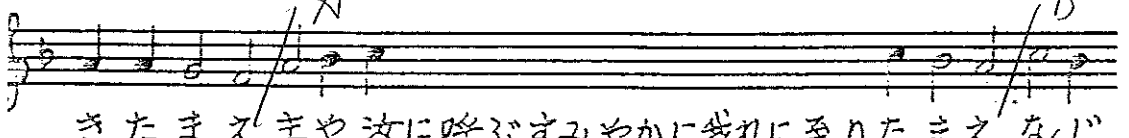
こうむらんことを彼にいのりたまえ

※ 25頁の「睿智、謹みて立て」へ移る。

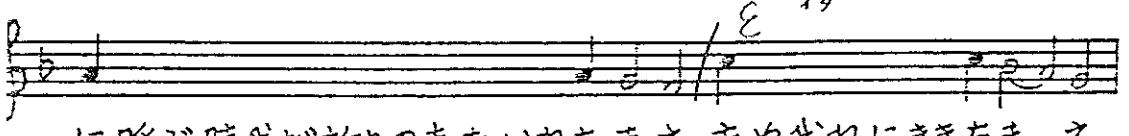
< 主や爾に呼ぶ > (第 7 調)



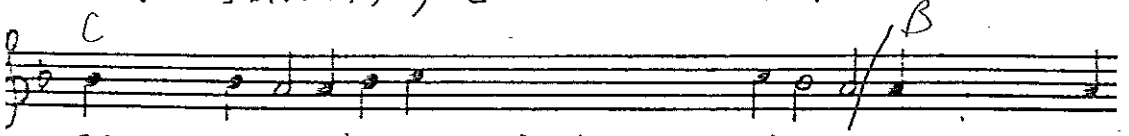
主や汝に呼ぶすみやかに我れに¹⁹至りたまえ 主や我れに聞



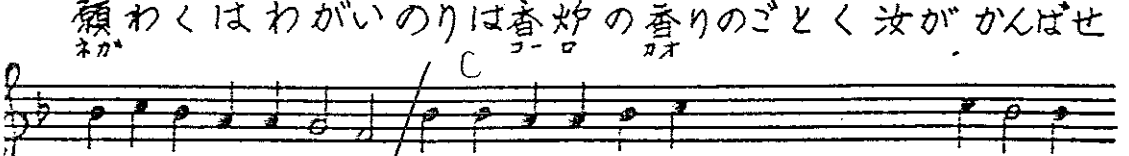
きたまえ 主や汝に呼ぶすみやかに我れに¹⁹至りたまえ なじ



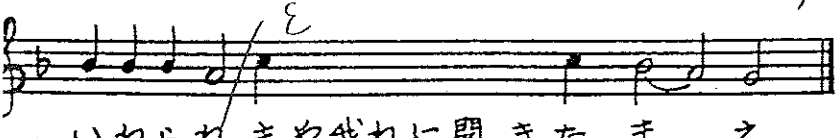
に呼ぶ時我が祈りの声をいれたまえ 主や我れにきたまえ



願わくはわがいのりは^{ツロ}香炉の^{カオ}香りのごとく汝が^{ネカ}かんばせ



のまえにのぼり わが手をあぐるは⁷暮れの^{マツリ}祭のごとく



いれられ 主や我れに聞きたまえ

誦： < 主日の讃頌〔スティヒラ〕 > (第 7 調)

(句) 我が霊を獄より引き出だして、我に爾の名を讃栄せしめ給え。
 来たりて死の権を滅ぼし、人類を照らしし主の為に喜びて、無形の者と
 共に呼ばん、我が造成主及び救世主よ、光栄は爾に帰す。

(句) 爾恩を我に給わん時、義人は我を環らん。
 救世主よ、爾は我等の為に十字架と葬とを忍び、神なるによりて死をも
 って死を滅ぼし給えり。故に我等爾の三日目の復活に伏拝す。主よ、光
 栄は爾に帰す。

(句) 主よ、われ深きところより爾に呼ぶ。主よ、我が声を聴き給え。
 使徒等は造成主の復活を見て、奇として、諸天使の讃美を歌えり、これ
 は教会の光栄なり、これは国の富なり。我等の為に苦しみを受けし主よ、
 光栄は爾に帰す。

< 光栄 … 生神女讃詞〔ドグマティク〕 > (第 7 調)

光栄は父と子と聖神にきす今もいつも世世にアミン

生神女シウカシンメウや 汝は常ツネの法ホウにこえて母となりことばとちし

きにこえて童貞女にとどまれりわがくちは汝の産ウマの

奇蹟キセキを言イいつくすあたわす清キヨきものやなんじのはらみしは

神妙シンミョウにしてなんじの生ナマみしは悟サトりがたしけだし神カミの

のぞむところにはつねの法ホウかえらる ゆえにわれらみな

 なんじを神の母とみとめてせつにねが; われらのたましい

 のすくわるることをいのりたま え

※ 25頁の「睿智、謹みて立て」へ移る。

< 主や爾に呼ぶ > (第 8 調)

主や汝に呼ぶすみやかに我れに17至りたま え主やわれに聞き

 たま え主や汝に呼ぶすみやかに我れにいたりたま え

 汝に呼ぶとき我が祈りの声をいれたま え主やわれに聞き

 たま えねがわくは我がいのりは香コウのカりのごとく

 汝がカバセ顔のまえにのほり我が7手をあぐるは暮れ7のまつりの

ごといれられ、主やわれにぎきたま え

誦： < 主日の讃頌〔ステヒラ〕 > (第 8 調)

(句) ^{か たましい ひとや ひ い} 我が霊を獄より引き出だして、^{なんじ な さんせい たま} 我に爾の名を讃栄せしめ給え。
 ハリストスよ、我等^{くれ うた れい ち つと} 晩の歌と^{たてまつ} 霊智の務めとを爾に奉る、爾復活をもつて
 我等を^{すく たま} 救い給いしによる。

(句) ^{なんじおん たま とき ざ じん めぐ} 爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。
 主よ、主よ、我等を爾の^{かんばせ しりぞ} 顔より返くるなかれ、復活をもつて我等を^{すく} 救い
 給え。

(句) 主よ、われ深きところより^{なんじ よ} 爾に呼ぶ。主よ、^{わ こえ き たま} 我が声を聴き給え。
^{せい} 聖なるシオン、^{しよきょうかい はは かみ すまい よろこ} 諸教会の母、神の住所よ、^{はじ} 慶べ、爾は初めて復活により
 て罪の^{ゆるし} 赦を受けられたばなり。

< 光荣 … 生神女讃詞〔ドグマティク〕 > (第 8 調)

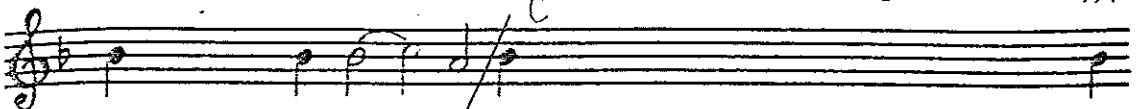
光荣は父と子と聖神にぎすいまもいつも世 世にアミン

天の王 は人を愛するにより て地にあらわれ人と

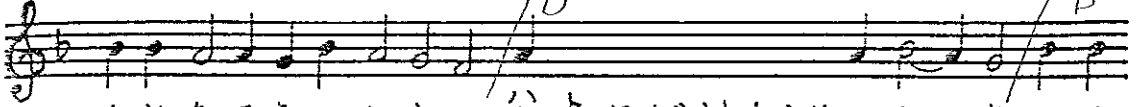
ともにいませり けだしきよき童貞女より身をとりに人



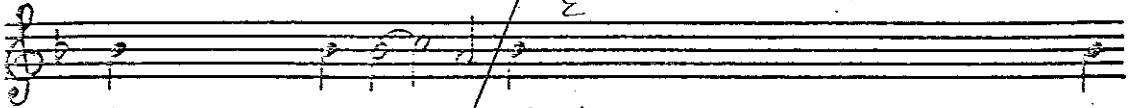
の性をたもちて生まれしものはふたつの性にて一つの位
セイ セイ ヒト 171



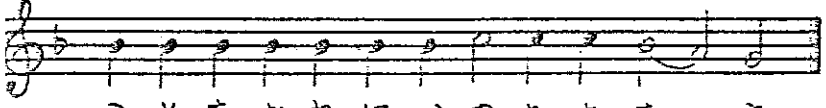
ある独一子なりゆえに我等彼がじつに全き神と全き
ドクイツシ ヲレラ カレ マツル マツル



人となるをつたえてハトスわが神をうけみとむあつと
エ



を知らざるははや我がたましいのあわれみをこゝむら

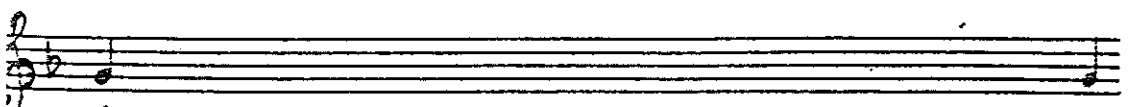


ことをかれにいのりたまえ

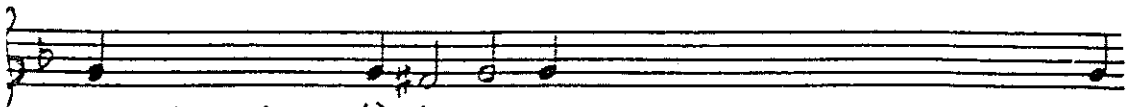
(聖 入)

司： 睿智、謹みて立て。
サイチ ツツシ タ

< 聖にして福たる >



聖にして福たる常生なる天の父の聖なる光栄のおだやか
セイ フツ ヲツセイ



なる光 イススハトス やわれら日の入りに至り暮れの光を
ヒカリ イ 19 7

見て神カミ父と子と聖神をうと、生命イノチを賜タモうかみの

子や、なんじはいつも敬ケイけんの声にて歌ウタわれるべしゆえに

世界セカイはなんじをあかめほむ

輔：^{つし き} 謹みて聴くべし。

司：^{しゅうじん へいあん} 衆人に平安。

輔：^{えいさ} 容智、ボロキメン。

「主は王たり、彼は威嚴いげんを衣きたり。」

主は王たりかれは威嚴いげんを衣きたり

輔：「主は能力のうりょくを衣き、又これを帯おびにせり。故ゆえに世界せかいは堅固けんこにして動うごかざらん。」

主は王たりかれは威嚴いげんを衣きたり

輔：「主や、聖徳せいとくは爾なんじの家に属いそして永遠えいに至らん。主は王たり、」

かれはいげんいげんをきたり

※ 祭日には「旧約節目バシミヤ」を挿入。“祭日經”を参照。

フレンド受
肉内

< 重 聯 禱 >

輔：我等皆^{たましい}靈^まを全^いうして言^おわん、我等の思^おを全^いうして言^おわん。



輔：主^{しゅぜん}全^{のう}能^い者^わ吾^れが列^れ祖^っの神^そや、爾^かに祈^{なん}る、聆^いき納^のれて憐^あれめよ。



輔：神^あや、爾^あの大^いなる憐^あれ^みに^よ因^りて我^あ等^を憐^あれ^めよ、爾^あに祈^ある、聆^あき納^あれて憐^あれ^めよ。



(以下毎句ごとこれを歌う)

輔：又^つ我^かが国^さの天^た皇^め及^び国^たを司^める者^のの為^に祈^る。

詠：「主^あ憐^あれ^め 主^あ憐^あれ^め 主^あ憐^あれ^めよ」

輔：又^つ教^か会^きを司^める尊^だ貴^いなる我^だ等^いの東^だ京^いの^{しゅ}大^{だい}主^{しゅ}教^{きょう}及^び全^ふ日^{じつ}本^{ぽん}の^{しゅ}府^ふ主^{しゅ}教^{きょう}フエ^おド^ドシ^い、及^びハ^あリ^あス^あト^あスに^あ於^あける^あ悉^あく^あの^あ我^あ等^の兄^あ弟^あの^あ為^に祈^る。

詠：「主^あ憐^あれ^め 主^あ憐^あれ^め 主^あ憐^あれ^めよ」

輔：又^つ恒^{つね}に記^き憶^いせらる^る福^ふたる^こ此^この^{しん}聖^{りやう}堂^{じやう}の^す建^た立^た者^の、及^び已^{すで}に^ね寝^むり^し悉^あく^あの^あ父^ふ祖^そ兄^あ弟^あ、此^この^{しよ}處^ほと^む諸^{しよ}方^ほと^むに^あ葬^あら^れた^る正^{せい}教^{きょう}の^あ者^のの^あ為^に祈^る。

詠：「主^あ憐^あれ^め 主^あ憐^あれ^め 主^あ憐^あれ^めよ」

輔：又^つ神^{しん}の^あ諸^{しよ}僕^{ぼく}、此^この^け聖^{せい}堂^{だう}の^あ兄^あ弟^あに、慈^じ憐^{れん}、生^{せい}命^{めい}、平^{へい}安^{あん}、壮^{そう}健^{けん}、救^{きう}贖^{じやく}、眷^{けん}顧^こ、寛^{かん}宥^{ゆう}、及^び諸^{しよ}罪^{ざい}の^あ赦^あを^あ賜^{たま}わ^んが^あ為^に祈^る。

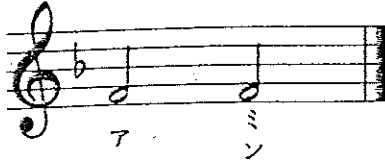
詠：「主^あ憐^あれ^め 主^あ憐^あれ^め 主^あ憐^あれ^めよ」

輔：又^こ此^この^し至^し尊^{そん}なる^あ聖^{せい}堂^{だう}に^あ物^{もの}を^あ献^たげ^る、善^{ぜん}業^{ぎやう}を^あ行^おい、之^こに^あ勞^{らう}し、之^こに^あ歌^{うた}い、及

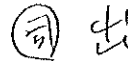
び此に立ちて爾の大いにして豊なる憐れみを仰ぎ望む者の為に祈る。

詠： 「主憐れめ 主憐れめ 主憐れめよ」

司： 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、
今も何時も世々に。



誦： < 主や我等を守り >



(リテイト) 主や、我等を守り、罪なくして此の晩を渡らせ給え。主吾が先祖の神や、
爾は崇め讃められ、爾の名は世々に尊み歌わる、アミン。
主や、爾を待むに因りて、爾の憐れみを我等に垂れ給え。主や爾は崇め
讃めらる、爾の誠を我に教え給え。主宰や、爾は崇め讃めらる、爾の誠
を我に悟らせ給え。聖なる者や、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我を照
らし給え。主や、爾の憐れみは世々に在り、爾の手の造りし物を軽んず
るなかれ。讃は爾に歸し、歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、
今も何時も世々に、アミン。

< 増 聯 禱 >

輔： 我等主の前に吾が晩の祈りを増し加えん。



輔： 神や爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐れみ護れよ。



主 あ わ れ め よ

輔： ^こ此の^{くれ}晩の^{じゅんぜん}純全、^{せいせい}成聖、^{へいあん}平安、^{ござい}無罪ならんことを主に求む。



主 た ま え よ

(以下毎句ごとこれを歌う)

輔： ^{へいあん}平安の^{しんし}神使、^{きょうどうし}正しき^わ教導師、^{れいたい}吾が^{しゅごし}靈體の^{たま}守護者を賜わんことを主に求む。

詠： 「主賜えよ」

輔： ^{あやまち}我等の^{なだ}罪と^{ゆる}過とを宥め赦さんことを主に求む。

詠： 「主賜えよ」

輔： ^{たましい}我等の^{ぜん}靈に^{えき}善にして^{こと}益ある^{へいあん}事、及び^{たま}世界に平安を賜わんことを主に求む。

詠： 「主賜えよ」

輔： ^{いのち}我等の^{よじつ}生命の^{へいあん}余日を^{つうかい}平安と^{もつ}痛悔とを以て^{おわ}終らんことを主に求む。

詠： 「主賜えよ」

輔： ^{いのち}我等の^{おの}生命の^{かが}終りが^{やまい}ハリスティアニンに^{はじ}適い、^{へいあん}疾なく、平安なること、及び^{あき}ハリストスの^べ畏る^{おい}可き^{よろ}審判に^{ことえ}於て^{たま}宜しき^{たま}對をなすを賜わんことを求む。

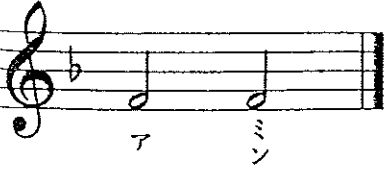
詠： 「主賜えよ」

輔： ^{しせい}至聖^{しけつ}至潔にして^{いた}至りて^{さん}讚美^びたる^{こうえい}我等の^{じょさい}光栄の^{しょうしんじょ}女宰・^{えいていどうじょ}生神女・永貞^{まこと}童女マリヤと、^{しよせいじん}諸聖人とを^{おのれ}記憶して、^か我等^{たが}己の^{おのおの}身及び^か互いに^{おのおの}各の^み身を以て、^{ことごと}並び^{いのち}に^{もつ}悉くの^{かが}我等の^{いたく}生命を以て、^{かが}ハリストス^{いたく}神に委託せん。



主 なん じ に

司： ^{けだし}蓋爾は^{こうえい}善にして^{せいしん}人を愛する^{けん}神なり、我等^{けん}光栄を爾父と子と聖神に献ず、
今も^{いつ}何時も^{よよ}世々に。



ア ミン

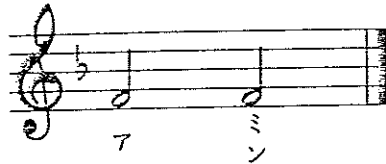
司： 衆人に平安。



輔： 我等の首を主に屈めん。



司： 願くは爾父と子と聖神の国の権柄は讚揚讚栄せられん、今も何時も世々に。



※ 祭日には「^{リティア}熱衷公禱」を挿入。“祭日経”を参照。

大方どく
フェロン無し

※ 「^{くすけ スティヒラ}挿句の讚頌・生神女讚詞」は、“その週の調”を用いる。

祭日の場合には“祭日経”の指示に従う。

フェロン渡

- 第1調の場合は … 31頁の「ハリストスよ……」を用いる。
- 第2調の場合は … 31頁の「ハリストス救世主よ……」を用いる。
- 第3調の場合は … 31頁の「己の苦しみにて……」を用いる。
- 第4調の場合は … 32頁の「主よ、爾は十字架に……」を用いる。
- 第5調の場合は … 32頁の「爾身を取りたれども……」を用いる。
- 第6調の場合は … 33頁の「ハリストス救世主よ……」を用いる。
- 第7調の場合は … 33頁の「世界の救主よ……」を用いる。
- 第8調の場合は … 34頁の「天より降りしイイスス…」を用いる。

誦： < 挿句の讃頌・生神女讃詞 > (第 1 調)

ハリストスよ、爾の苦しみにて我等は苦しみを免れ、爾の復活にて我等は滅びより救われたり。主よ、光荣は爾に帰す。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

見よ、イサイヤの預言かないて、童貞女は子を生めり、生みし後も生む前の如く童貞女なり、生まれし者は神なるに因る、故に天性は改め替えられたり。ああ、神の母よ、爾の諸僕が爾の堂に献ぐる祈禱を棄つる勿れ、恵み深き主を爾の手に抱きし者として、爾の諸僕を憐れみて、我等の霊の救われんことを祈り給え。

※ 34頁の「抱神者シメオンの祝文」へ移る。

誦： < 挿句の讃頌・生神女讃詞 > (第 2 調)

ハリストス救世主よ、爾の復活は全世界を照らせり、爾は己の造物を召し給えり。全能の主よ、光荣は爾に帰す。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

ああ、新たなる奇跡、古のことごとくの奇跡に勝る者や。誰か夫なき母が万物を有つ主を生みて、その手に抱くを知りたる、この産は神の旨なり。至りて潔き者よ、爾が嬰兒として己の手に抱きし主の前に母の勇をもって、我等爾を尊む者の霊を憐れみて救わんことを常に祈り給え。

※ 34頁の「抱神者シメオンの祝文」へ移る。

誦： < 挿句の讃頌・生神女讃詞 > (第 3 調)

己の苦しみにて日を晦くし、己の復活の光にて万物を照らししハリストス、人を慈しむ主よ、我等の晩の歌を納れ給え。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

爾は種なく聖神に由りて、父の旨をもって、神の子、世の無き先に母なく父より生まれし者を妊み、我等の為に父なく爾より在りし者を身にて生み、嬰兒たる者を乳にて養えり。彼に我等の霊を諸難より脱れしめんことを息めずして祈り給え。

※ 34頁の「抱神者シメオンの祝文」へ移る。

誦： < 挿句の讃頌・生神女讃詞 > (第4調)

主よ、爾は十字架に上りて、我が原祖よりの呪いを滅ぼし、地獄に下りて、世々の俘虜を釈き、人類に不朽を賜えり。故に我等歌いて、生命と救いとを施す爾の復活を崇め讃む。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。
 至りてきずなき者よ、爾の諸僕の祈禱を顧みて、堪え難き攻撃を我等より退け、諸々の愛いを我等より遠ざけ給え、我等は爾を一の堅固なる頼むべき錨として有ち、爾の転達を得たればなり。女宰よ、願わくは我等爾を呼ぶ者は恥を蒙らざらん、速やかに我が切なる祈りをかなえ給え、けだし我等中心より爾に呼ぶ、女宰、衆人の佑助と、歓喜と、庇護と、我等の霊の救いなる者よ慶べ。

※ 34頁の「抱神者シメオンの祝文」へ移る。

誦： < 挿句の讃頌・生神女讃詞 > (第5調)

爾身を取りたれども、天を離れざりし救世主ハリストスを歌の声をもちて讃め揚ぐ。けだし爾は人を愛する主なるによりて、我が族の為に十字架と死とを受けて、地獄の門を破り、三日目に復活して、我等の霊を救い給えり。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。
 いと尊き童貞女よ、爾は殿及び門なり、宮及び王の宝座なり。我が贖罪

主しゅハリストス、義ぎの日ひたる主は、その手てをもって己おのれの像さうに従したがいて造つくりし者
を照てらさんと欲ほつして、爾くらやみによりて暗闇ねじに眠もる者ものに現あらわれ給たまえり。故ゆえに讃ほめ
歌うたわるる者よ、彼いさむの前に母えの勇敢えを獲たまたる者として、我等たましの靈いの救すくわれ
んことを恒つねに祈いのり給たまえ。

※ 34頁の「抱神者シメオンの祝文」へ移る。

誦：
くづけ スティヒラ
< 挿句の讃頌・生神女讃詞 > (第6調)

ハリストス救世主きゅうせいしゅよ、諸天使しよてんしは天かに於かんじいて爾うたの復活うたを歌うたう。我等われにも地
に於かいて潔いさぎよき心こころをもって爾さんせいを讃たた美たまするに堪たえさせ給たまえ。

光榮きやうぎは父ちちと子こと聖神せいじんに帰かへす、今いまも何時いつも世々よよに、アミン。

至浄しじやうなる者ものよ、我われの造成ぞうせい者しや及び贖罪じやくざい者しやハリストス主しゅは、我われを衣きて、爾もの
胎たいより出いでて、アダムのを初はじめの呪のろいより解とき給たまえり。故ゆえに無なてんの者ものよ、
我等われ爾じつ、実じつに神かみの母はは及び童貞どうてい女むすめたる者ものに黙もさずして天使てんしの如ごとくに呼よぶ、
慶よろこべ、女宰じよさい、我等たましの靈いの転達てんたつ、おおい、及び救すくいよ、慶よろこべ。

※ 34頁の「抱神者シメオンの祝文」へ移る。

誦：
くづけ スティヒラ
< 挿句の讃頌・生神女讃詞 > (第7調)

世界きやうせいの救世主きゅうせいしゅよ、爾なんじは墓はらより復活かして、人々ひとを爾おこの身たまと共に興たし給たまえり。
主しゅよ、光榮きやうぎは爾きに帰かへす。

光榮きやうぎは父ちちと子こと聖神せいじんに帰かへす、今いまも何時いつも世々よよに、アミン。

女宰じよさいよ、我われ等ら地ちに生なまるる者ものは皆みな爾したのおおいの下したに走はしり附つきて、爾ものに呼よ
ぶ、生神女しょうしんじよ、我われが頼たのみよ、我等われを無む数じうのあやまちより援たすけて、我等たましの靈い
を救すくい給たまえ。

※ 34頁の「抱神者シメオンの祝文」へ移る。

誦： < 挿句の讃頌・生神女讃詞 > (第 8 調)

天より降りしイイススは十字架に上り、死せざる生命は死の為に來たり、
真の光は黑暗にある者に顕われ、衆人の復活は陥りし者に臨めり。我等
の光及び救世主よ、光榮は爾に歸す。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。
嫁ならぬ童貞女、言い難く身にて神をはらみし者、至上なる神の母よ、
爾の諸僕の祈禱を受け給え。衆に諸罪の潔淨を予うる純潔なる者よ、今
我等の祈願を納れて、我等皆救われんことを祈り給え。

誦： < 抱神者シメオンの祝文 >

主宰や、今爾の言に従い、爾の僕を安然として逝かしめ給う。けだし我
が目は爾の方民の前に備えし救いを見たり。これ異邦人を照らすの光と
爾がイズライリ民の榮なり。

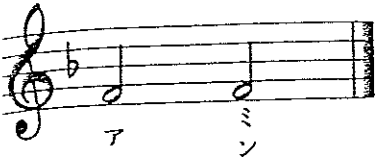
誦： < 聖三祝文、至聖三者、天主經 >

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者や、我等を憐れめよ。(三回)
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。
至聖三者や我等を憐れめよ、主や我等の罪を潔くせよ、主宰や我等のあ
やまちを赦せ、聖なる者や臨みて我等の病を癒し給え、ことごとく爾の
名に因る。

主憐れめよ。(三回)

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。
天に在ます我等の父や、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の国は來たり
爾の旨は天に行わるるが如く地にも行われん。我が日用の糧を今日我等
に与え給え。我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。
我等を誘に導かず、なお我等を凶惡より救い給え。

司： 蓋^{けだし}國^{ひんのう}と權能^{こうえい}と光榮^{せいしん}は爾^き父^きと子^きと聖神^{せいしん}に帰^きす、今^{いつ}も何時^よも世^よ々に。



南内 (祭日には別に出ているよ
南内よ)

< 生神女讚詞 > (祭日の場合には「祭日の讚詞」を歌う)

生^{シヨウ}神^{シン}童^{ドウ}てい女^メやようこ^ゴべよ思^{オモ}ちやうに満^ミたさるる

マ^マリヤ^{リヤ}や主^{ヌシ}は汝^ニととも^{トモ}にす汝^ニは女^メの中^{ナカ}にてさ^サんび

た^タり汝^ニのはら^{ハラ}の果^ミも賛^{サン}美^ビたり汝^ニは我^ワ等^{トウ}のたま^{タマ}しい

を^ヲ救^{スク}うの主^{ヌシ}を生^ナめば^バなり願^{ネガ}わくは主^{ヌシ}の名^ナはあ^アがめ

ほ^ホめられ今^{イマ}より世^セ世^セにいたらん願^{ネガ}わくは主^{ヌシ}の名^ナはあ^アがめ

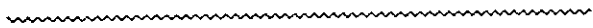
ほ^ホめられ今^{イマ}より世^セ世^セにいたらん願^{ネガ}わくは主^{ヌシ}の名^ナはあ^アがめ

ほ^ホめられ今^{イマ}より世^セ世^セにいたらん

司： 願^{ねが}わくは主^{しゆ}の降^{こう}福^{ふく}は、その恩^{おん}寵^{ちゆう}と仁^{にん}愛^{あい}とに因^よりて常^{つね}に爾^{なん}等^{じゆう}に在^あらん、今^{いつ}も何時^よも世^よ々に。



肉門・7.12.2受・消灯



【 早 課 】

誦： < 六段の聖詠 >

至いと高たかきには光こう榮えい神かみに歸きし、地ちには平へい安あん降くだり、人ひとに恵めぐみは臨のぞめり。(3回)
 主くちや、わが唇ひらを開ひらけよ、しかせば我わが口くちは爾なんじの讚さん美びを揚あげんとす。(2回)

「 第 3 聖 詠 」

主わや我てが敵かみは何なんぞ多おほきや、多ものくの者われは我せを攻せむ、多ものくの者わは我たましいさ
 して彼すく救えいを神かみに得えずと云いう。しかれども主なんじよ、爾まは我まを護たてるの盾たてなり、
 我さかの榮えなり。爾わは我こうが首あを挙あぐ。我わが声こゑをもつて主かみに呼よぶに、主かみはその
 聖せい山ざんより我せに聴たまき給たまう。われ臥ふし眠ねり又また覚さむ、けだし主かみは我ふを防ふぎ護まもれ
 ばなり。めぐりて我せを攻せむるの万ばん民みんは、われ恐おそるるなし。主たや立たてよ、
 我わが神かみや我すくを救たまい給たまえ、けだし爾わは我しよが諸ほ敵おの頬ほを打うち、悪あく人にんの齒はを折くじ
 けり。救きういは主かみによる、爾こうの降ふく福たかは爾ふの民ねにあり。われ臥ふし眠ねり又また覚さむ、
 けだし主ふは我ふを防ふぎ護まもればなり。

「 第 37 聖 詠 」

主なんじや爾いの憤まどりをもつて我せを責せむるなかれ、爾いの怒いかりをもつて我ぼを罰ばつする
 なかれ、けだし爾わの矢やは我さに刺くさり、爾わの手ては重くわく我いに加かわる。爾いの怒いか
 りによりて我わが肉にくに傷いたまざる所ところなく、我わの罪つみによりて我わが骨ほねは安やすきを得え
 ず、けだし我わが不ふ法ぼうは我わが首こうに溢あふれ、重おも任にの如ごとく我あつを圧おさす。我わの無む知ちに
 より、我わが傷きず腐くされて且かつ臭くさし。われ屈かがまりて倒たおれんとし、終しゅう日じつ憂うれいて行ゆ
 く、けだし我わが腰こしは熱ねつに惱なやまされ、我わが肉にくに傷いたまざる所ところなし。われ力ちから衰おとろ

えて痛く疲れ、我が心の裂くるによりて叫ぶ、主や我がことごとくの願
 いは爾の前にあり、我が嘆息は爾に隠るるなし。我が心は戦慄き、我が
 力は我より脱け、我が目の光も既に我にあるなし。我が朋と親しき者と
 は我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命を求むる者
 は網を設け、我を損わんと欲する者は我が亡びのことを言うて毎日悪し
 き謀をたくむ。しかれども我は聾の如く聴かず、啞の如く己の口を開か
 ず。是に於いて我は聞かなく、その口答うる所なき人の如くなれり、け
 だし主よ、われ爾を待む、主我が神や爾聴き給わん。われかつて言えり、
 願わくは敵は我に勝たざらん。我が足のつまづかんとする時、彼らは我
 に向うて誇り高ぶる。我ほとんど倒れんとす。私の愛いは常に我が前に
 あり、我は我が不法を認め、我が罪の為に甚だ哀しむ。我が敵は生きて
 いよいよ強く、故なくして我を憎む者はますます多し。悪をもって我の
 善に報ゆる者は、我が善に従うによりて我の敵となれり。主我が神や我
 を捨つるなかれ、我に遠ざかるなかれ。主私の救主や速やかに来たりて
 我を救い給え。主我が神や我を捨つるなかれ、我に遠ざかるなかれ。主
 我が救主や速やかに来たりて我を救い給え。

「第 62 聖 詠」

神や爾は私の神なり、われ暁より爾を尋ぬ。我が霊は渴きて爾を望み、
 我が身は痛く爾を慕い、空しくして乾ける水なき地にあり。爾の能力と
 爾の光栄を見るは、われかつて爾を聖所に見しが如くならんを願う、け
 だし爾の憐れみは生命にまさる。我が口爾を讚美せんとす。かくの如く
 われ生ける時、爾を崇め讚め、爾の名によりて我が手を揚げん。我が霊
 の飽かざるること油をもってするが如く、我が口歎びの声にて爾を讚美
 す。床にて爾を記憶し、夜更に爾を思う時に於いてす。けだし爾は私の
 助けなり、爾が翼の蔭にてわれ欣ばんとす。我が霊は親しく爾に付き、
 爾の右の手は我を扶く。かの我が霊を損なわんことを謀る者は地の深き
 処に降らん。彼必ず刃に掛かりて狐の獲物とならんとす。ただ王は神の

為^{ため}に^{たの}しみ^まん。およそ彼^あれ^かを^もつて^{ちか}誓^{ちか}う^は者^はは^{ちか}誓^{ちか}を^得ん、^けだ^し偽^{いつわり}を^言う^者
 の^{くち}口^{ふさが}は^され^んと^す。夜^や更^{こう}に^雨を^思う、^けだ^し爾^{たす}は^我の^{つばさ}扶^{たす}け^なり、^雨が^翼
 の^{かげ}陰^{よろこ}に^てわ^れ欣^わば^んと^す。我^わが^{たましい}靈^{した}は^親しく^爾に^つ付^き、^爾の^右の^手は^我を
 扶^{たす}く。

光^{こう}榮^{えい}は^父と^子と^{せい}神^{しん}に^ま歸^きす、^いま^も何^{いつ}時^{とき}も^よ世^よ々^よに[、]ア^ミン。

ア^リル^イヤ、ア^リル^イヤ、ア^リル^イヤ、^{こう}神^{えい}や^光榮^{えい}は^爾に^ま歸^きす。(3回)

※ 他の三聖詠は「時課経」(64~71頁)を参照。

< 大 聯 誦 >

輔： 我^あ等^ん安^あ和^わに^して^主に^い祈^{いの}らん。



輔： 上^かより^だ降^ある^ん安^あ和^わと^我等^が我^た等^が靈^{たましい}の^{すく}救^たいの^た為^{ため}に^主に^い祈^{いの}らん。



(以下同じ)

輔： 全^あ世^ん界^かの^神の^{せい}聖^{なる}諸^{けんりつ}教^{ごういっ}会^のの^堅立[、]及^び衆^{じん}人^のの^合一^のの^為に^主に^い祈^{いの}らん。

詠： 「主憐れめよ」

輔： 此^この^{せい}聖^{だう}堂[、]及^び信^{しん}と^つ慎^{つし}と^か神^あを^{おそ}畏^るる^こ心^こと^をも^つて^こ此^こに^ま来^きた^る者^のの^為に^主
 に^い祈^{いの}らん。

詠： 「主憐れめよ」

輔： 教^{くわい}会^をを^しる^尊貴^{ぞんき}なる^我等^の東^{とう}京^{きやう}の^{だい}大^{しやう}主^{きやう}教[、]及^び全^ふ日^{じつ}本^{ぽん}の^ふ府^ふ主^{しやう}教^フエ^オド^シ
 イ、^し司^{じん}祭^のの^尊品[、]ハ^りス^トス^にに^か因^るる^輔祭^職、^{しん}悉^くの^{くわい}教[、]及^び衆^{じん}人^のの^為
 に^い祈^{いの}らん。

詠： 「主憐れめよ」

輔： 我が国の天皇及び国を司る者の為に主に祈らん。

詠： 「主憐れめよ」

輔： 此の都邑と凡の都邑と地方、及び信を以て此の中に居る者の為に主に祈らん。

詠： 「主憐れめよ」

輔： 気候順和、五穀豊穰、天下泰平の為に主に祈らん。

詠： 「主憐れめよ」

輔： 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、虜となりし者、及び彼等の救いの為に主に祈らん。

詠： 「主憐れめよ」

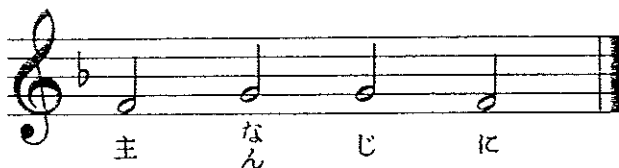
輔： 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが為に主に祈らん。

詠： 「主憐れめよ」

輔： 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐れみ護れよ。

詠： 「主憐れめよ」

輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。



司： 蓋凡そ光栄・尊貴・伏拝は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に。



フェロン 渡、大ローリック用意、アナロイ

輔： 主は神なり我等を照らせり、主の名によりて来る者は崇め讃めらる。
(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にしてその憐れみは世々にあればなり。

- (第2句) 彼ら我をかこ囲み、我をめぐれども、われ主の名をもってこれを敗やぶれり。
- (第3句) われ死しせず、なお生きて主の行いう所おこなを伝つたえん。
- (第4句) 工師こうしが捨すてし所ところの石いは屋隅おくぐの首石しゅせきとなれり、これ主のなす所ところにして我等われらの目めに奇異きいなりとす。

※ 「主は神なり・主日の讚詞」は「その週の調」を用いる。

祭日には「祭の讚詞」の調に合わせ「主は神なり」を歌う。

- 第1調の場合は……4 1頁の「主は神なり・主日の讚詞」を歌う。
- 第2調の場合は……4 2頁の // //
- 第3調の場合は……4 3頁の // //
- 第4調の場合は……4 4頁の // //
- 第5調の場合は……4 5頁の // //
- 第6調の場合は……4 5頁の // //
- 第7調の場合は……4 6頁の // //
- 第8調の場合は……4 7頁の // //

< 主は神なり・主日の讚詞 > (第1調)

主はかみなりわれらをてらせり主の名によって

きたるものはあがめほめらる きうせい 主や

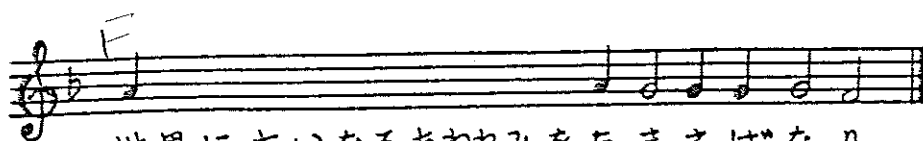
イウデヤの人はかをふじて兵卒汝のいさぎよきみを

ひかりにてじごくをころせり 死せしものを地下
より復活せしめしとき 天軍みな叫で言えり
生命を賜うの主よ わががみや光榮はなじにきす

※ 48頁の「主の名を讃め揚げよ」へ移る。

< 主は神なり・主日の讃詞 > (第3調)

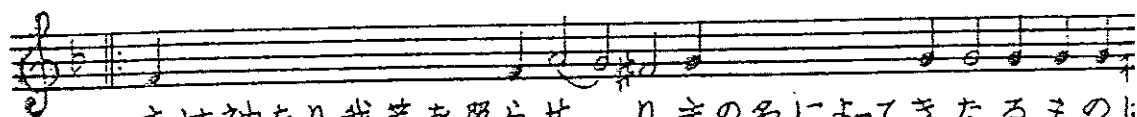
主は神なり我等をてらせり 主の名によつてきた
るものはあがめほめらる 天にあるもの
たのしめよ地にあるものよろこぶよ 主はそのひ
じのちからをあらわして死をもつて死をほろぼし
復活のはじめとなりわれらを地獄のはらよりすくい



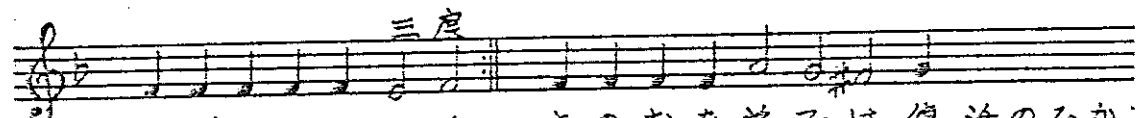
世界に^ホ大なるあわれみをたまえは^ナなり

※ 48頁の「主の名を讃め揚げよ」へ移る。

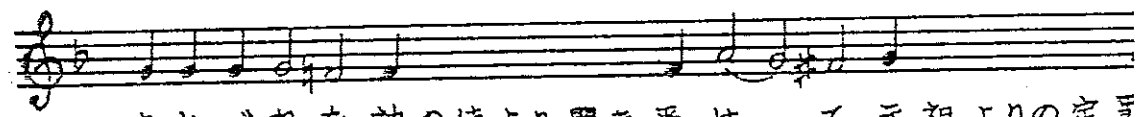
< 主は神なり・主日の^{トヨリ}讃詞 > (第4調)



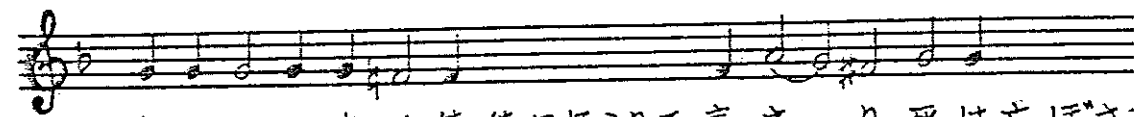
主は神なり我等を照らせ^テり主の名によつてきたるもの



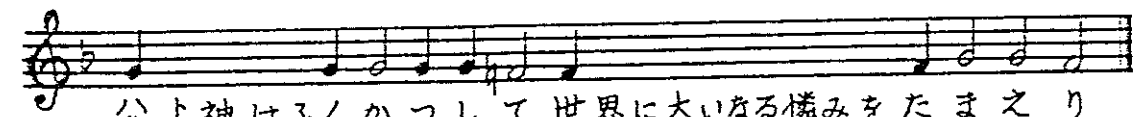
あがめほめらる^{三度}主のお^ホな^シ弟子は復^ツ治^{カツ}のひか



おとづれを神の使^ツより聞^キき愛^ウけて元祖^{ガンソ}よりの定^{テイ}等^{テイ}



をふるいすて使徒^{シト}にほこりて言^イえり死^シは^ホぼ^ホさ



分^ワり^ク主^ミは^ホく^クかつして世界に^ホ大^ホなる^ホ憐^レれ^レみを^ホたま^ホえ^レり

※ 48頁の「主の名を讃め揚げよ」へ移る。

< 主は神なり・主日の讃詞 > (第 5 調)

主はかみなり我等を照らせり主の名によって来たる
 ものはあがめほめらる 信者やうちとせいんと
 ともに始めなきことばわが救いのために驚てい
 より生まれしものをほめ歌うて拝むべしかれあまじ
 てその身にて十字架にのぼり死しその光栄の
 ふくかつにて死せしものを復活せしめたまえばなり

※ 48頁の「主の名を讃め揚げよ」へ移る。

< 主は神なり・主日の讃詞 > (第 6 調)

主は神なり我等を照らせり主の名によって来たるものは
 あがめほめらる 神使の算汝の墓にあらわれしに



 魚兵 死せるもののごとし マリヤ墓に立ちて汝のいさぎよき
イシシ



 体をたずね り汝は地獄にいさなわれずして地獄
カラダ



 とりこにし生命を賜うて怨女にあいたまえり死よ
イノチ



 復活せし主や光えいはなんじに帰す

※ 48頁の「主の名を讃め揚げよ」へ移る

汝若罪ゆる〜

爾等諸僕をたたく〜

< 主は神なり・主日の讃詞 > (第7調)



 主はかみなりわれらをてらせり主の名によ



 来たるものはあがめほめらる 三度 A
イトス



 汝は十字架にて死をほろぼしとぞくのために天堂
テンドウ



 ひらき携香女の悲しみをなぐさめ使徒になんじがふ
イコヨ

D

かつして世界におおいなるあわれみを賜いしをつたえ
ママ

させたまえり

※ 48頁の「主の名を讃め揚げよ」へ移る。

＜ 主は神なり・主日の讃詞 ＞ (第 8 調)

主はかみなりわれらをてらせり 主の名によつて来た
三度

るものはあがめほめらる めぐみふかき主や

なんじはたかきよりくだり 三日のほむりを受けて
ミツカ

我等を苦しみよりときたまえり 我がいのちとふく
ル

かつなる主や 光えいはなんじに帰す
ツク

※ 続いて「主の名を讃め揚げよ」を歌う。

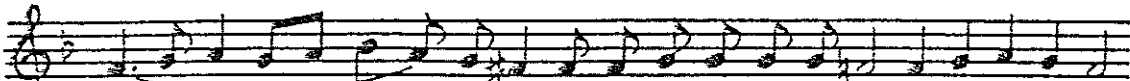
※ 蕩子・断肉・乾酪の各主日には
「第一百三十六聖詠」を挿入。

点灯、扉内、大ロ-ツクを持って
マナロイも一同

< 主の名を讃め揚げよ > 聖所に入り、香炉と手持ロ-ツク



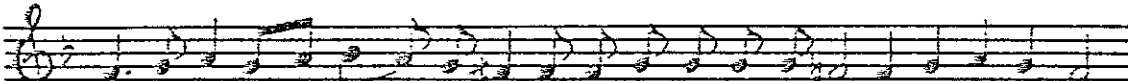
主の名をほめあげよ主のよほくやほめあげよ



ア リルイヤーリルイヤーリルイヤー



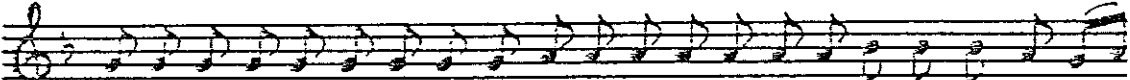
イエルサリムにましますの主はシオンにあがめほめらる



ア リルイヤーリルイヤーリルイヤー



主をととみほめよ アリルイヤー リルイヤー



かれは仁慈にしてそのあわれみは世世にあれば



なりアリルイヤー 天のかみをととみほめよ



アリルイヤー リルイヤーそのあわれみは世



世にあれば なりアリルイヤー

< 主や爾は崇め讃めらる >

(祭日の場合には「祭日の讃歌」を歌う)

主や汝はあがめほめらる 汝の誠を我れに教えたまえ
イマシメ

きう世主や神の使の翼 は汝が死者の内に入れど
カミ ヲソイ タン シヨウ ウチ イ

死の力を亡ぼしアダムをおのれと共におこ しまろびと
ナカフ ホロ

を地獄よりすくいたまいしを見ておどろけ り
ゲツ

主や汝はあがめほめらる 汝の誠を我れに教えたまえ
イマシメ

墓の中に光る神のつかいは携香女に言えりおな弟子や
ウチ カイ コウジョ テシ

何ぞ香料を悲しみの涙にまじゆるや墓を見てさとれよ
アン コウリョウ ハカ

救世主は、はかよりふくかつせ り 光榮は父と
キョウセイシュ

子と聖神にきす 父とその子とせい神 一体の聖三者を
シ

徹夜祈「主や汝は崇め讃めらる 欠落部分 (P49 ^{水色の聖歌譜では})

一救世主ははかよりふかつせり (戻る) ㊦

主や汝はあがめほめらる 汝の誠を我れに教えたまえ

携香女は朝早くなきて汝の墓にゆきしに
神の使いその前に立ちて言えり「なくの時すぎたり
涙をとどめて使徒にふかつをつぐべし」(戻る) ㊦

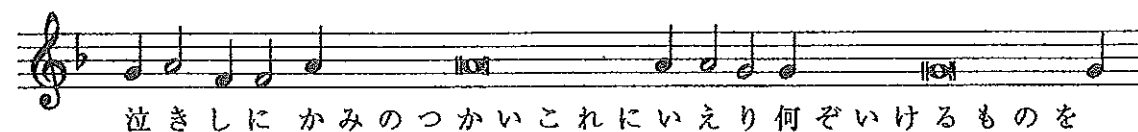
主や汝はあがめほめらる 汝の誠を我れに教えたまえ

救世主や

携香女は香料をたずさえ汝の墓に来たりてなきしに
神の使いこれにいえり「なんぞ生ける者を死者の内にあると思ふ
彼は神として墓より復活せり。」

→「光荣は父と子と聖神に歸す」に移る。

(49頁下から二段目の「光榮は」の前に入る)



(49頁下から2段目の光榮に戻る)

おがみて セラフ とともに 叫ばせいせいせいなる

かな主 や 今もいつも世世にアミン 驚てい女やな

は生命を賜うの主を生みて アダムを罪よりすくいエ

に悲しみにかえて喜をたまえり汝に身をとりにしがみびと

生命をおとせしものをひきいてまたいのちにむかわせ

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみやこら えい

三度繰返
なんじに帰す

香炉受 → 至聖所に置く

< 小 聯 禱 >

輔： 我等復又安和にして主に祈らん。

主 あ わ れ め よ

輔： 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐れみ護れよ。



主 あ わ れ め よ

輔： 至^{しせい}聖^{しけつ}至^{いた}潔^{さんび}にして至^{こうえい}りて讚^{じょさい}美^{しょうしんじょ}たる我^{えい}等の光^{えい}栄^{えい}の女^{にょ}宰^{さい}・生^{せい}神^{しん}女^{じょ}・永^{えい}貞^{てい}と
 やと、諸^{しよ}聖^{せい}人^{じん}とを記^{おのれ}憶^みして、我^{わが}等^{おのおの}己^かの身^み及^まび互^{あひ}いに各^{もつ}の身^みを以^{もつ}て、
 に悉^{ことごと}くの我^{いのち}等^まの生^ま命^まを以^{かみ}て、ハリス^{かみ}トス^{いたく}神^{かみ}に委^{いたく}託^{かみ}せん。



主 な ん じ に

司： 蓋^{けだし}爾^{さいしん}父^なと子^{さん}と聖^{さん}神^{よう}の名^なは讚^く揚^{さん}せられ、爾^くの国^{さん}は讚^{えい}栄^{えい}せらる、今^いも何^{いつ}時^{いつ}も
 世^よ々^よに。



ア ミン

※ アンティフォン 「倡和詞とボロキメン」は、「その週の調」を用いる。

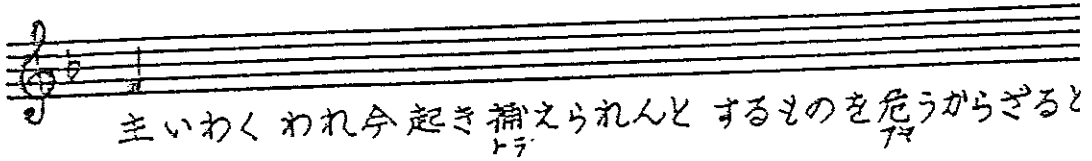
祭日には「祭日經」の指示に従う。

- | | | |
|--------------|---------|------------------|
| 第1調の場合は…52頁の | アンティフォン | 「倡和詞・ボロキメン」を用いる。 |
| 第2調の場合は…53頁の | // | // |
| 第3調の場合は…54頁の | // | // |
| 第4調の場合は…54頁の | // | // |
| 第5調の場合は…55頁の | // | // |
| 第6調の場合は…56頁の | // | // |
| 第7調の場合は…57頁の | // | // |
| 第8調の場合は…58頁の | // | // |

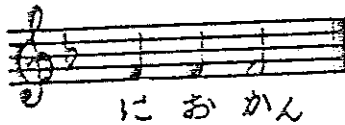
アンティフォン
 < 偈和詞・ボロキメン > (第 1 調)

誦： 我^わが^{うれ}愛^いの時^{とき}、我^わの^{なげき}痛^き嘆^きを^{たま}聴^き給^ええ、主^{なんじ}よ、われ^{なんじ}爾^に呼^ぶぶ。
 野^のに^お居^るりて^{むな}虚^しき^よ世^よの外^{ほか}に^あ在^るる者^{もの}には^{つね}恒^にに^{しんせい}神^{せい}聖^{なる}なる望^{のぞみ}あり。
 光^{こう}榮^{えい}は^{ちち}父^とと^こ子^とと^{せいしん}聖^に神^にに^{かへ}帰^すす、今^{いま}も^{いつ}何^い時^つも^よ世^よ々^よに、ア^あミ^ん。
 聖^{せい}神^{しん}には^{ちち}父^及び^こ子^とと^{ひと}均^{ひと}し^きき^{そんけい}尊^{ごん}敬^{けい}と^{こうえい}光^{こう}榮^{えい}とは^あ適^あう。故^{ゆえ}に^{どういつけん}我^{われ}等^ら同^{どう}一^{いつ}權^{けん}能^{のう}の
 三^{さん}者^{しや}を^{うた}歌^わん。

輔： 睿^{えい}智^ち、ボ^ぼロ^ろキ^きメ^ん。
 主^い曰^わく、われ^{いま}今^お起^きき、^と捕^とら^えら^れん^とと^{する}者^をを^{あや}危^あう^から^ざる^所に^お置^かが

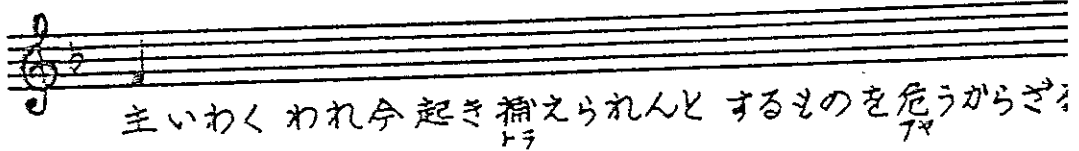


主^いわ^くわ^れ今^{いま}起^きき^と捕^とら^えら^れん^とと^{する}もの^をを^{あや}危^あう^から^ざる^とと

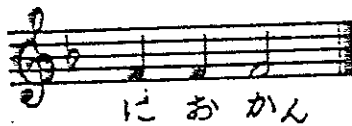


に^おか^ん

輔： 主^{ことば}の^{きよ}言^{ことば}は^{きよ}浄^きき^{ことば}言^{なり}なり。

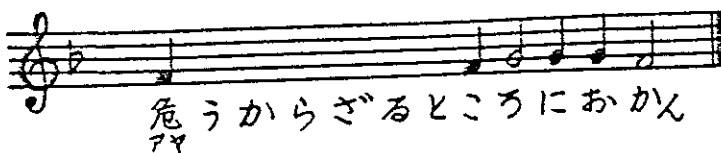


主^いわ^くわ^れ今^{いま}起^きき^と捕^とら^えら^れん^とと^{する}もの^をを^{あや}危^あう^から^ざる^とと



に^おか^ん

輔： 主^い曰^わく、われ^{いま}今^お起^きき、^と捕^とら^えら^れん^とと^{する}者^をを、

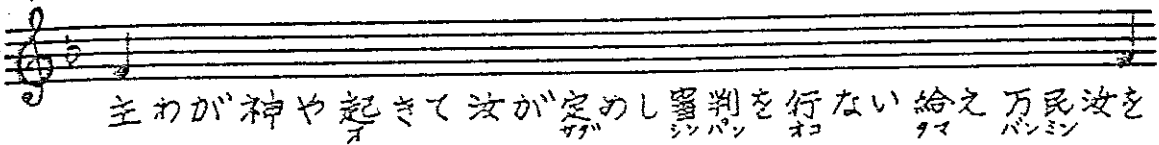


危^あう^から^ざる^とと^{ころ}に^おか^ん

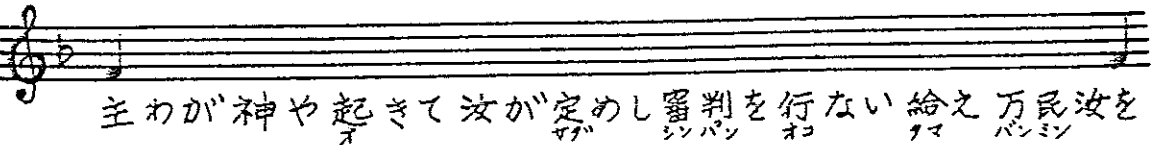
アンティフォン
 < 倡和詞・ボロキメン > (第 2 調)

誦： 救世主よ、我が心の目を天に爾に挙ぐ、爾の光照にて我を救い給え。
 ああ、わがハリストスよ、時毎に多く爾に罪を犯せる我等を憐れみて、
 終わりの前に爾に痛悔する法を与え給え。
 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。
 聖神には牽制し、聖を施し、造物を活動せしむること適う、父及び子と
 一性の神なればなり。

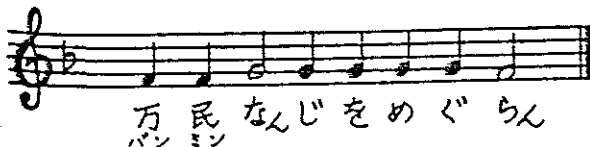
輔： 睿智、ボロキメン。
 主我が神よ、起きて、爾が定めし審判を行い給え、万民爾をめぐらん。



輔： 主我が神よ、われ爾を頼む、我を救い給え。



輔： 主我が神よ、起きて、爾が定めし審判を行い給え、



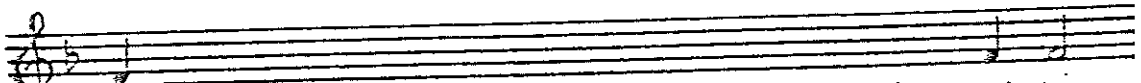
※ 59頁の「主に祈らん」へ移る。

アンティフォン
 < 偈和詞・ボロキメン > (第 3 調)

誦： 言よ、爾はシオンの腐をワヴィロンより引き出だせり、我をも諸欲より
 生命に引き寄せ給え。南風の時に神聖なる涙をもつて蒔く者は、喜びを
 もつて永生の穂を刈る。

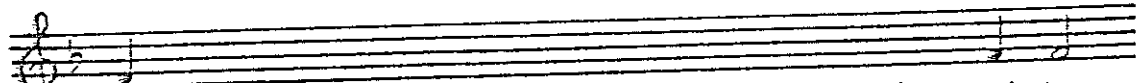
光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。
 聖神には凡の善き賜は属す、けだし彼は父及び子と共に輝き、万物は彼
 によりて生き且つ動く。

輔： 睿智、ボロキメン。
 諸民に言うべし、主は王たり、故に世界は堅固にして揺かざらん。



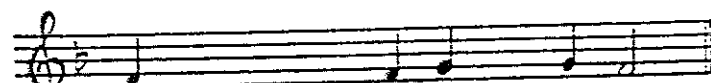
諸民にいうべし主は王となり世界けんごにして動かざらん

輔： 新たなる歌を主に歌え、全地よ、主に歌え。



諸民にいうべし主は王となり世界けんごにして動かざらん

輔： 諸民に言うべし、主は王たり、



世界けんごにしてうごかざらん

※ 59頁の「主に祈らん」へ移る。

アンティフォン
 < 偈和詞・ボロキメン > (第 4 調)

誦： 我が幼き時より多くの欲は我を攻む、わが救世主よ、爾自ら我を守りて
 救い給え。シオンを悪む者は主より辱めを受けよ、爾等草の火に於ける

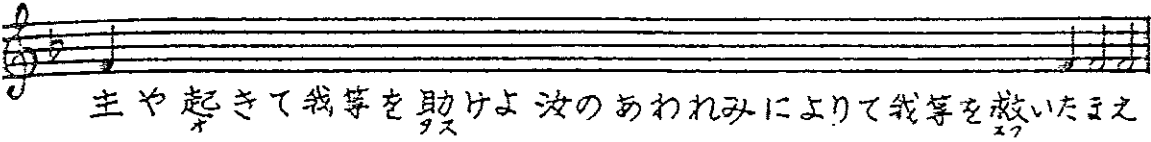
が如く枯らされんとすればなり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

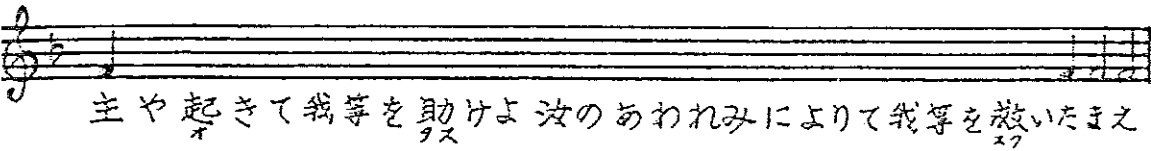
聖神にて凡の靈は活かされ、清浄をもっていよいよ上り、三位の一体にて奥密にて照らさる。

輔： 睿智、ボロキメン。

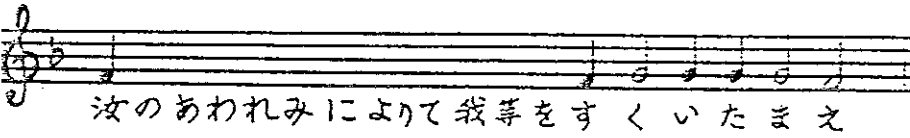
主よ、起きて我等を助けよ、爾の憐れみによりて我等を救い給え。



輔： 神よ、我等は己の耳にて聞けり。



輔： 主よ、起きて我等を助けよ、



※ 59頁の「主に祈らん」へ移る。

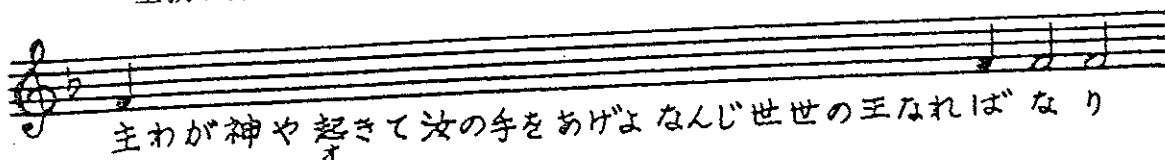
アンティフォン
< 偈和詞・ボロキメン > (第5調)

誦： わが救世主よ、われ憂いの中にダヴィドの如く爾に歌う、わが靈を欺きの舌より免れしめ給え。野に居る者の生命は福なり、彼等は神聖なる愛に励まさる。

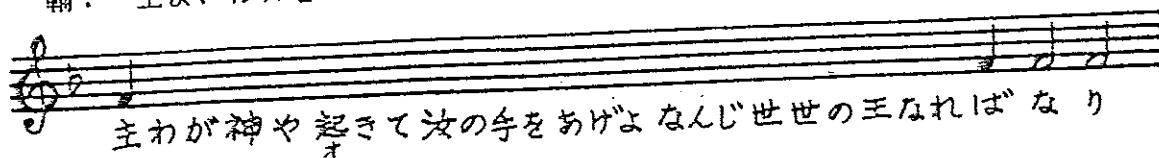
光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

聖神にて見ゆると見えざる者はことごとく保たる、彼は実に聖三者の一にして、全能の主なればなり。

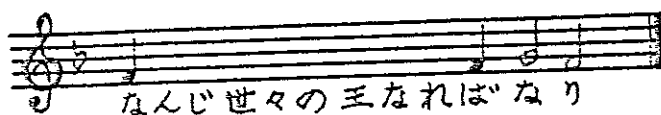
輔： 睿智、ボロキメン。
主我が神よ、起きて爾の手を挙げよ、爾世々の王なればなり。



輔： 主よ、われ心を尽くして爾を讃め揚げ、爾がことごとくの奇跡を伝えん。



輔： 主我が神よ、起きて爾の手を挙げよ、

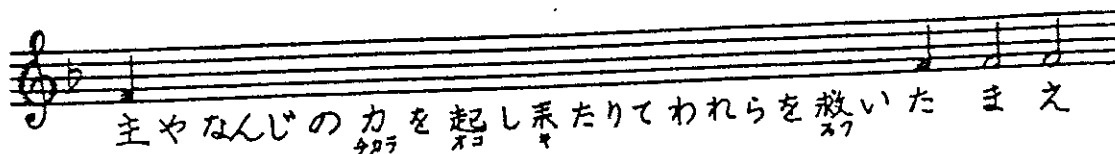


※ 59頁の「主に祈らん」へ移る。

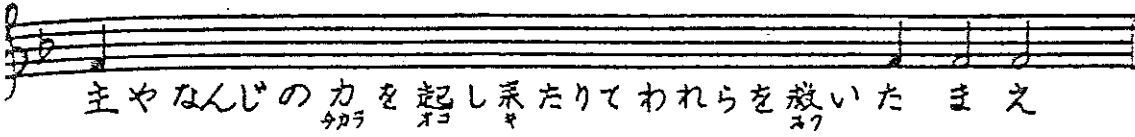
アンティフォン < 偈和詞・ボロキメン > (第6調)

誦： 言よ、われ目を天に爾に挙ぐ、我を恵みて、爾の為に生くるを賜え。言
よ、我等卑しき者を憐れみて、爾の用に適する器となし給え。
光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。
聖神には救いの基備われり、彼堪うる者に吹けば、速やかにこれを地よ
り挙げ、これを飛ばしめ、これを長ぜしめて、上に昇らせ給う。

輔： 睿智、ボロキメン。
主よ、爾の力を興し、来たりて我等を救い給え。

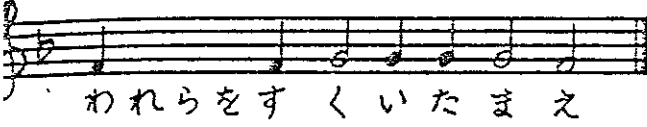


輔： イズライリの牧者よ、^{ぼくしや} 耳を傾けよ、^{かたむ} イオシフを羊の如く導く者よ、^{ひつじ ごと おちび} 己を^{おのれ} 頭せ。^{あらか}



主やなんじの力を起し来たりてわれらを救いたまえ
ウカラ オコ キ スク

輔： 主よ、爾の力を興し、来たりて、



われらをすくいたまえ

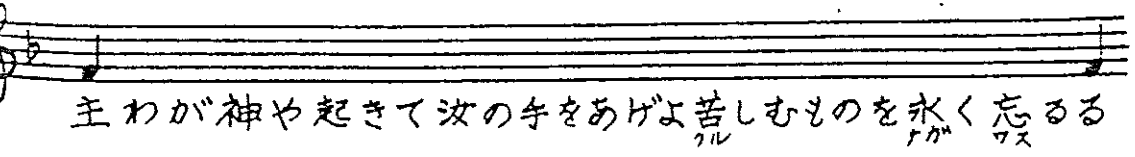
※ 59頁の「主に祈らん」へ移る。

アンティフォン < 偈和詞・ボロキメン > (第7調)

誦： シオンの^{とりこ} 虜を迷いより返しし救世主よ、^{まよ} 我をも生かして、^{かえ} 欲の奴役より^{きょうせいしゅ} 脱れしめ給え。南風の時に^い 斎と涙とをもって^{よく どなき} 悲しみを^{たま} 詩く者は、^{なみだ} 喜びを^{かな} もって^ま 永生の^{えいせい} 糧の^{かて} 束を刈らん。^{たば}

光栄は父と子と^{せいしん} 聖神に帰す、^ま 今も何時も^{いっ} 世々に、^{よよ} アミン。
 聖神には^{せいしん} 神聖なる^{しんせい} 宝の^{たから} 泉あり、^{いずみ} 彼より^{えい} 睿智、^ち 知識、^{ちしき} 敬畏は^{けい} 賜る。^い 彼に^{たま} 讚^{さん} 美と^び 光栄、^{きんけい} 尊敬と^{けんべい} 権柄は^ま 帰す。

輔： 睿智、ボロキメン。
 主我が神よ、起きて、爾の手を挙げよ、苦しめらるる者を永く忘るるな
 かれ。

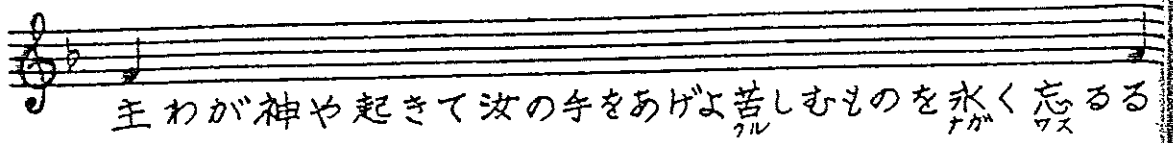


主わが神や起きて汝の手をあげよ苦しむものを永く忘るる
ケル フク

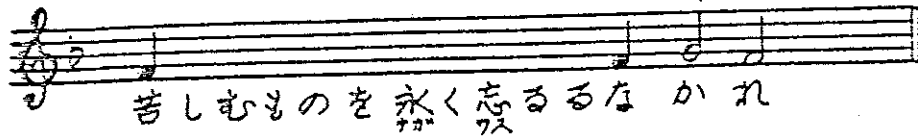


なかれ

輔： 主よ、われ心を尽くして爾を讚め揚げ、爾がことごとくの奇跡を伝えん。



輔： 主我が神よ、起きて、爾の手を挙げよ、



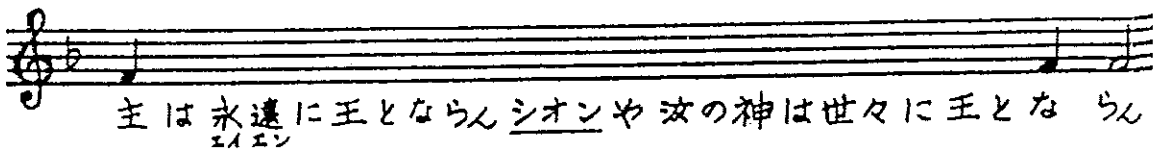
※ 59頁の「主に祈らん」へ移る。

＜ アンティフォーン ・ ポロキメン ＞ (第 8 調)

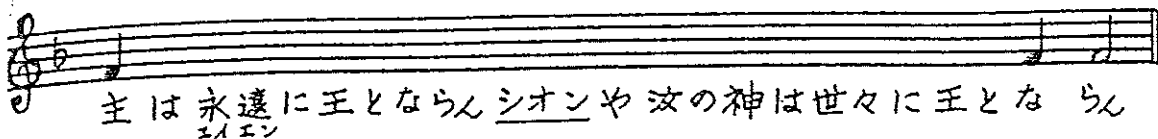
誦： わが幼き時より敵は我を誘い、逸楽にて我を焦がす、主よ、われ唯爾を頼みてこれに勝つ。シオンを悪む者は抜かるる前の草の如し、けだしハリストスは苦しき切断をもって彼等の首を斬らん。
 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。
 聖神によりて万有は生く、彼は光よりの光にして、大いなる神なり。我等彼を父及び言と共に崇め歌う。

輔： 睿智、ポロキメン。

主は永遠に王とならん、シオンよ、爾の神は世々に王とならん。



輔： 我が^{わ たましい}霊よ、主を^{ほ め}讃め揚げよ。われ^い生けるうち主を^{ほ め}讃め揚げん。



輔： 主は永遠に王とならん、シオンよ、爾の^{かみ}神は、



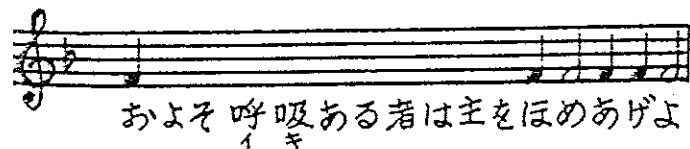
輔： 主に祈らん。



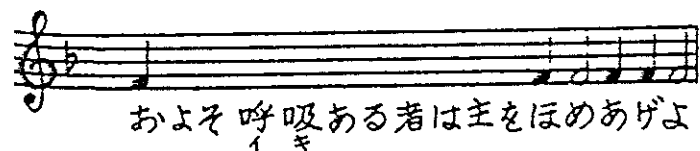
司： 蓋我が^{けだし}神や、爾は^{なんじ}聖にして^{せい}聖なる者の中に居る、我等^{われら}光栄を爾父と
子と^{せいしん}聖神に^{けん}献ず、今も^{いつ}何時も^{よよ}世々に。



輔： 凡そ^{およ}呼吸^{いき}ある者は主を^{ほ め}讃め揚げよ。



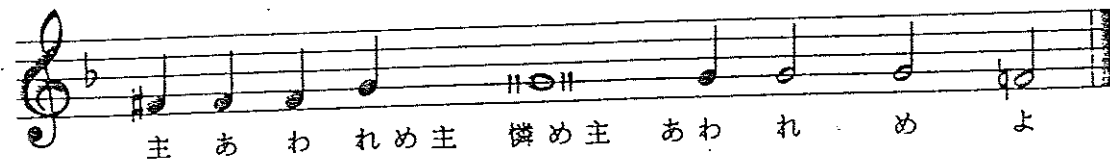
輔： 神をその^{せいしょ}聖所に^{ほ め}讃め揚げよ、彼をその^{おそろ}有力の穹蒼に^{ほ め}讃め揚げよ。



輔：^{なほ いま}凡そ呼吸ある者は、



輔：我等に聖福音經を聴くを賜^{たま}うを主・神に祈らん。

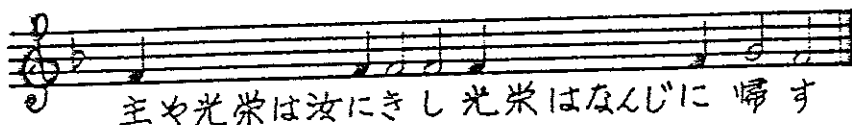


輔：^{いさ つ}睿智、謹みて立て、聖福音經を聴くべし。

司：衆人に平安。



司：（某）伝の聖福音經の読み。



輔：謹みて聴くべし。

司：（司祭は「聖福音經」を規定の順番に従って朗誦する。）

※ 司祭は、順番に従って「聖福音經」を読む。

祭日にはその祭日の「聖福音經」を読む。

第 1 福音 …………… マトフェイ 28:16~20

第 2 福音 …………… マ ル コ 16:1~8

第 3 福音 …………… マ ル コ 16:9~20

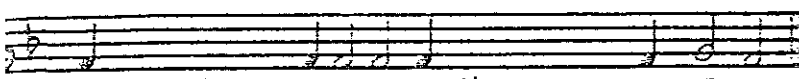
第 4 福音 …………… ル カ 24:1~12

第 5 福音 …………… ル カ 24:12~35

- 第 6 福音 ル カ 24:36~53
- 第 7 福音 イオアン 20:1~10
- 第 8 福音 イオアン 20:11~18
- 第 9 福音 イオアン 20:19~31
- 第 10 福音 イオアン 21:1~14
- 第 11 福音 イオアン 21:15~25

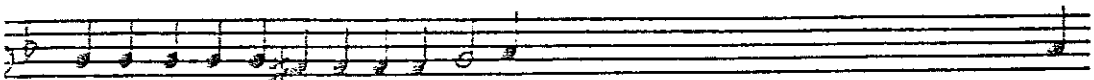
〈 主や光栄... 〉 ・ 〈 ハリストスの復活を見て 〉

(祭日には“祭日経”の指示に従う)




主や光栄は汝にきし 光栄はなんじに 帰す

手持のり受り聖所



ハリストのふくかつをみて 聖なる主 イイスス 独り 罪なきものを



おがむべ し ハリスト や我等なんじの十字架をあが み



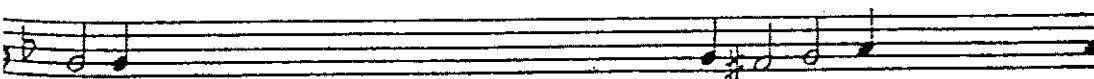
汝の聖なる復活をうたいほむ 汝は我等の神なれば



なり 汝の外他の神を知ら ずただ汝の名をとの



信者やみな来たりて ハリスの 聖なる復活を捧むべ し



十字架にてよろこびは全世界にのぞめり 我等つねに主を

ほめあげてその復活をあげめうた ね主は十字架

釘うたるるましのびて死をもって死を亡ぼせしに よる

※「 光えいはきちとことせいしに 帰す あわれみ

ふかき主や聖使徒の祈禱によつて我等の多くの罪

きよめたまえ いまもいつも世世に

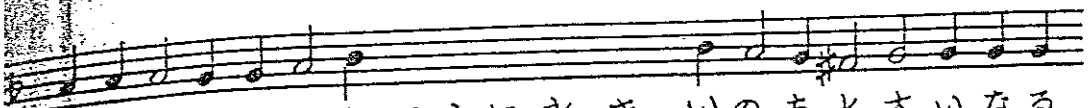
アミン あわれみふかき主や至聖なる生神女の祈

によつて我等の多くの罪をきよめたまえ

神や汝のいなるあわれみによつてわれをあわれ

なんじのめぐみの大きによつてわれの不法を消

たまえ あらかじめ言ひしがごとく イイススはかよ



ふんかつしてわれらに永ながきいのちと大オオいなる

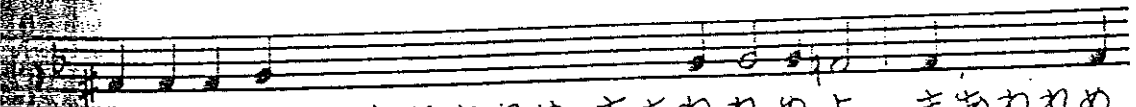


あわれみをたまえり

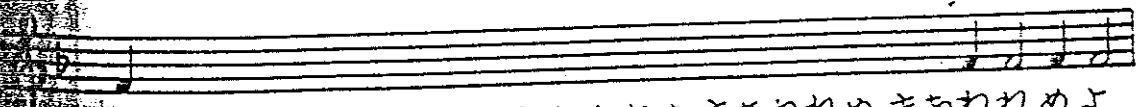
【註】 ※ 印の箇所は、税吏とファ
リセイの主日から大斎第五
主日まで、〈ファリセイの
光栄〉(176 頁)を用いる。

編:

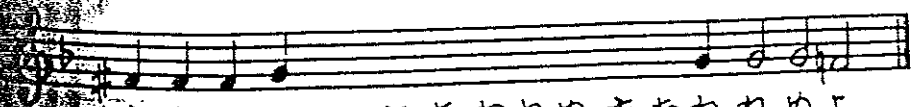
神かんじや爾たかの民を救い、及び爾しぎょうの嗣業ふくに福うだを降たまし給え、慈憐じれんと洪恩こうあんとをもつ
て爾の世界せかいに臨のぞみ、正教せいぎょうのハリスティアニン等らの角つのを高たかうし、我等われらに爾
の豊ゆたかかなる憐あはれみを垂たれ給たまえ、至浄しじようなる我等われらの女宰じよさい・生神女しょうしんじよ・永貞えいでいどうじよ重女じゆうじよマ
リヤの祈いのちりと、生命せいめいを施ほどこす尊とうとき十字架じくげの力ちからと、無形むけいなる尊てんぐんき天軍てんぐん、光栄
なる尊よげんしやき預言者ぜんく・前驅ぜんく・授洗じゆせんイオアン、光栄きようにして讚美さんびたる聖使徒せいしと、我
等われらの聖神せいじん父ふ・世界せかいの大教師だいぎょうし・成聖せいせいしや者しや・大ワシリイ、神学しんがく者しやグリゴリイ、
金口きんこうイオアン、我等われらの聖神せいじん父ふミラ・リキヤの大主教だいしゅきやう・奇蹟きせきしや者しやニコライ、
我等われらの聖神せいじん父ふ全ぜんロシアろしやの奇蹟きせきしや者しやバトル、アレキシイ、イオナ、フィリッ
プ、我等われらの聖神せいじん父ふイルクツクの主教しゅきやう・奇蹟きせきしや者しやインノケンティイ、光栄きような
る凱旋がいせんの聖致命せいちめいしや者しや、克肖こくしやう捧神ほうしんなる我われが諸神しよしん父ふ、聖せいにして義ぎなる神かみの祖父そふ
母はイオアキム及びアンナ、(当日あしと記憶きやくする聖人せいじん・某たつ)、巫使徒いしと日本にっぽんの大
主教しゅきやうせい聖せいニコライ、及びことごとくせいじんの聖人せいじんの伝達でんたつによりて、大仁慈だいじんじの主しやや、
爾われらに求もとむ、我等われら罪人ざいにん爾われらに祈いのちる者しやに聴あかき納なれて、我等われらを憐あはれめよ。



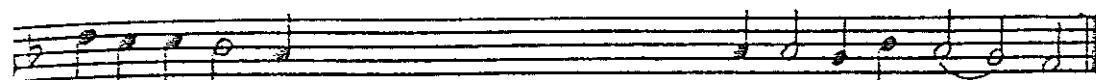
主あわれめ、主あわれめ、主あわれめよ 主あわれめ。



主あわれめ、主あわれめ、主あわれめ、主あわれめ、主あわれめよ。



主あわれめ、主あわれめ、主あわれめよ



のために 新たなる 深水の路を開きたまえばなり
アラ フカミ ミチ ヒラ

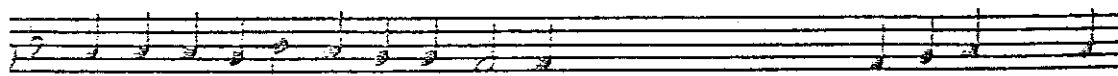
誦： 主よ、なんじ 光栄は爾の聖なる復活きに帰す。

はじめ しじょう 原始に至浄なる手にて神かみの力をもつて我を土より作りし主は、十字架に
 手を伸べて、どうていじょ 童貞女より取りし我が朽ち易き身つちを土より呼び起こせり。
 光栄は父と子と聖神せいじんに帰す、今も何時も世々に、アミン。

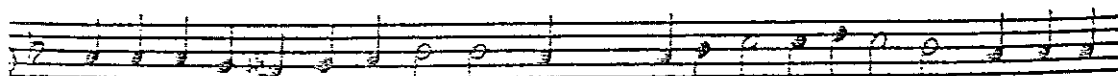
(3)



ひとりひとの性せいのよわきを知しつてあわれみを以もつて



これを衣きたるものやわれに上うへよりのちからをおびて汝



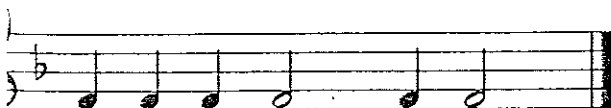
に呼よばし めたまえ人をいつくしむの主やなんじは



言こといがたき汝の光栄の聖せいにしていけるみやなり

< 小 聯 禱 >

誦： 我等復又安和またまた あんわにして主いのに祈らん。



主 あ わ れ め よ

誦： 神や、なんじ おんちよう 爾の恩寵を以て、我等をたす 助け救い憐れみあわ 護れよ。



輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等に光栄の女宰・生神女・永貞童女マ
 リヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身をもって、
 並びにことごとくの我等の生命をもって、ハリストス神に委託せん。



司： 蓋爾は我等の神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も
 世々に。



(4)



誦： 主よ、光栄は爾の聖なる復活に歸す。
 この救主、エドムより出で、いばらの冠をこうむり、血に染みたる衣を

ま、木にかかれる者は誰ぞ、これイスライリの聖なる者、我等を救い改
むる主なり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

(5)

おのれの降臨ツクリンのひかりにてせかいのはてを
てら しおのれの十字架にてこれをかがや
かせ しハリストスやなんじが知恵チエのひか
りにてただしくなんじをうたうもののこころを
てらしたまえ

誦： 主よ、光栄は爾の聖なる復活キに帰す。

イウデヤ人は大いなる羊の牧者及び主を十字架の木にて殺したれども、

彼は地獄ジゴに葬られたる死者シゴを羊の如く死シの権ケンより救い給えり。


光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

(6)

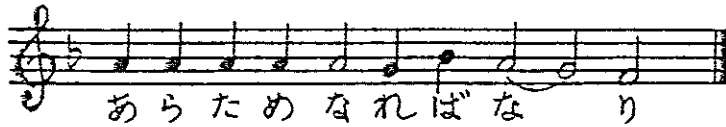
今を限カギリの淵フチはわれらをかこめりのがれしむるもの



なし我等は屠所のひつじのごとしわがかみや



なんじのたみをすくえなんじは弱るものちからと



あらためなればなり

< 小 聯 禱 >

輔： 我等復又安和にして主に祈らん。



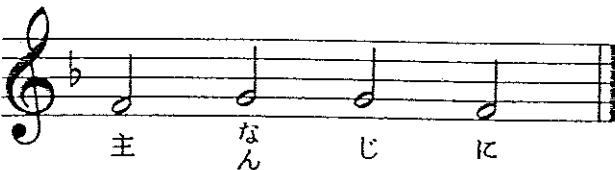
主 あ わ れ め よ

輔： 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐れみ護れよ。



主 あ わ れ め よ

輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等に光栄の女宰・生神女・永貞童女マ
 リヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身をもって、
 並びにことごとくの我等の生命をもって、ハリストス神に委託せん。



主 なん じ に

司： 蓋爾は平安の王及び我が霊の救主なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献
 ず、今も何時も世々に。



< 小讃詞〔コンダク〕 > (第 1 調)

主宰よ、爾は神なるによりて^{うら}光栄の中に^{とこ}喜より復活し、世界をも共に復
 活せしめ^{たま}給えり。人の性は爾を神として^ほ讃め^{うた}歌い、死は滅ぼされ、アダ
 ムは^{たの}しみ、エワは今^{いま}縛より^な釈かれて、^{よろこ}歓びて呼ぶ、ハリストスよ、爾
 は^{しゅうじん}衆人に復活を^{たま}賜う主なり。

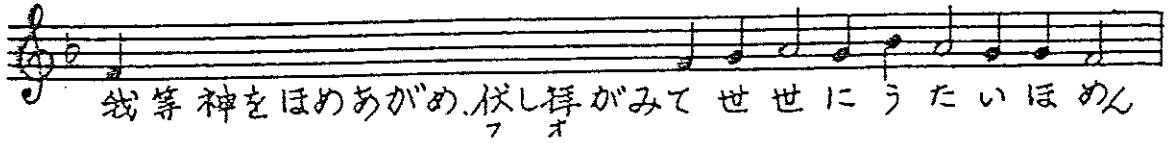
(7)

生神 女やわれら信者はなんじをみてたましい
 あるいろりとなす尊とまるるものが三人の少者を
 すくえるごとく先祖のあがめほめらるる
 かみはなんじのはらにおいて念世かいをあらた
 めたまえはなり

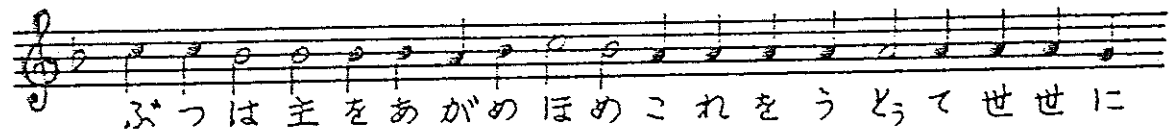
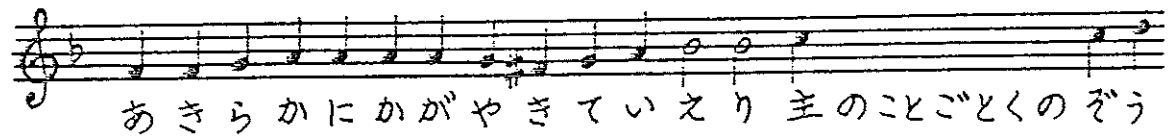
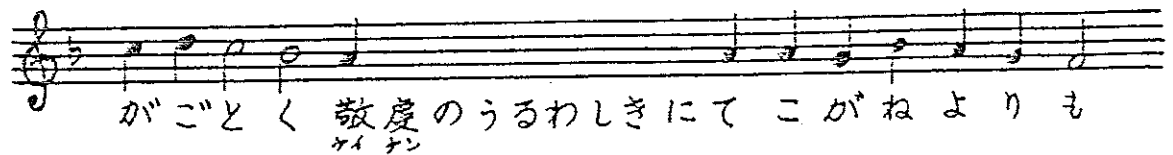
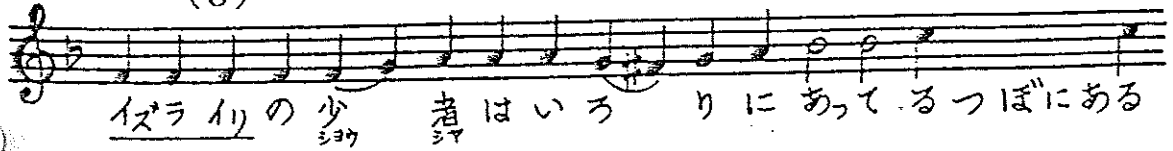
主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す。
 地は畏れ、日は隠れ、光は暗み、殿の神聖なる幕は裂け、石は砕けたり、

義なる者にして、先祖の尊まれて崇め讃めらるる神が十字架にかけ給
えばなり。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。



(8)



誦： 主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す。

己の旨に従いて万物を造り、又これを變化し、己の苦しみにて死の蔭を
変えて永遠の生命となす神の言よ、我等ことごとくの造物は絶えず爾を
主として歌いて、万世に讃め揚ぐ。

父と子と聖神の一なる神を讃め揚げん、今も何時も世々に、アミン。

輔： 生神女、光の母を讃め歌をもつて讃め揚げん。

< 我が心は主を崇め >

わが心は主をあがめ わがたましいは神わが救主を

よろこぶ ヘルヴァムよりとくとく セラフィムに

ならびなくさか えみさおをやぶらずして神言を

うみ し実の生神女たるなんじをあがめほむ

その婢のいやしきを顧みたまえり今より万世われを

さいわいなりといわぬ ヘルヴァムよりとくとく セラフィム

に並びなくさか えみさおをやぶらずして神言を

うみ し実の生神女たるなんじをあがめほむ

カをもち給えるものはわが為に大いなることをなせり

その名は聖なりその憐みは世世かれを畏るもの^{アツレ}にのぞま^{ホツ}

ヘルヴムよりとと くセラフィムに並びなくさか え

みさおをやぶらずして神言^{カミ}をうみ^{コバ} し実^{ジツ}の生神女

たるなんじをあがめほむ そのひじの力をあら^{カハラ}

わして心のおごれるものを散らしたまえり ヘルヴム

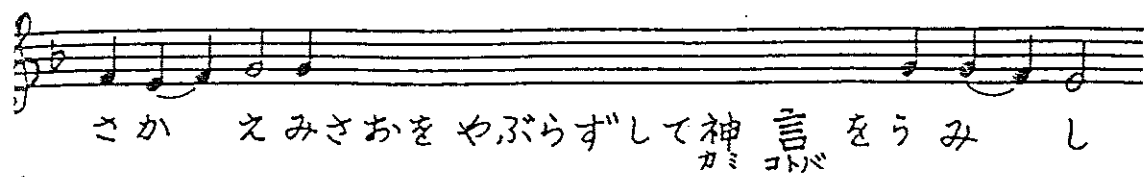
よりとと くセラフィムに並びなくさか えみさおを^{ナラ}

やぶらずして神言^{カミ}をうみ^{コバ} し実^{ジツ}の生神女たるなんじ

をあがめほむ 権^{ケン}あるものを位^{ライ}より退^{シツ}けいやしきもの

をあ げうるものを善^{ゼン}にあかせ富^トめるものを空^{ムナ}しく返^{カエ}らせ

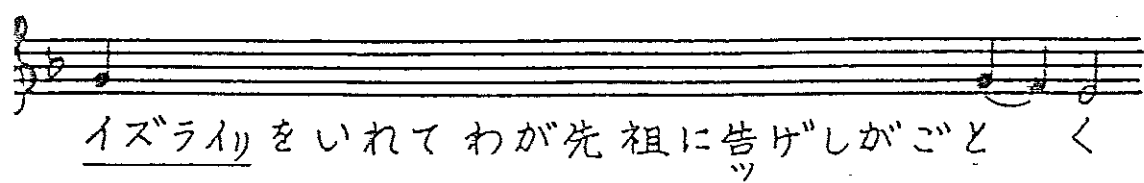
たまえり ヘルヴムよりとと くセラフィムに並びなく^{ナラ}



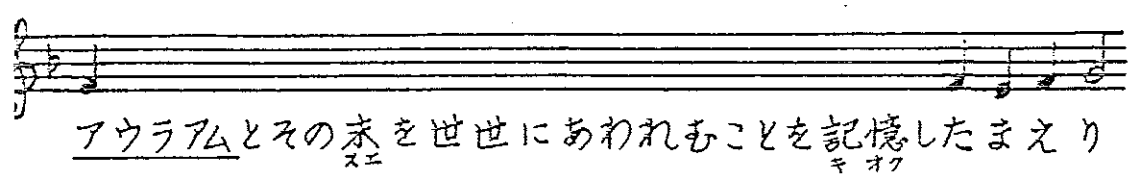
さか えみさおをやぶらずして神言ガミ コトバをうみ し



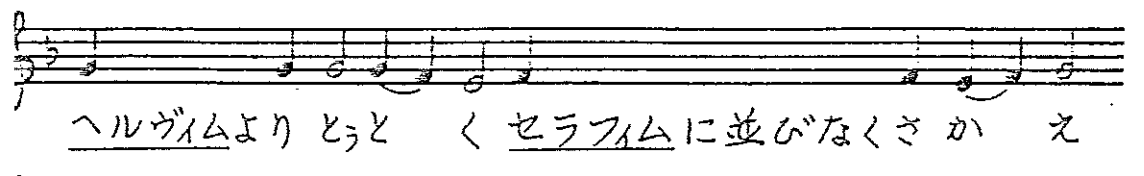
実の生神女たるなんじをあがめほむ そのぼく



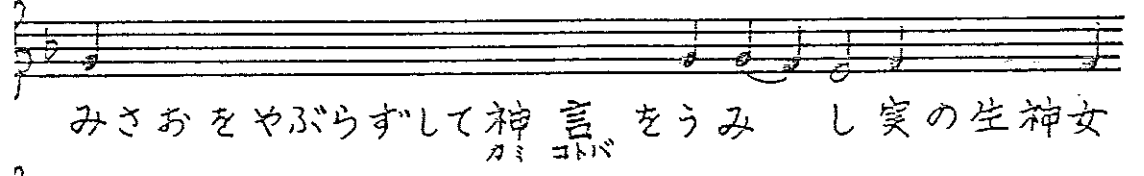
イスラ^イムをいれてわが先祖に告げツしがごとく



アウラムとその末スエを世世にあわれむことを記憶キヨクしたまえり



ヘルガイムよりとくとくセラフムに並びなくさかえ



みさおをやぶらずして神言ガミ コトバをうみ し実の生神女



たるなんじをあがめほむ

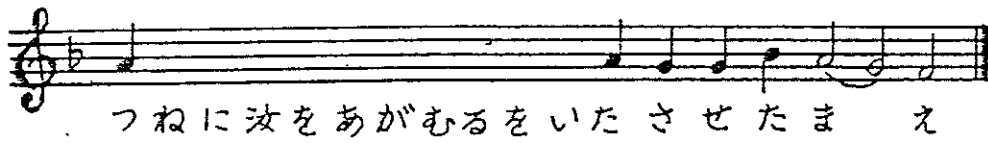
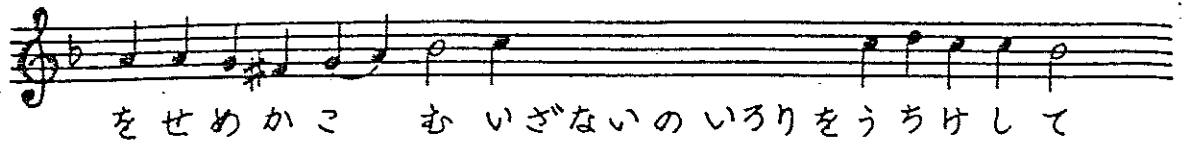
(9)



生神女 やもゆれども焼ヤかれぬいばらは



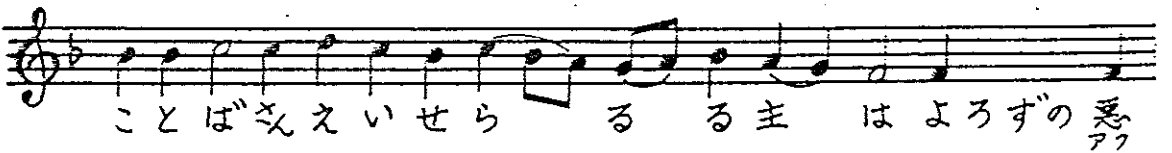
汝がいさぎよき産サンの形カタをあらわせり 祈る今もわれら



※ 145頁の「小聯禱」へ移る。

< 主日の規程〔カノン〕 > (第 2 調)

(1)



誦： 主よ、^{なんじ}光栄は爾の^き聖なる復活に歸す。
 至^{しぜん}善なる主よ、^よ世の君、我等が爾の^{いましめ}誠^{まこと}に背きて服従せし者は爾の^{けん}十字架
 にて^{ていざい}定罪せられたり、^{けだし}けだし死に属する者となして爾に^ふ触れて、爾の^{けん}権
 能によりて^{けん}権を失い、^{あらか}弱き者と^{あらわ}顛れたり。
 光栄は父と子と^{せいしん}聖神に歸す、^{いづ}今も何時も^よ世々に、アミン。

(3)

主やあれ^テ地のごとく^ミ冥を結ばざる^{ムス}異邦の教^{イ・ホウ} かい^{キョウ}は
 なんじの来^キ たるによつて^リ百合のごとくはなさけ
 り我が心もこれによつて^リかためられたり

< 小 聯 禱 >

輔： 我等^{またまた}復又^{あん}安和にして主^{いの}に祈らん。

主 あ わ れ め よ

輔： 神や、^{なんじ}爾の^{おん}恩寵^{えんじゆう}をもち、我等^{たす}を^{すく}助け^{あけ}救い^{まも}憐れみ^{まも}護れよ。

主 あ わ れ め よ

輔： 至^{しせい}聖至^{しけつ}潔にして^{いた}至りて^{さんび}讚美^{こうさい}たる我等の^{じよさい}光栄の^{しょうしんじよ}女宰・^{えいていどうじよ}生神女・永貞童女マ

リヤと、^{しよせいじん}諸聖人とを記憶して、我等^{おのれ}己の身及び^{たが}互いに各の身を以て、並^{おのおの}びに^か悉く^{もつ}の我等の生命^{なら}を以て、ハリストス神に^{いたく}委託せん。



主 喃 じ に

司：^{けだしなんじ}蓋爾は我等の神なり、我等^{こうえい}光栄を爾父^{なんじ}と子と^{せいしん}聖神^{けん}に献ず、今も何時も世^{いつ}々^よに。



ア ミン

(4)



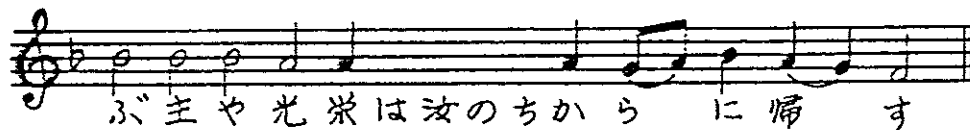
童てい女^{じョ}によつて来たりしものは使者^{シヤ}にあら^シず神使^シに



あら ず主^{ジン}みずから人^{じん}たいをとりてわれ余^あた



きひとをすく いたま^まえりゆえにわれなんじに呼^よ



ぶ主^まや光栄は汝のちから に帰^{かへ}す

誦：^{なんじ}主よ、光栄は爾の聖なる復活^まに帰す。

我が神、^か審判^{かみ}を諸民^{しよじん}に行^{しんさい}う主宰^{いだ}よ、爾は声を出さずして、審判せらるる者として^{しんぱん}審判座^{まえ}の前に立つ。ハリストスよ、爾はこの苦しみにて世界の^{ため}為に救いを立て給^{たま}えり。

光栄は父と子と^{せいしん}聖神^まに帰す、今も何時も世^{いつ}々^よに、アミン。

(5)

ハリス トス か みやなんじはかみとひととのなか
 だちとなれり 主宰シヤやわれら はなんじによって
 無知ムチのやみよりひかりのもとなるなんじの
 ちにつくを得エたればなり

誦： 主よ、^{なんじ}光栄は爾の^キ聖なる復活に歸す。
 主宰しゅざいハリストスよ、爾は身にて甘んじて松と黄楊樹と柏香木とに挙げら
 れしによりて、リワンの柏香木はくこうぼくを碎く如く、諸民しよみんのおごりを破り給えり。
 光栄は父と子と聖神せいじんに歸す、今も何時も世々に、アミン。

(6)

われはつみの ふちに おぼれてなんじがあわれみ
 のはかりがたきふちに呼ヨぶかみやわれを
 ほろびよ りひきあげたまえ

< 小 聯 禱 >

輔： 我等復又安和にして主に祈らん。



輔： 神や、爾の恩寵をもって、我等を助け救い憐れみ護れよ。



輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光荣の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。



司： 蓋爾は平安の王及び我が霊の救主なり、我等光荣を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世々に。



誦： < 小讚詞〔コンダク〕 > (第 2 調)

全能の救世主よ、爾墓より復活せしに、地獄は奇蹟を見ておののき、死者は起き、造物は見て爾と共に喜び、アダムは共に楽しみ、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌う。

(7)

不法フホウ なるしいたげびとのかみにもとる
 みことのりはたかきほのおをおこせども
 ほめうたわゆるハリス はけい^スの少者にせい^シ神
 のつゆをくだしたまえり

誦： 主よ、光栄なんじは爾じの聖なる復活きに歸す。
 主宰しゅざいよ、爾じは慈憐れんによりて人の死しのに苦しめらるるを見るに忍しのびずして、
 人となり、来きたりて爾じの血ちをもつてこれを救たすい給たまえり、爾じは我われが先祖せんぞの
 讚美さんび讚榮さんえいせらるる神かみなればなり。
 光栄なんじは父ちちと子こと聖神せいしんに歸す、今いまも何時いつも世々よよに、アミン。

我等われら神かみを讚ほめあがめ伏フし拝おがみて世世よよ にうたいほめん
 (8)
 昔むかしワガカロンシの火ひのいろりはか みのみことのり
 にてそのいきおいをわか ちハルハルデイデイを焦こがして

信者シンヤををすずしうせり主のことごとくの造ぶつ
 は主をあがめほめよとうたえばなり

誦： 主よ、光栄なんじは爾の聖なる復活きに帰す。
 ハリストスよ、天使の品位ひんいは爾の肉体の衣が爾の血にて赤みたるを見て
 おののき、爾の大いなる寛かん忍にんにおどろきて呼よべり、主のことごとくの造物は
 主を崇あがめほめよ。
 父と子と聖せい神しんのいつつ一よなるあ神を讃ほめあげん、今も何い時も世よ々に、アミン。

輔： 生しょう神しん女じょ、光の母を讃ほめあげん、歌をもつてほめあげん。

< 我が心は主を崇め >

わが心は主をあがめわがたましいは神わが救か主を
 よろこぶ ヘルヴムよりとくとく セラフムに
 ならびなくさか えみさおをやぶらずして神カミ言コトバを
 うみ し実じつの生しょう神しん女じょたるなんじをあがめほむ

その婢のいやしきを顧みたまえり今より万世われを

さいわいなりといわん ヘルヰムよりとくとく セラフム

に並びなくさか えみさおをやぶらずして神言を

うみ し実の生神女たるなんじをあがめほむ

力をもち給えるものはわが為に大いなることをなせり

その名は聖なりその憐みは世世かれを異るもののにのぞま

ヘルヰムよりとくとく セラフムに並びなくさかえ

みさおをやぶらずして神言をうみ し実の生神女

たるなんじをあがめほむ そのひじの力をあら

わして心のおごれるものを散らしたまえり ヘルヰム

よりとと く セラフィムに並びなくさか えみさおを

やぶらずして神言をうみ し 実の生神女たるなんじ

をあげめほむ 権あるものを位より退けいやしきもの

をあげうるものを善にあかせ甞めるものを空しく返らせ

たまえり ヘルガイムよりとと く セラフィムに並びなく

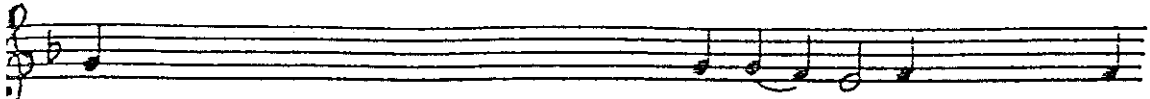
さか えみさおを やぶらずして神言をうみ し

実の生神女たるなんじをあげめほむ そのほく

イスラエルをいれてわが先祖に告げしがごとく

アウラムとその末を世世にあわれむことを記憶したまえり

ヘルガイムよりとと く セラフィムに並びなくさか え



みさおをやぶらずして神言カミコトバをうみ し実の生神女

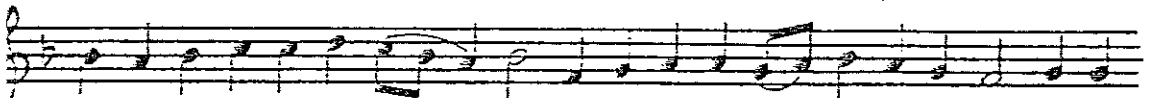


たるなんじをあがめほむ

(9)



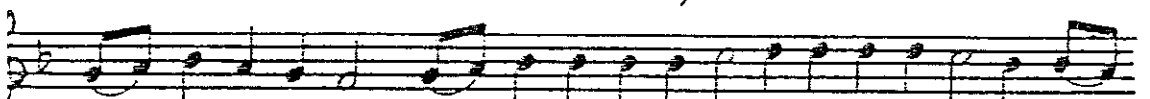
無限のちちの子か みと主は童コてい女メ



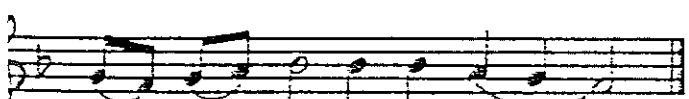
より人ジンたいを取トりわれらにあらわれてくら



まされしものをあかチし散らされしものをあつ



めたまえりゆえにわれら讚美たる生神女



をあがめうとら

※ 145頁の「小聯禱」へ移る。

< 主日の規程〔カノン〕 > (第 3 調)

(1)

むかし神妙シンミョウのまたたきにて水をひとつにあ
つめまたイザライイザライ人のために海をわかちし
ものはこれあがめほめらるる我ワがかみなり我等ひとり彼カレ
に歌うその光コトえいかがやけばなり

誦： 主よ、光榮かんじは爾の聖なる復活きに歸す。
土つちを擬定して、罪を犯しし者の為ために汗あせの果としていばらを出いだすことを
命いのちぜし主、法ほうにもとる手てより身みにていばらの冠かんむりを受けし者は、これ我わが
神かみなり。彼かれは詛のろいを滅ほろぼし給たまえり、光榮あらかを顕あらわしたればなり。
光榮は父と子と聖神せいしんに歸す、今も何時いつも世々よよに、アミン。

(3)

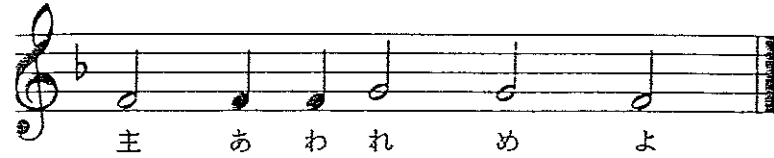
ことばにてつくられ聖神せいしんにて備つなえらるるんぶ
つを無なきよりいだせし至し上じょうなる全ぜん能にっ者者や
なんじの愛あいにわれをかためたまえ

< 小 聯 禱 >

輔： 我等復又安和にして主に祈らん。



輔： 神や、爾の恩寵をもって、我等を助け救い憐れみ護れよ。



輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光荣の女宰・生神女・永貞童女マ
 リヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並
 びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。



司： 蓋爾は我等の神なり、我等光荣を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
 々に。



(4)



どくせい の 子を死にわたしたまえばなり

ゆえにわれら感謝してなんじに呼ぶ主や光え

いはなんじのちからに帰す

誦： 主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す。
 ハリストスよ、爾は慈憐によりて傷と痛みとを受け、頬を打つ辱めを忍
 び、恒忍にして唾せらるるを堪え、これらをもって我が為に救いを成し
 給えり。主よ、光栄は爾の力に帰す。
 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

(5)

なんじ万ぶつをつくりし主さとりがたきへい安に

あさの祈りをたてまつるなんじのいましめは光りなるに

よりわれにこれをおしえたまえ

誦： 主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す。
 義をもって全地を審判する見ざる所なき主よ、爾はエウレイ人の妬みに
 よりて不義なる審判者に付されて、いにしえのアダムを定罪より脱れし

たま
め給えり。

光栄は父と子と聖神せいしんにま帰す、今も何時も世々に、アミン。

(6)

いまをかぎりのつみのふちは我等をかこみ
我がたましいはほろびんとすいのるまさい
教導者キョウドウシヤやなんじの導き寺ドウトをのべて
われをペトルのごとくすくいたまえ

< 小 聯 禱 >

輔： 我等復又安和またまたあんわにして主いのに祈らん。

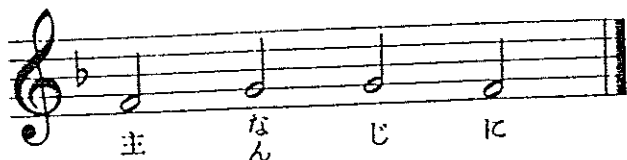
主 あ わ れ め よ

輔： 神かんじや、爾おんちやうの恩寵おんちゆうをもって、我等たすをすく助け救あひい憐れみまさみ護れよ。

主 あ わ れ め よ

輔： 至聖しせい至潔しけつにして至いたりて讚美さんびたる我等ごうえいの光栄じよさいの女しょうしんじよ宰えいてい・生神女どうじよ・永貞えい童女どうじよマ

リヤと、^{しよせいじん}諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並
 びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。



主 　　なん 　　じ 　　に

司： ^{けだしなんじ}蓋爾は平安の王及び我が^{か たましき まつうしや}霊の救主なり、我等^{こうえい なんじ}光栄を爾父と子と^{せいしん けん}聖神に献
 ず、今も何時も世々に。



ア 　　ミン

誦： < 小讃詞〔コンダク〕 > (第 3 調)

^{じ けん}慈憐なる主よ、爾は今^{いま}墓より復活して、我等を死の門より^{のぼ たま}昇せ給えり。
^{いま}今アダムは楽しみ、エワは^{よろこ}喜び、^{しよ よげんしや}諸預言者は列祖と共に^た絶えず爾の^{けんべい}権柄
^{しんせい のうりよく}の神聖なる能力を^ほ讃め歌う。

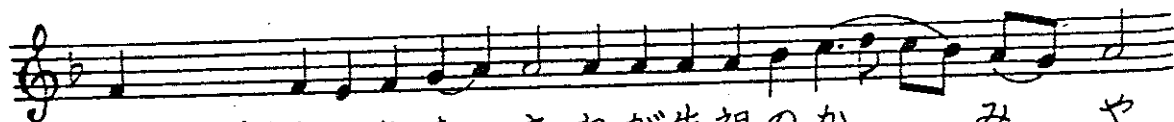
(7)



むかしけいけんなる^ミ三たりの少 者をハルデイの^{エノ}炎に



すずしうせ し ごと く我等^{しんせい}の神性のあかるき



火にてかがやかしたま えわが先祖のか み や

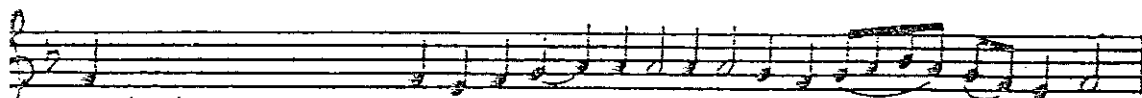


汝はあがめほめらると呼 べばな り

誦： 主よ、^{なんじ} 光栄は爾の聖なる復活に^き 帰す。

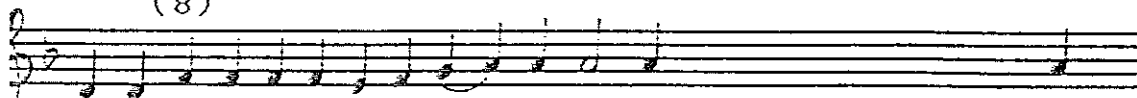
造物主の十字架に釘せらるる時、^{てい} 殿の^{でん} 美^{うるわ} しき^{まく} 幕^さ は裂けて、^{かく} 聖書に隠れた
る真理を信者に^{あらわ} 顕せり。故に彼等呼ぶ、わが先祖の神よ、^{あが} 爾は崇め^ほ 讃め
らる。

光栄は父と子と^{せいしん} 聖神に^き 帰す、今も何時も世々に、アミン。

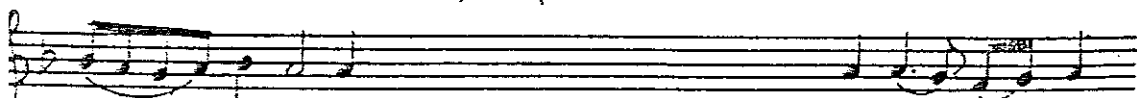


我等、神をほめあがめふしおが みて世世にうた い ほめん

(8)



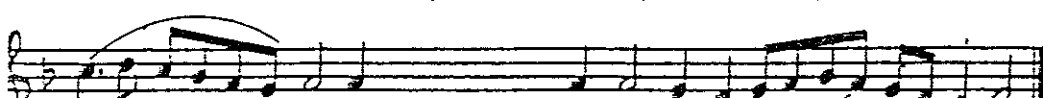
けいけんののりたる^{しょう} 者^{しや} はたえかたき火に入れら



れ しに^{ホノイ} 炎になやまされずして神のうた を う



た えりおよそ主のつくりしものや主をあがめ



ほ めこれを歌うて世世にほめ あげよ

誦： 主よ、^{なんじ} 光栄は爾の聖なる復活に^き 帰す。

爾の十字架の^{されこころ} 罽^た 褌の處に樹てられしに、^{でん} 殿の^{そうしよく} 装飾は裂かれ、^{ぞうぶつ} 造物は^{おそ} 恐れ
によりて^{かたぶ} 傾きて歌えり、主のことごとく^{ぞうぶつ} の造物は主を^{あが} 崇め歌いて、^よ 世々
に彼を^ほ 讃め^あ 揚げよ。

父と子と聖神せいしんの一いつなる神かみを讃ほめ揚あげん、今いつも何よ時よも世よ々に、アミン。

輔しょうしんじょ：生ほ神あ女ほ、光あの母あを讃ほめ歌あをもつて讃ほめ揚あげん。

< 我が心は主を崇め >

わが心は主をあがめ わがたましいは神 わが救主を
よろこぶ ヘルヴムよりとくとく セラフムに
ならびなくさか えみさおをやぶらずして神言を
うみ し実ジツの生神女シヨウシンヂョたるなんじをあがめほむ
その婢ヒのいやしきを顧カエリみたまえり今イマより万代マンダイわれを
さいわいなりといね ヘルヴムよりとくとく セラフム
に並ナラびなくさか えみさおをやぶらずして神言カミコトバを
うみ し実の生神女たるなんじをあがめほむ

カをもち給えるものはわが為に大いなることをなせり
カ_{カラ} もち_{タマ} 給_{タマ} える_{タマ} もの_ヲ は わが_ガ 為_ニ に_テ 大_キ い_ニ なる_{コト} を_ナ せ_リ

その名は聖なりその構みは世世かれを畏るるものにのぞみ
その_ノ 名_ナ は 聖_ノ な_リ その_ノ 構_マ み_ハ 世_ノ 世_ノ か_レ を_オ 畏_ル る_{コト} の_ニ の_ぞ み_ヲ

ヘルヰムよりとくとくセラフムに並びなくさかえ
ヘル_ヰ ム_ヨ り_ト と_ク と_ク セ_ラ フ_ム に_ヒ び_ナ く_サ か_エ

みさおをやぶらずして神言をうみし実の生神女
み_さ お_を や_ぶ ら_ず し_て 神_ノ 言_ヲ を_ウ み_し 実_ノ の_ニ 生_カ 神_ノ 女_ヲ

たるなじをあげめほむそのひじの力をあら
た_る な_じ を_ア げ_め ほ_む その_ノ ひ_じ の_ニ 力_ヲ を_ア ら

わして心のおごれるものを散らしたまえりヘルヰム
わ_し て_こ の_ニ お_ご れ_る も_の を_チ 散_ら し_た ま_え り_し ヘル_ヰ ム_ヲ

よりとくとくセラフムに並びなくさかえみさおを
よ_り と_と と_く と_く セ_ラ フ_ム に_ヒ び_ナ く_サ か_エ み_さ お_を

やぶらずして神言をうみし実の生神女たるなじ
や_ぶ ら_ず し_て 神_ノ 言_ヲ を_ウ み_し 実_ノ の_ニ 生_カ 神_ノ 女_ヲ た_る な_じ

をあげめほむ権あるものを位より退けいやしきもの
を_ア げ_め ほ_む 権_ヲ ある_も の_を 位_ヨ り_シ 退_け いや_し き_も の_ヲ

をあげうるものを善にあかせ富めるものを空しく返らせ
を_ア げ_う る_も の_を 善_ニ に_テ あ_か せ_富 め_る も_の を_ク 空_{しく} 返_ら せ_し

たまえり ヘルヴィムよりとくと く セラフィムに並ナラびなく

さか えみさおをやぶらずして神言カミ コトバをうみ し

実の生神女たるなんじをあがめほ む そのほく

イズライリをいれてわが先祖に告ツげしがごと く

アウラムとその末スエを世世にあわれむことを記憶キオクしたまえり

ヘルヴィムよりとくと く セラフィムに並ナラびなくさか え

みさおをやぶらずして神言カミ コトバをうみ し実の生神女

たるなんじをあがめほ む

(9)

かみにかのあらたなるきせきや主はあらわに童貞女

の閉トざせる戸トを通トり入イるときわ無ムけいの
 かみにしていづると きは人体ジンタイを衣キたる
 ものとな りたはもとのままとざ
 せりわれらかれをかみのははとして
 いいがたくあがめほむ

※ 145頁の「小聯詩」へ移る。

< 主日の規程〔カノン〕 > (第4調)

(1)

いにしえのイザライは足をぬらさずしてうみのくれない
 のふちをわたり野にてモイセイの十字かたのてにて
 (形)
アマリのちからにかてり

誦： 主よ、^{なんじ} 光栄は爾の^ま 聖なる復活に帰す。
 主宰よ、爾は至^{しんじ} 淨なる十字架の^あ 木に上げられて、我等の^{だらく} 墮落を改め、^{あらた} 木
 による^{ごんがい} 残害の^{いた} 傷みを癒し給えり、爾は^{じんじ} 仁慈全能の^{ぜんのう} 主なればなり。
 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

(3)

ハリス
 ス やなんじの教^{まご} かい は 汝の^ま 為にたの^ま しみて呼^よ ぶ
 主^み や汝はわが^{わが} 力^{ちから} とかくれが^が とかた^た めなり

< 小 聯 禱 >

輔： 我等復又^{またまた} 安和^{あんわ} にして主^{いの} に祈らん。

主 あ わ れ め よ

輔： 神^{なんじ} や、爾の^{おんちゆう} 恩寵^{おんちゆう} をもって、我等^{わたす} を^{すく} 助け^{あわれ} 救^{まも} い^{まも} 憐れ^{まも} み^{まも} 護^{まも} れよ。

主 あ わ れ め よ

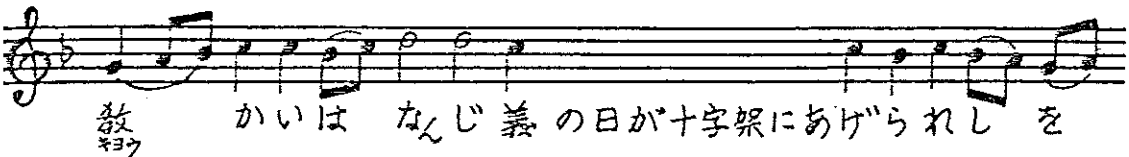
輔： 至^{しんじ} 聖^{しんじ} 至^{しんじ} 潔^{しんじ} にして至^{いた} りて讚^{さん} 美^び たる我等^{わたす} の光^{こう} 栄^{えい} の女^{じよ} 宰^{さい} ・生^{しん} 神^{しん} 女^{じよ} ・永^{えい} 貞^{てい} 童^{どう} 女^{じよ} マ
 リヤと、諸^{しよ} 聖^{せい} 人^{じん} とを記憶^{おのれ} して、我等^{わたす} 己^{おのれ} の身^み 及び^あ 互^{たが} いに各^{おの} の身^み を以^{おの} て、並^{なら}
 びに^{ことごと} 悉^{ことごと} くの我等^{わたす} の^{いのち} 生命^{いのち} を以^{もつ} て、ハリス^{いたく} トス神^{いたく} に委^{いたく} 託^{いたく} せん。

主 なん じ に

司： ^{けだしなんじ} 蓋爾は我等の神なり、^{こうえい なんじ} 我等光榮を爾父と子と^{せいしん けん} 聖神に献ず、^{いつ よ} 今も何時も世々に。



(4)



誦： 主よ、^{なんじ} 光榮は爾の聖なる復活に^き 歸す。
 爾は^{のぼ} 十字架に昇りて、^{あま} 甘んじて衣たる爾の^{しじょう} 至淨なる肉体の^き 苦しきをもつて
 我が^り 苦しきを^{いや たも} 癒し給う。故に我等爾に^よ 呼ぶ、主よ、^{ちから} 光榮は爾の力に^き 歸す。
 光榮は父と子と^{せいしん き} 聖神に歸す、^{いつ よよ} 今も何時も世々に、アミン。

(5)





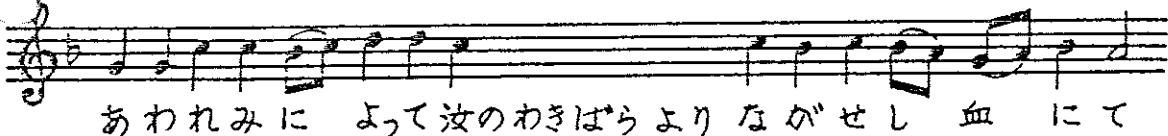
して世界に_キ来たりたまえり

誦： 主よ、^{なんじ}光栄は爾の^き聖なる復活に帰す。

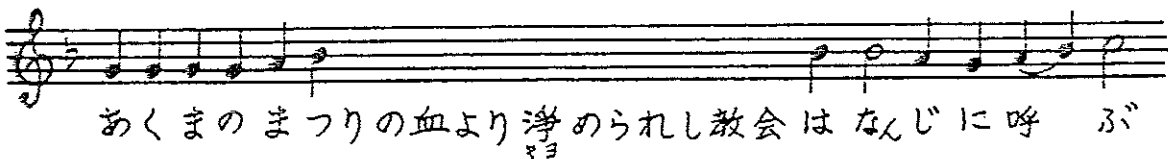
主よ、爾は^{じれん}慈憐によりて^ち地に^{くだ}降り、爾は^あ木に^{おろい}挙げられて^{ひと}陥りし^{せい}人の性を^か挙げ^{たま}給えり。

光栄は父と子と^{せいしん}聖神に^ま帰す、^{いつ}今も^{よよ}何時も^{よよ}世々に、アミン。

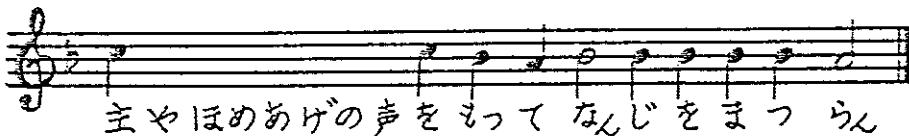
(6)



あわれみに よって^ま汝の^まわきは^まらより^まながせし^ま血^まにて



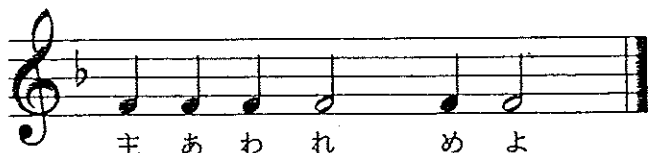
あくまの^ままつりの^ま血より^ま浄^まめられし^ま教会は^まなんじに^ま呼^まぶ



主^まや^まほめ^まあげの^ま声^まをもつて^まなんじを^ままつらん

< 小 聯 禱 >

輔： 我等^{またまた}復又^{あんわ}安和にして^{いの}主に祈らん。



主 あ わ れ め よ

輔： 神や、^{なんじ}爾の^{おんちよう}恩寵をもつて、我等を^{たす}助け^{すく}救い^{あわ}憐れみ^{まも}護れよ。



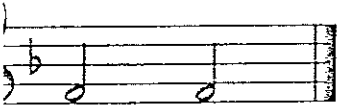
主 あ わ れ め よ

輔： 至^{しせい}聖^{しけつ}至^{いた}潔^{さんび}にして至^{こうえい}りて讚^{じょさい}美^{しょうしんじょ}たる我^{えいていどうじょ}等の光^ま榮^りの女^に宰^ま・生^な神^ら女^ら・永^{えい}貞^じ童^{どう}女^{じょ}マ
 リヤと、諸^{しよせいじん}聖^{せい}人^{じん}とを記^{おのれ}憶^かして、我^{たが}等^{おのおの}己^かの身^{もつ}及^なび互^らいに各^らの身^らを以^{もつ}て、並^{なら}
 びに悉^{ことごと}くの我^{いのち}等^{もつ}の生^{もつ}命^{もつ}を以^{もつ}て、ハリス^{いたく}トス神^{いたく}に委^{いたく}託^{いたく}せん。



主 喃 じ に

司： 蓋^{けだしなんじ}爾^{なんじ}は平^わ安^{たましい}の王^{まほうしゅ}及^わび我^わが靈^{たましい}の救^{まほうしゅ}主^{まほうしゅ}なり、我^{こうえい}等^{なんじ}光^ま榮^りを爾^{なんじ}父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に献^{けん}
 ず、今^{いま}も何^{なん}時^{とき}も世^よ々に。

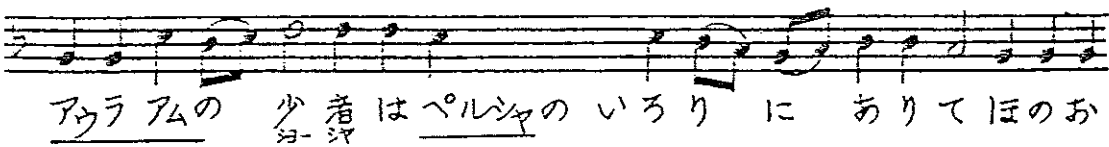


ア ミン

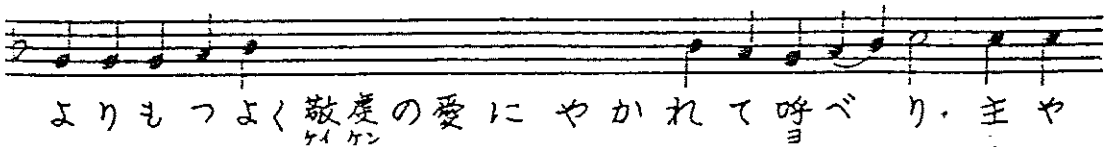
角： < 小讚詞 [コンダク] > (第 4 調)

我^わが救^{まほうしゅ}世^{せい}主^{しゅ}及^あび贖^{しよく}罪^{ざい}主^{しゅ}は神^{かみ}として地^ちに生^なまれし者^{もの}を桎^か梏^まより釈^ときて、墓^{かぶ}
 より復^ふ活^{かつ}せしめ、地^じ獄^{ごく}の門^{かど}を破^{やぶ}りて、主^{しゅ}宰^{さい}として三^{さん}日^{にち}目^めに復^ふ活^{かつ}し給^{たま}えり。

(7)



アラムの 少^{せう}者^{じや}はペル^ペル^ペシャの いろり に ありてほのお



よりもつよく敬^{けい}虔^{けん}の愛^{あい}に やか れて呼^よべり、主^{しゅ}や



汝^みが光^ま榮^りの宮^{みや}において汝^みはあがめほめらる

角： 主^{しゅ}よ、光^ま榮^りは爾^{なんじ}の聖^{せい}なる復^ふ活^{かつ}に帰^{かへ}す。

ハリストスの神聖なる血をもって洗われて不朽に召されたる人類は感謝
 して歌う、主よ、爾が光栄の殿に於いて爾は崇め讃めらる。
 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。



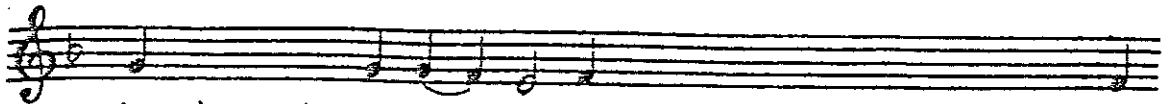
(8)



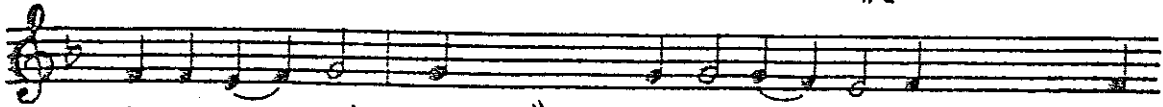
誦： 主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す。
 主宰よ、爾は十字架に手を伸べて万民を集め、爾が讃頌する唯一の教会
 を顕して、在地在天に同心に歌わしむ、主のことごとくの造物は主を崇
 め、彼を歌いて世々に讃め揚げよ。
 父と子と聖神の一なる神を讃め揚げん、今も何時も世々に、アミン。

輔： 生神女、光の母を讃め歌をもって讃め揚げん。

< 我が心は主を崇め >



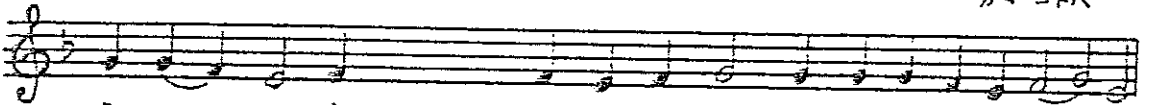
わが心は主をあがめ わがたましいは神わが救主を



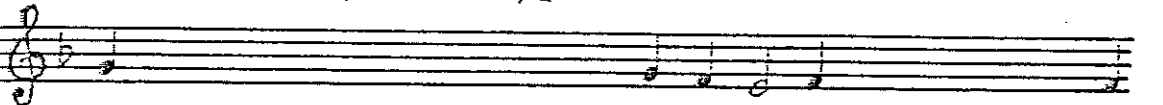
よろこぶ ヘルヴィムよりとくとく セラフィムに



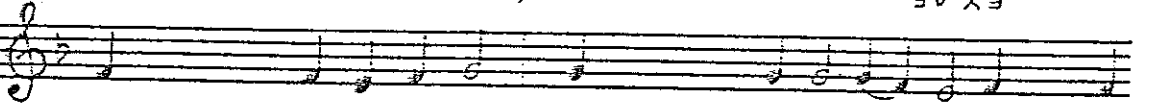
ならびなくさか えみさおをやぶらずして神言カミコトバを



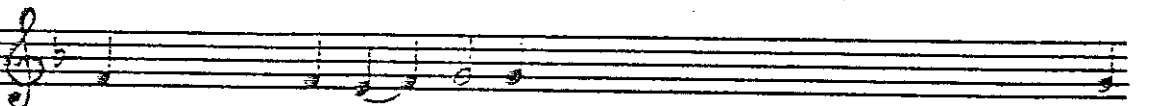
うみ し実ジツの生神女マコトシノメたるなんじをあがめほむ



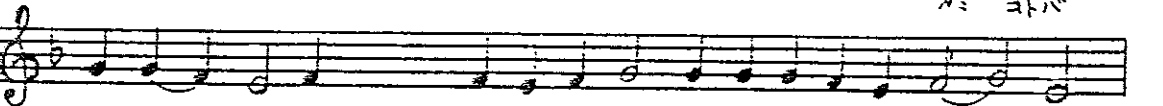
その婢ヒのいやしきを顧みたまえり今より万世マンゼわれを



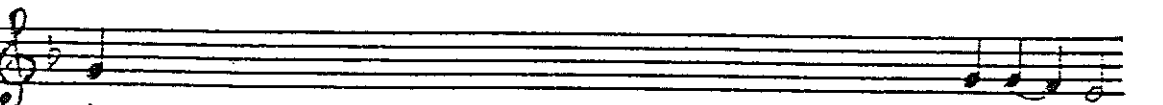
さいわいなりといね ヘルヴィムよりとくとく セラフィム



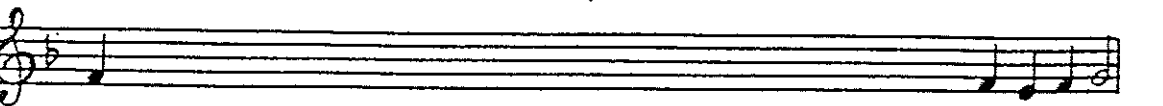
に並ナラびなくさか えみさおをやぶらずして神言カミコトバを



うみ し実の生神女たるなんじをあがめほむ



カカをもち給タマえるものはわが為タメに大オホなることをなせり



その名は聖マコトなりその構カタみは世世かれを畏オソるものにのぞま

ヘルヴィムよりとくと くセラフィムに並びなくさか え

みさおをやぶらずして神言^{カミ コトバ}をうみ し実^{ジツ}の生神女

たるなんじをあがめほむ そのひじの力をあら^{チカラ}

わして心のおごれるものを散らしたまえり ヘルヴィム

よりとくと くセラフィムに並びなくさか えみさおを

やぶらずして神言^{カミ コトバ}をうみ し実^{ジツ}の生神女たるなんじ

をあがめほむ 権^{ケン}あるものを位^{ライ}より退^{シツ}けいやしきもの

をあ げううるものを善^{ゼン}にあかせ富^トめるものを空^{ムナ}しく返^{カエ}らせ

たまえり ヘルヴィムよりとくと くセラフィムに並びなく^{チカラ}

さか えみさおをやぶらずして神言^{カミ コトバ}をうみ し

実の生神女たるなんじをあがめほむ そのほく

イスラエリをいれてわが先祖に告げしがごとく

アウラムとその末を二世にあわれむことを記憶したまえり

ヘルガイムよりとくとくセラフムに並びなくさかえ

みさおをやぶらずして神言をうみし実の生神女

たるなんじをあがめほむ

(9)

童てい女や手にて切られざるすみいしハリスは

汝切られざる山よりきりわけられてはなれたる

せいをあわせたまえり故にわれら楽しんでなんじ

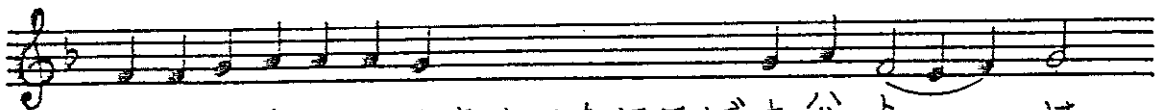


生神女をあげめうと

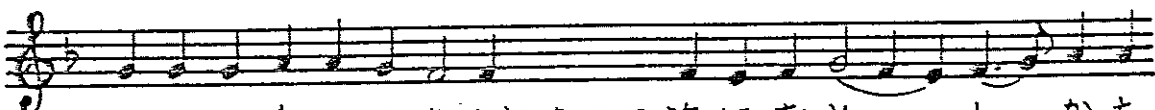
※ 145頁の「小聯禱」へ移る。

< 主日の規程〔カノン〕 > (第 5 調)

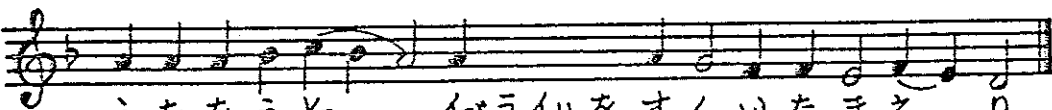
(1)



つよき手にてたたかいはほろぼす ア エ は



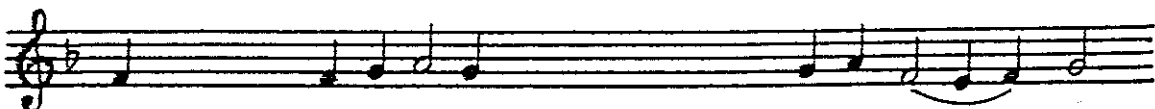
うまと乗りてをくれないの海におと し ち



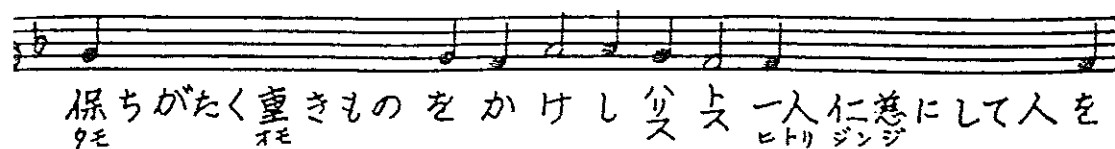
うたをうと イ ラ イ リ を す く い た ま え り

誦： 主よ、^{かんじ}光栄は爾の^ま聖なる復活に帰す。
ハリストスよ、^{いばら}茨を生ずる^{しょう}エウレイの^{かい}会は爾^{おんしゅ}恩主に母たる愛を守らずし
て、^{いばら}茨を爾^{げん}原祖の^{いばら}茨の^{まんかい}禁戒を^と釈く者^{こうむ}に冠らせたり。
光栄は父と子と^{せいしん}聖神に^ま帰す、今も^{いつ}何時も^{よよ}世々に、アミン。

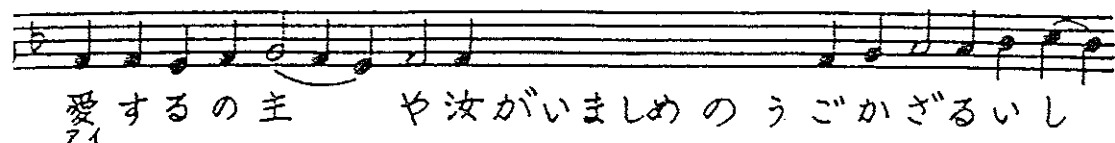
(3)



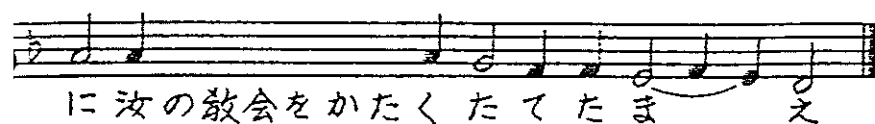
おのれのみことのりにて空しきに 地 を か た め



保ちがたく重きものをかけし父一人仁慈にして人を
タモ オモ ヒトリ ジンジ



愛するの主 や汝がいましめのうごかざるいし
アイ



に汝の教会をかたくたてたまえ

< 小 聯 禱 >

輔： 我等復又安和にして主に祈らん。



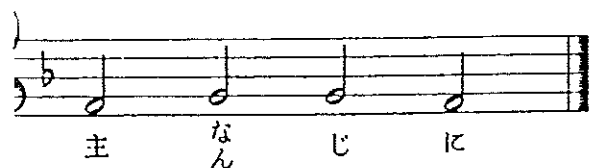
主 あ わ れ め よ

輔： 神や、爾の恩寵をもって、我等を助け救い憐れみ護れよ。



主 あ わ れ め よ

輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マ
 リヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並
 びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

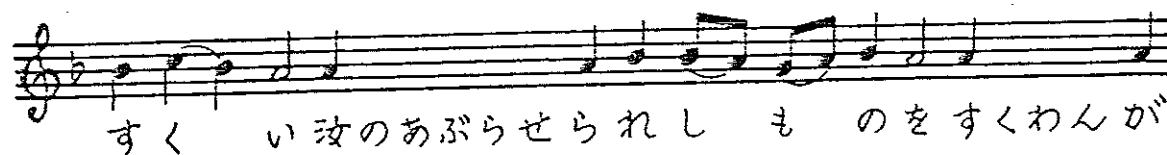
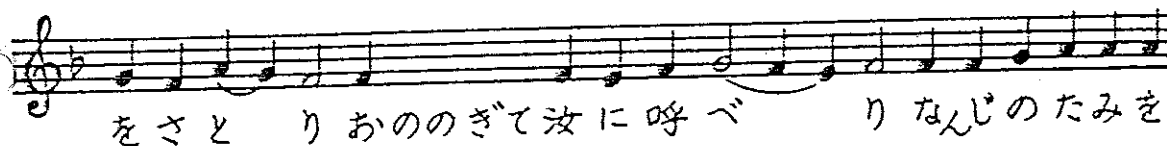


主 なん じ に

司： 蓋爾は我等の神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
 々に。



(4)



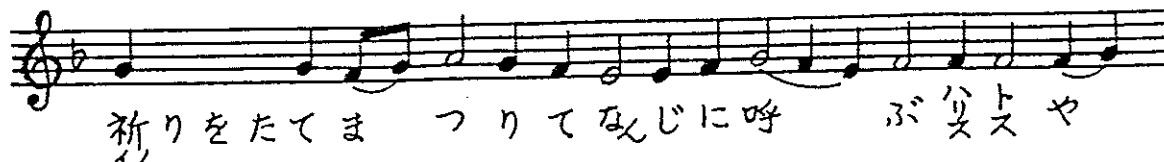
誦： 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

仁慈なる主よ、爾は木をもってメルラのいと苦き水を甘くして、罪の味

を消す爾の至浄なる十字架を形をもって預象し給えり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン。

(5)



わがくらまされたましいをてらしたま え汝はひとり

仁慈の主なればな り

誦： 主よ、^{なんじ} 光栄は爾の^き 聖なる復活に帰す。
 光栄の主は謙卑^{けんぺい}の形に於いて^お 甘んじて辱められて木にかかる、我等^{われら}の^{ため} 為
 に^{しんせい} 神聖なる光栄の事^{こと}を^い 言^{がた}い難く^{おもんばか} 慮るによりてなり。
 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

(6)

主さいリス やた ましいをやぶ るあらしに

あらざるよくのうみをしずめてわれをほろびより

たすけたまえ 汝は仁慈の主なればな り

< 小 聯 禱 >

輔： 我等復又安和にして主に祈らん。

主 あ わ れ め よ

輔： 神や、爾の恩寵をもって、我等を助け救い憐れみ護れよ。



主 あ わ れ め よ

輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マ
リヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並
びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。



主 なん じ に

司： 蓋爾は平安の王及び我が霊の救主なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献
ず、今も何時も世々に。



ア ミン

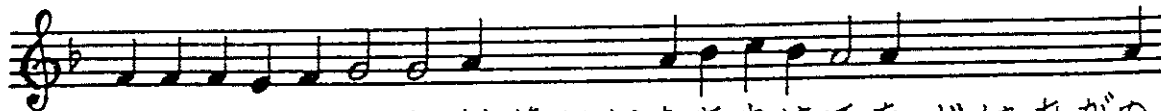
誦： < 小讚詞〔コンダク〕 > (第 5 調)

我が救世主、人を愛する主よ、爾は地獄に降り、全能者としてその門を
破り、造成主として死者を己と共に復活せしめ、死の刺をくじき、アダ
ムを呪より釈き給えり。故に我等皆呼ぶ、主よ、我等を救い給え。

(7)



ととまるる先祖の主 はほのおを消し少者



をすすしうせり彼等は心をあわせてなんじはあがめ

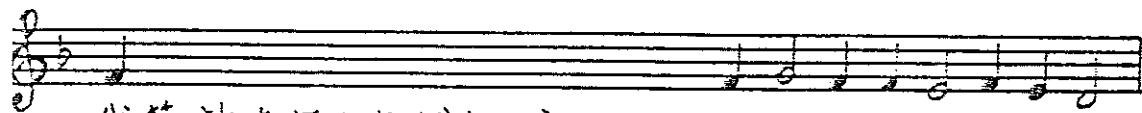


ほめらるとうたえばな り

誦： 主よ、^{なんじ}光栄は爾の^ま聖なる復活に帰す。

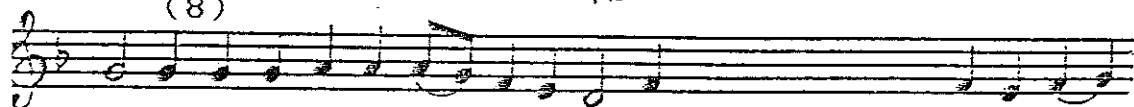
爾は身^みに覆^かわれて、これ^こを釣^つりの餌^えとして、爾^{なんじ}の神^{かみ}たる力^{ちから}をもつて蛇^{へび}を釣^つり、神^{かみ}よ、爾^{なんじ}は崇^{あが}め讃^ほめらると歌^{うた}う者^{もの}を升^{のぼ}せ給^{たま}えり。

光栄は父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に帰^{かえ}り、今^{いま}も何^{いつ}時^{とき}も世^よ々^よに、ア^あミ^{みん}ン。

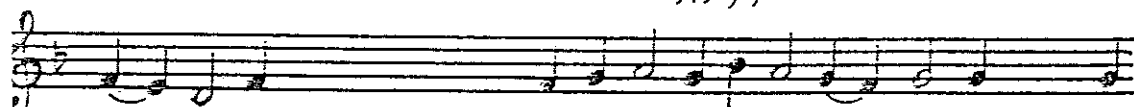


我^{われ}等^ら神^{かみ}をほめあがめ伏^つし拜^{おが}みて世^よ世^よにうたいほめ

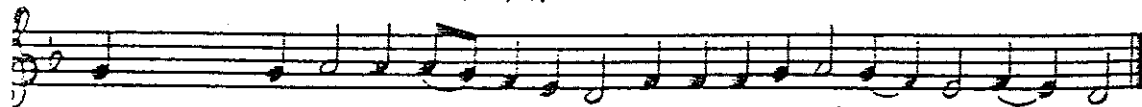
(8)



少^{せう}者^{じやう}はいろりにあ^ありて汝^{なん}万^{ばん}物^{ぶつ}を造^{つく}りし主^まのま



えに全^{ぜん}世界^{せかい}の詠^{えい}隊^{たい}とな^なつてうたえりことごと



くの造^{つく}り物^{ぶつ}は主^まをうとうて世^よ世^よにあがめほめよ

誦： 主よ、^{なんじ}光栄は爾の^ま聖なる復活に帰す。

ハリストスよ、爾^{なんじ}は自^{みか}由^{ずき}なる救^{すく}いの苦^{くるしみ}の爲^{ため}に、これ^こを不自^ふ由^ゆなる者^{もの}の如^{ごと}くにして祈^{いの}れり、各^{おの}々^{おの}二^{ふた}つ^つの性^{せい}に属^{ぞく}する二^{ふた}つ^つの望^{のぞみ}を世^よ々^よにたもてばなり。

父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}の一^{いつ}なる神^{かみ}を讃^ほめ揚^あげん、今^{いま}も何^{いつ}時^{とき}も世^よ々^よに、ア^あミ^{みん}ン。

輔^{すけ}： 生^{しょう}神^{しん}女^{じよ}、光^ひの母^{はは}を讃^ほめ歌^{うた}をもつて讃^ほめ揚^あげん。

< 我が心は主を崇め >

わが心は主をあがめ わがたましいは神^{カミ} わが救主を

よろこぶ ヘルヴムよりとくとく セラフムに

ならびなくさか えみさおをやぶらずして神^{カミ}言^{コトバ}を

うみ し実^{ジツ}の生^{ヨク}神女^{シメツメ}たるなんじをあがめほむ

その婢^ヒのいやしきを顧^{カエリ}みたまえり 今^{イマ}より万^{マン}世^ゼわれを

さいわいなりといね ヘルヴムよりとくとく セラフム

に並^{ナラ}びなくさか えみさおをやぶらずして神^{カミ}言^{コトバ}を

うみ し実^{ジツ}の生^{ヨク}神女^{シメツメ}たるなんじをあがめほむ

か^カをもち給^{タマ}えるものはわが為^{タメ}に大^{オホ}いなることをなせり

その名^ナは聖^{ホリ}なりその構^{ツクリ}みは世^ヨ世^ヨかれを畏^{オソ}るものにのぞみ

ヘルヴァムよりとくと くセラフィムに並びなくさか え

みさおをやぶらずして神言_{カミ コトバ}をうみ し実_{ジツ}の生神女

たるなんじをあがめほむ そのひじの力をあら_{カラ}

わして心のおごれるものを散_チらしたまえり ヘルヴァム

よりとくと くセラフィムに並びなくさか えみさおを

やぶらずして神言_{カミ コトバ}をうみ し実_{ジツ}の生神女たるなんじ

をあがめほむ 権_{ケン}あるものを位_{ライ}より退_{シツ}けいやしきもの

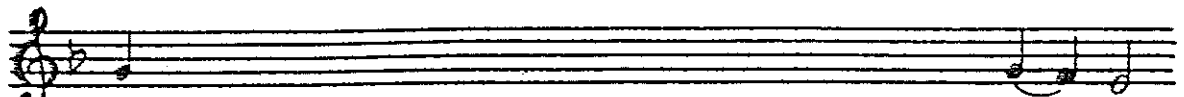
をあ げううるものを善_{ゼン}にあかせ富_フめるものを空_{カラ}しく返_{カエ}らせ

たまえり ヘルヴァムよりとくと くセラフィムに並びなく_{カラ}


さか えみさおをやぶらずして神言_{カミ コトバ}をうみ し



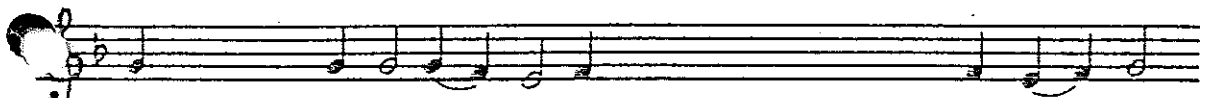
実の生神女たるなんじをあがめほむ そのほく



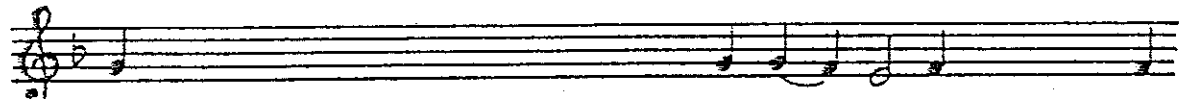
イスラ^イリをいれてわが先祖に告^ツげしがごとく



アウラムとその末^{スエ}を世世にあわれむことを記憶^{キオク}したまえり



ヘルザ^イムよりとくとくセラフ^イムに並びなくさかえ



みさおをやぶらずして神^{カミ}言^{コトバ}をうみし実の生神女



たるなんじをあがめほむ

(9)



イサイヤ いわえよ童貞^{ドウテイ}女^メ ははらみてエマヌ^イル



神と人となるものを生^ツめりその名はひが



しわれらは彼^カれをあがめて童^コてい女^メを



※ 145頁の「小聯禱」へ移る。

< 主日の規程〔カノン〕 > (第 6 調)

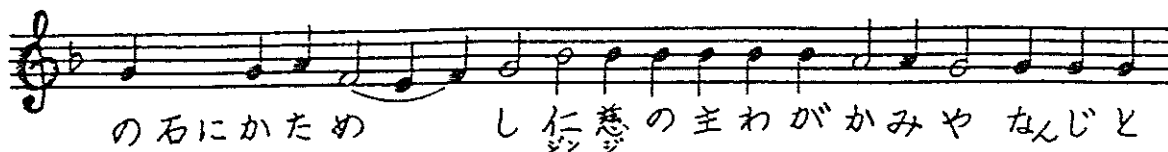
(1)



誦： 主よ、光栄は爾なんじの聖なる復活まに帰す。
仁慈なるイイススよ、爾は十字架のに伸べたる手をもって、父の恵みぼんを万
有かうに満みたし給たまえり。故に我等皆凱歌ゆえを爾われらに奉みなる。
光栄は父と子と聖神せいじんに帰す、今も何時も世々に、アミン。

(3)





< 小 聯 禱 >

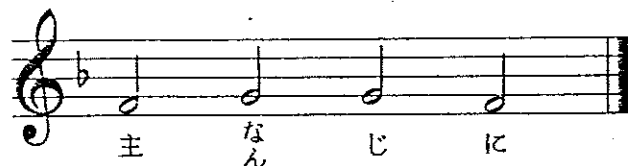
輔： 我等復また又あんわ安和にして主いのに祈らん。



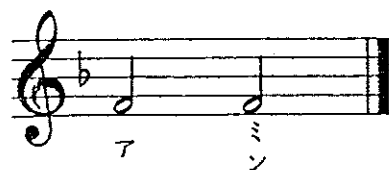
輔： 神かんじや、爾おんちやうの恩寵おんちやうをもって、我等たすをすく佑あかけ救まもい憐れみ護れよ。



輔： 至しせい聖しけつ至いた潔さんびにして至りて讚美さんびたる我等こうえいの光榮じょさいの女宰しょうしんじょ・生神女えいていどうじょ・永貞童女えいていどうじょマ
リヤと、諸聖人しよせいじんとを記憶おのれして、我等たが己おのの身の及び互あいに各おのの身のを以て、並
びことごとに悉いのちくもつの我等いの生命たくを以て、ハリストス神いたくに委託せん。



司： 蓋爾けだしなんじは我等こうえいの神なんじなり、我等せいしん光榮ひんを爾父いと子つと聖神よに献よず、今いつも何よ時よも世
々に。



(4)

尊ミヤとき教ヲ かいはきよき ころより 主のために
いわ いかみにかのうて 呼びうと、 ハリスはわが
ちからとかみと主 なり

誦： 主よ、^{かんじ}光栄は爾の聖なる復活きに歸す。

ハリストスよ、^{まこと いのち}眞の生命の木は華さけり、^{ほな}けだし十字架は立てられて、
爾くの朽ちざるわき腹ばらより流るる血うるおと水みづとに潤うるされて、我等われらの為ために生命いのちを
生しょうじたり。

光栄は父ちちと子こと聖神せいじんに歸す、^{いつ}今も何時も世々に、アミン。

(5)

至シなるかみのことばやせつにいの るなんじ
に朝あの祈いのちをたてまつるものたましいをなんじが神の
ひかりにて、てら しなんじ罪つみのやみより呼び出いだす
まことのかみをしらしめ たま え

誦： 主よ、光栄は爾なんじの聖なる復活きに帰す。
 主宰神しゅざいがみの言ことばよ、ヘルヴィムは今我に道を許し、炎の剣は我が前より退く、
 爾真まことの神かみが盗賊とうぞくの為ために樂園らくえんの道みちを開き給たまいしを見たればなり。
 光栄は父と子と聖神せいしんに帰す、今も何時も世々に、アミン。

(6)

いざないのあらしにてなみのたちあがる世
 のうみを見てなんじのおだやかなる港に着きて
 呼ぶあわれみふかき主やわが生命いのちをほろ
 びよりすくいたまえ

< 小 聯 禱 >

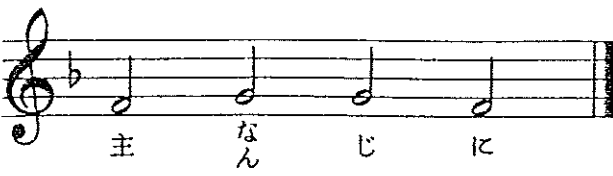
輔： 我等復また又あ安和あんわにして主いのに祈らん。

主 あ わ れ め よ

輔： 神なんじや、爾おんちやうの恩寵おんちやうをもって、我等わたをすく助け救あい憐あれみまもり護れよ。

主 あ わ れ め よ

輔： 至^{しせい}聖^{しけつ}至^{いた}潔^{さん}にして至^{さん}りて讚^{ごう}美^いたる我^{じよさい}等^{しよ}の光^{しよ}榮^うの女^{えい}宰^{てい}・生^{えい}神^{どう}女^{じよ}・永^{えい}貞^{じよ}童^{しん}女^{じよ}マ
 リヤと、諸^{しよ}聖^{せい}人^{じん}とを記^{おの}憶^れして、我^{おの}等^れ己^かの身^た及^がび互^{おの}いに各^{おの}の身^のを以^おて、並^{もつ}
 びに悉^{ことごと}くの我^{いのち}等^{もつ}の生^{いたく}命^{いたく}を以^{いたく}て、ハリス^{いたく}トス神^{いたく}に委^{いたく}託^{いたく}せん。



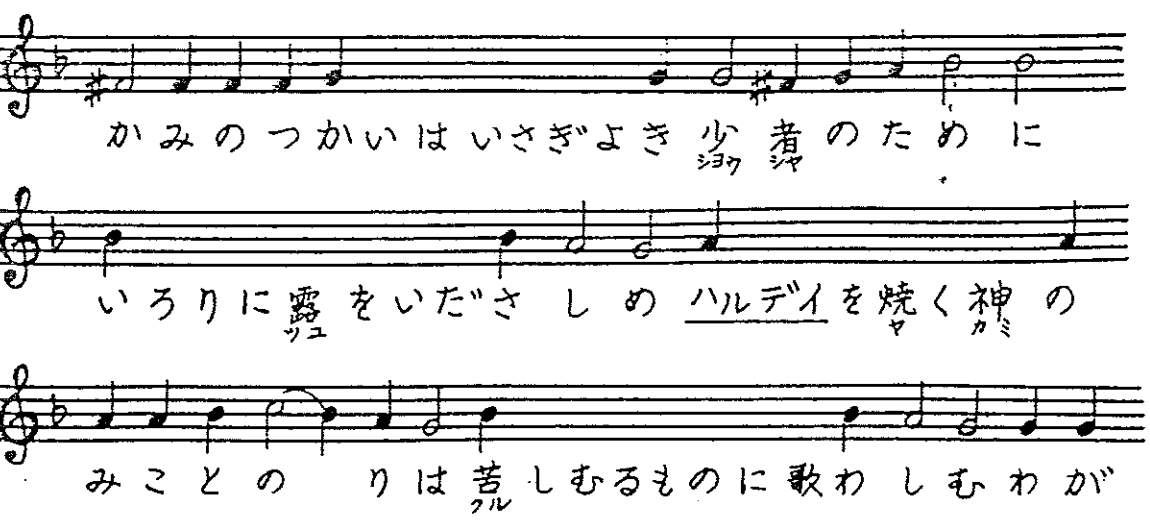
司： 蓋^{けだし}爾^{なんじ}は平^わ安^{たましい}の王^{ぎやうしゆ}及^わび我^{ごう}が靈^{なんじ}の救^{せい}主^{しん}なり、我^{せい}等^{しん}光^{せい}榮^{しん}を爾^{せい}父^{しん}と子^{けん}と聖^{せい}神^{しん}に献^{けん}
 ず、今^いも何^{いつ}時^よも世^よ々に。



誦： < 小讚詞 [コンダク] > (第 6 調)

生^{いのち}命^{げんいん}の原^{かみ}因^{いのち}たるハリス^{ほどこ}トス神^{くら}は、生^{くら}命^{くら}を施^{くら}す手^{くら}をもつて死^{くら}せし者^{くら}を暗^{くら}き
 谷^いより出^いだして、復^{たま}活^{たま}を人^{しやう}類^{じん}に賜^まえり、衆^{しやう}人^{じん}の救^{きう}世^せ主^{しゆ}、復^い活^いと生^{いのち}命^{いのち}、及^い
 び衆^{しやう}人^{じん}の神^{かみ}なればなり。

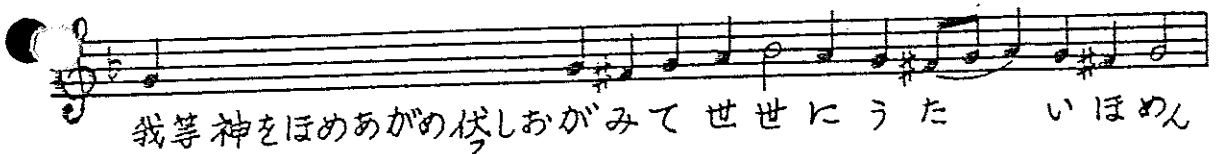
(7)





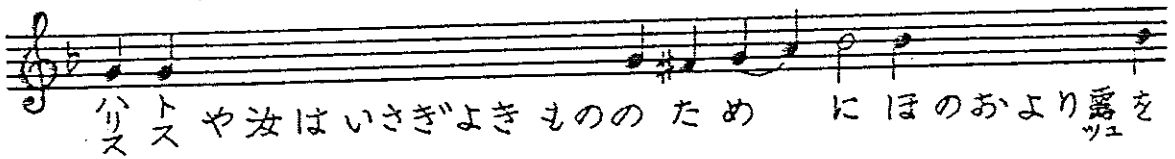
先祖センソの神や汝はあがめほめらる

誦： 主よ、光榮なんじは爾きの聖なる復活きに帰す。
主宰しゅざいよ、日は爾ひの苦なげしみを嘆なげきて晦冥くらやみを衣ぎ、全地ぜんちは昼ひるに光うしなを失よいて呼よべり、吾わが先祖せんぞの神かみよ、爾あがは崇あがめ讃ほめらる。
光榮なんじは父ちちと子こと聖神せいしんに帰きす、今いまも何時いつも世々よよに、アミン。



我等われら神かみをほめあがめう伏うしかがみて世世よよにうた いほめん

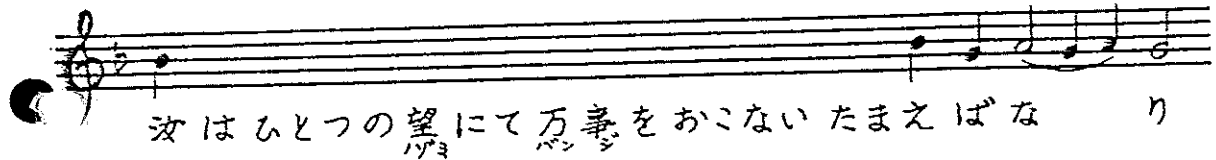
(8)



ハリスハリスや汝みづかはいさぎよきもののため にほのおより露ツユを



ながし義人ギジンのまつりのため に水みづより火かをいだせり



汝みづかはひとつの望のぞにて万ばん事をじをおこないたまえばなり

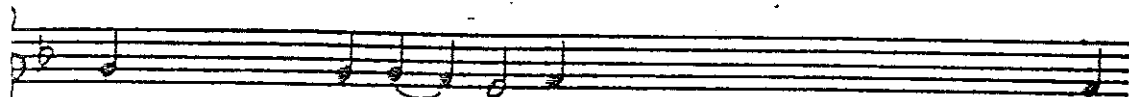


われら汝みづかを世世よよにほめ あぐる

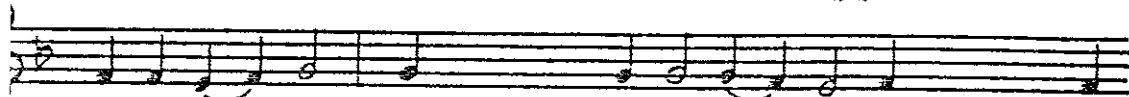
誦： 主よ、光榮なんじは爾きの聖なる復活きに帰す。
神かみの言ことばよ、昔むかし諸預言者しよげんしやを殺ころししイウデヤ民じんは、今いま猜そしめによりて、爾きを十字架じゅうじかに挙あげて、神かみを殺ころす者ものとなれり。我等われら爾きを万世ばんせいに讃ほめ揚あぐ。
父ちちと子こと聖神せいしんのいつなる神かみを讃ほめ揚あげん、今いまも何時いつも世々よよに、アミン。

輔： ^{しょうしんじょ}生神女、^ほ光の母を讚め歌をもつて^ほ讚め揚げん。

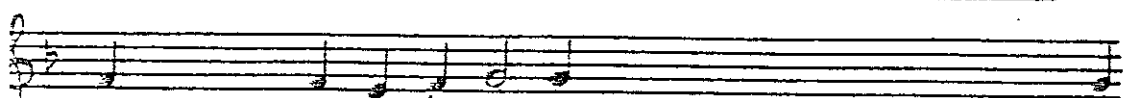
< 我が心は主を崇め >



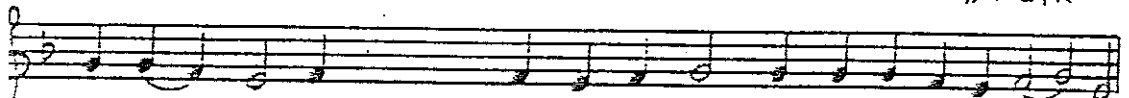
わが心は主をあがめ わがたましいは神わが救主を



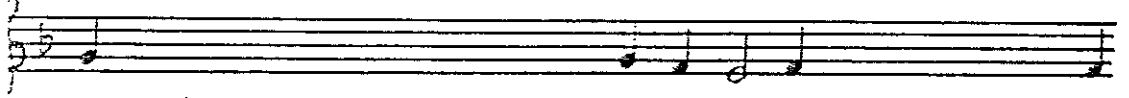
よろこぶ ヘルウムよりとくとく セラフムに



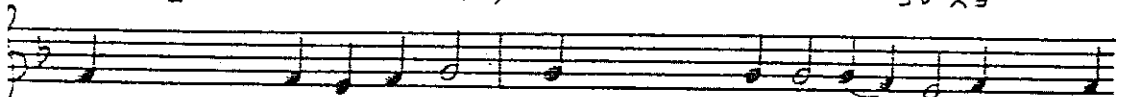
ならびなくさか えみさおをやぶらずして神言を



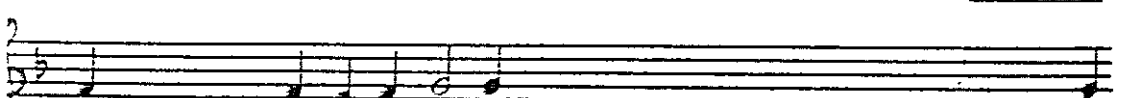
うみ し実の生神女たるなんじをあがめほむ



その婢のいやしきを顧みたまえり今より万世われを



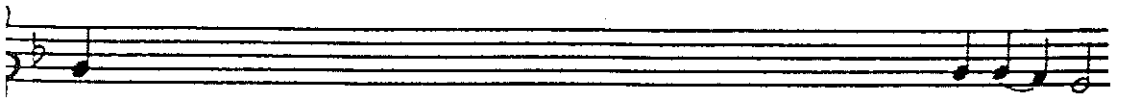
さいわいなりといわぬ ヘルウムよりとくとく セラフム



に並びなくさか えみさおをやぶらずして神言を



うみ し実の生神女たるなんじをあがめほむ



かをもち給えるものはわが為に大いなることをなせり

その名は聖なりその構^{アツレ}みは世世かれを畏^{オソ}るものにのぞみ
 ヘルヴィムよりとくとくセラフィムに並びなくさかえ
 みさおをやぶらずして神^{カミ}言^{コトバ}をうみし実^{ジツ}の生神女
 たるなんじをあがめほむそのひじの力^{チカラ}をあら
 わして心のおごれるものを散^チらしたまえりヘルヴィム
 よりとくとくセラフィムに並びなくさかえみさおを
 やぶらずして神^{カミ}言^{コトバ}をうみし実^{ジツ}の生神女たるなんじ
 をあがめほむ種^{タネ}あるものを位^イより退^{シツ}けいやしきもの
 をあがうるものを善^{ゼン}にあかせ富^トめるものを空^{カラ}しく返^{マゼ}らせ
 たまえりヘルヴィムよりとくとくセラフィムに並びなく

さか えみさおをやぶらずして神言^{カミコトバ}をうみ し

実の生神女たるなんじをあがめほむ そのぼく

イスラ^イリをいれてわが先祖に告^ツげしがごとく

アウラムとその末^{スエ}を世世にあわれむことを記憶^{キオク}したまえり

ヘルガイムよりとくとくセラフイムに並びなくさかえ

みさおをやぶらずして神言^{カミコトバ}をうみ し実の生神女

たるなんじをあがめほむ

(9)

かみのつかいすら見る^ミを得^エざるかみはひと見るあ

たわ ずただ汝^{シジヨウ}至上のものによりて人体^{ジンタイ}をとりし言^{コトバ}は

人々に現ヒトわれたまえアラ りわれらかれをあがめて
 天ツキ冥ミとともになんじをさいわいなりとす

※ 145頁の「小聯禱」へ移る。

< 主日の規程〔カノン〕 > (第7調)

(1)

主やかたてながれやすきせいのみづはなんじのまたたき
 にて地のすがたにかわれ りゆえにイザラいあしを
 ぬらさずわたりてかちうたをなんじにうとす

誦： 主よ、光榮ひかりは爾なんじの聖なる復活きに歸す。
 主よ、爾なんじ非義ひぎの裁判さだめをもって死しに擬定なぞせられしに、死しの權けんは木きによりて
 擬定なぞせられたり、故ゆえに閻冥くらやみの君みは爾なんじに勝かつ能よわずして、義ぎに合あひて逐おわ
 れたり。
 光榮ひかりは父ちちと子こと聖神せいじんに歸きす、今いまも何時いつも世よ々に、アミン。

(3)

はじめに全能の**ことば**にて天をかためあたわ
ペンノウ

ざるなきせい神に**て**そのことごとくのちからを
シン

そなえし主きゅうせい主や**なんじ**が承認めの**勤**か
ウケト ウゴ

ざるいしにわれをかためたまえ

< 小 聯 禱 >

輔： 我等復又安和にして主に祈らん。

主 あ わ れ め よ

輔： 神や、**なんじ**の**おんちゆう**をもって、我等を**たす**け**すく**われ**まか**しめよ。

主 あ わ れ め よ

輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の**こうらい**の**じよさい**の**しょうしんじよ**の**えいていどうじよ**
 リヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並
しょうせいじん おのれ か たが おのおの み もつ なら
 びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。



司： ^{けだしなんじ}蓋爾は我等の神なり、^{こうえい なんじ}我等光栄を爾父と子と^{せいしん けん}聖神に献ず、^{いつ よ}今も何時も世
々に。

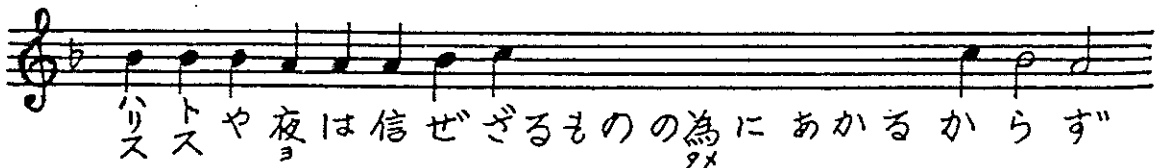


(4)



誦： 主よ、^{なんじ}光栄は爾の聖なる復活に帰す。
^{どうていじょ}童貞女より^か身を取りし^{じく}無垢なる^{しんざい}主宰は、^{おのれ かつ}己の肩を罪を犯しし^{ぼく ます}僕に傷の為
に与え、^{あた}打たれて、^う我が^わ諸罪を^{しよざい}積み給う。^{たま}
光栄は父と子と^{せいしん}聖神に帰す、^さ今も何時も^{いつ よよ}世々に、アミン。

(5)



信者の為には汝の言葉を甘んずるゴトハ によつてあかるしアマ

故ユエにわれ朝のいのりを汝にたてまつりてなじ

の神シンせいをほめうと

誦： 主よ、光栄は爾なんじの聖なる復活きこに帰す。
 ハリストスよ、爾おのれは己の諸僕しよぼくの為ために売られ、頬ほほを打たるるを忍しのびて、我
 等われに自由ちゆうを得しめ給たまふ。故ゆえに我等歌うたいて曰いふ、朝の祈いのりりを爾なんじに奉たてまつりて、
 爾なんじの神性しんせいを讃ほめ歌うたふ。
 光栄は父と子と聖神せいしんに帰きす、今も何時も世々に、アミン。

(6)

ハリススやわれイオナのごとく汝に呼ぶわれ世のおもん

ばかりの海にただよいつみのなみにしずめら

れたましいをほろぼすたけきけものにくださるるものを

死シの淵フチよりひきあげたまえ

< 小 聯 禱 >

輔： 我等復又安和にして主に祈らん。



輔： 神や、爾の恩寵をもって、我等を助け救い憐れみ護れよ。



輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マ
リヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並
びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。



司： 蓋爾は平安の王及び我が霊の救主なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献
ず、今も何時も世々に。



誦： < 小讚詞〔コンダク〕 > (第 7 調)

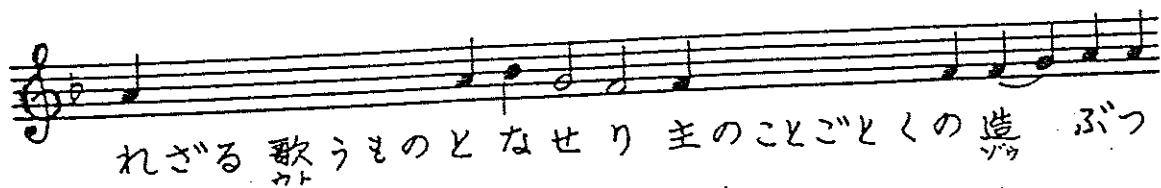
死の権は既に人々を捕らうる能わず、けだしハリストスは降りてその力
を敗りて滅ぼし給えり。地獄は縛られ、預言者は同心に喜びて呼ぶ、救
世主は信に居る者に現れたり、信者よ、復活して出でよ。

(7)

むかし少 者はもゆるいろりをつゆをいだすもの
 とあらわしひとつの神をうとじていえ りなじ
 はあがめほめらるる 先祖のかみなり

誦： 主よ、^{かんじ} 光栄は爾の^き 聖なる復活に帰す。
 アダムは自由^{よじゆん}に不順を行いて、木によりて殺され、ハリストスの^{じん} 順によりて又新たにせらる、^{またあら} 崇め讃めらるる神の子が我等の^{ため} 為に^{てい} 釘せらるればなり。
 光栄は父と子と^{せいしん} 聖神に^き 帰す、今も何時も^{いつ} 世々に^{よよ}、アミン。

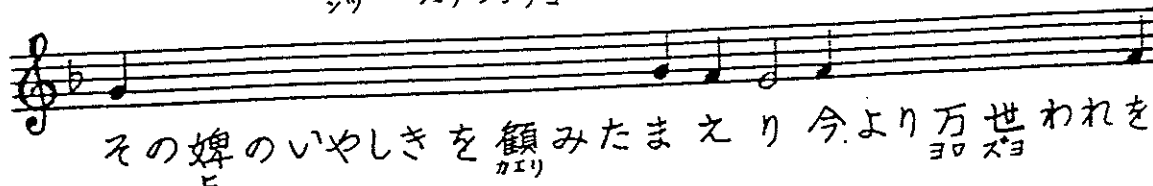
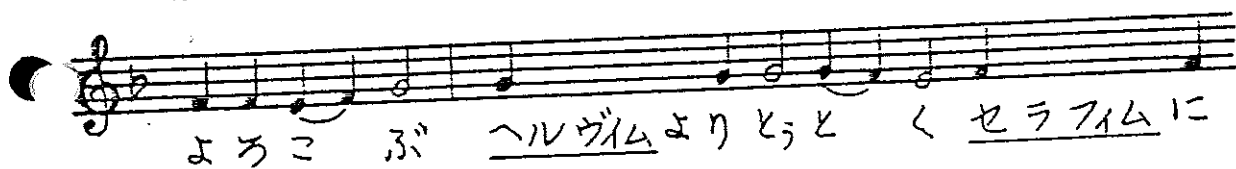
我等神をほめ^{アガ} 崇め^フ 伏し^{オカ} 拝みて世世 にうたいほめ
 (8)
 もゆれどもやけざる シナイのいばらはくごもりて
 ことば^{おそき} モイセイにかみをあらわし かみを
 しと^{あつき} ころころ は ミ たり^{シヨシヤ}の少者を火に焼か^ヤ



誦： 主よ、^{なんじ} 光榮は爾の^き 聖なる復活に歸す。
 無^じてんなる^{れい} 靈智の^{こひつじ} 羔は^{ため} 世界の^た 為にほふられて、^{りつぽう} 律法に従^{みさげ} う^や 献物を^{そらぶつ} 息め、
 神^{かみ}として世界を^{さよ} 罪より潔めて、^よ 常に呼ばしむ、^{そらぶつ} 主のことごとくの^{そらぶつ} 造物は
 主を^{うた} 歌いて、^{ばんせい} 万世に^ほ 讃め^あ 揚げよ。
 父と子と^{せいしん} 聖神の^{いつ} 一なる^{かみ} 神を^ほ 讃め^あ 揚げん、^{いつ} 今も^{よよ} 何時も^あ 世々に、^あ アミン。

輔： ^{しょうしんじょ} 生神女、^ほ 光の母を^ほ 讃め^あ 歌をもつて^あ 讃め^あ 揚げん。

< 我が心は主を崇め >



さいわいなりといわぬ ヘルヴィムよりとくとく セラフィム

にナラ並びなくさか えみさおをやぶらずして神言カミ コトバを

うみ し実ジツの生神女たるなんじをあがめほむ

カカラをもち給タマえるものはわがワガ為ノに大オホいなることをなせり

その名は聖ホレなりその構カマみは世世かれを畏オソるものにのぞみ

ヘルヴィムよりとくとく セラフィムに並びなくさか え

みさおをやぶらずして神言カミ コトバをうみ し実ジツの生神女

たるなんじをあがめほむ そのひじの力チカラをあら

わして心のおごれるものを散チらしたまえり ヘルヴィム

よりとくとく セラフィムにナラ並びなくさか えみさおを

やぶらずして神言^{カミ コトバ}をうみ し 実^{ジツ}の生神女たるなんじ

をあげめほむ 権^{ケン}あるものを位^{ライ}より退^{シツ}けいやしきもの

をあ げううるものを善^{セン}にあかせ富^トめるものを空^{カラ}しく返^{カエ}らせ

たまえり ヘルガイムよりとくと く セラフィムに並^{ナラ}びなく

さか えみさおをやぶらずして神言^{カミ コトバ}をうみ し

実^{ジツ}の生神女たるなんじをあげめほむ そのぼく

イズライリをいれてわが先祖^{ソコ}に告^ツげしがごとく

アウラムとその末^{スエ}を世世^{キオク}にあわれむことを記憶^{キオク}したまえり

ヘルガイムよりとくと く セラフィムに並^{ナラ}びなくさか え

みさおをやぶらずして神言^{カミ コトバ}をうみ し 実^{ジツ}の生神女

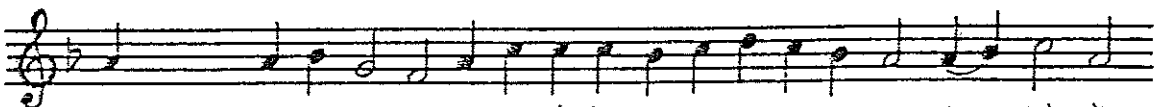


たるな^んじをあげめほむ

(9)



けがれにそま^ずして^う生みよろずの物をつくりしこ



とばに^{カラダ}体^シをかせしあ^とを知らざるのはは生神童



貞女いれが^モたき者のうつわかぎりなき^ツな^んじの造せい



主^ミのすまいやわれら^んじをあげめほむ

※ 145頁の「小聯禱」へ移る。

< 主日の規程〔カノン〕 > (第8調)

(1)



むかしきせきをおこの^うモイセイのつえは十字か

たにうちてうみをわかちくるまにのりて追^おいくる^ろヲ

オン をしず^め 徒歩^かにて逃^ががるる イスライリ^リかみを

ほめうと^うものをすくいたま^えり

誦： 主よ、^{なんじ}光栄は爾の^き聖なる復活に歸す。
我等^{いかに}如何ぞハリストスの^{ぜんかのう}全能の^{しんせい}神性を奇とせざらん、^{しゅう}彼は^{しゅう}苦しみより衆
信者^{しんじ}に^{いのみち}苦しみなきと^{ほごこ}朽ちざるとを流し、^{たま}聖なる^{わき}脇より^{ふし}不死の^{いずみ}泉を滴らせ、
墓より^{いのち}永遠の^{ほごこ}生命を^{たま}施し給う。
光栄は父と子と^{せいしん}聖神に歸す、^{いま}今も何時も^{いよ}世々に、アミン。

(3)

はじめに知^ち恵^えにて天 をかた め地を水にたてし

ハリス ト^スや汝がいましめ のいし にわれをかためた

ま え汝ひとり人をいつくしむ主 のほか にせいなる

ものなければなり

< 小 聯 禱 >

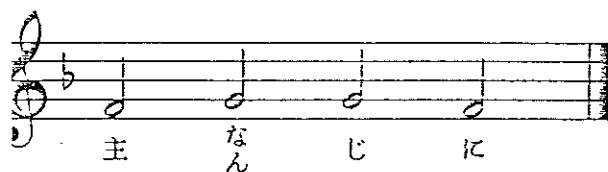
輔： 我等復又安和にして主に祈らん。



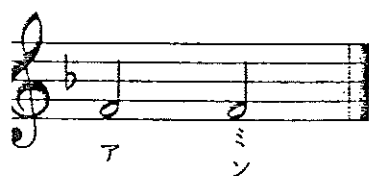
輔： 神や、爾の恩寵をもって、我等を助け救い憐れみ護れよ。



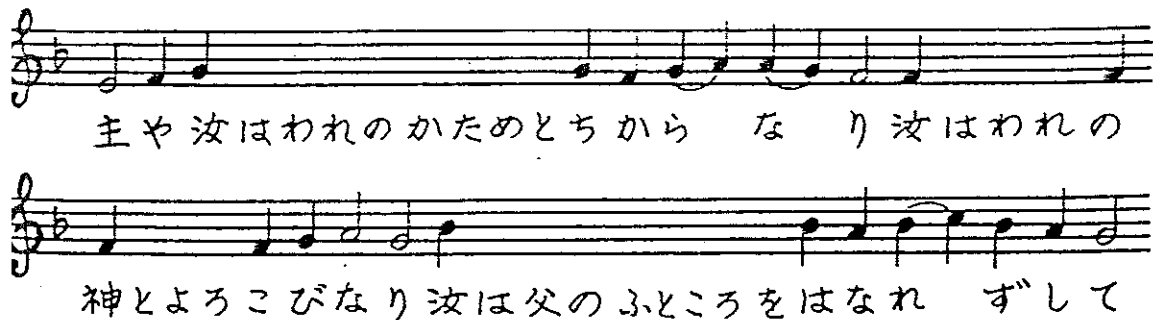
輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マ
 リヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並
 びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

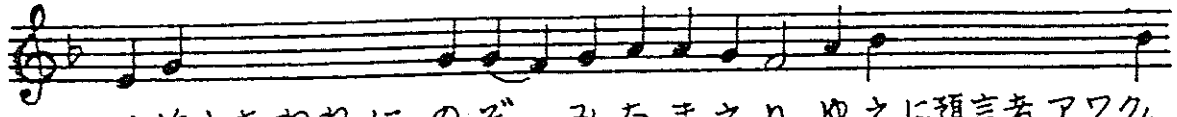


司： 蓋爾は我等の神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
 々に。



(4)

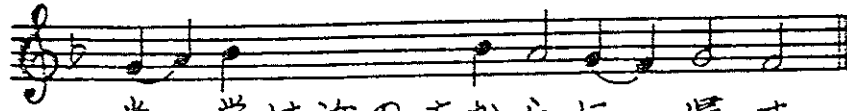




いやしきわれにのぞ みたまえり ゆえに預言者アワクム
ヨゲンシヤ



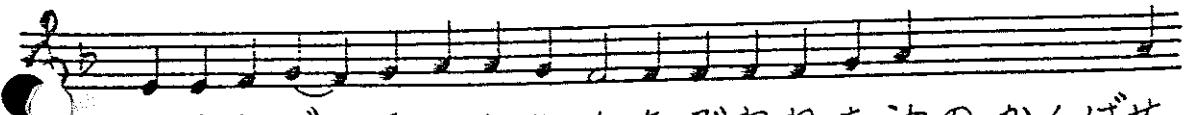
と共に汝に呼ぶひとをいつくし むの主 や



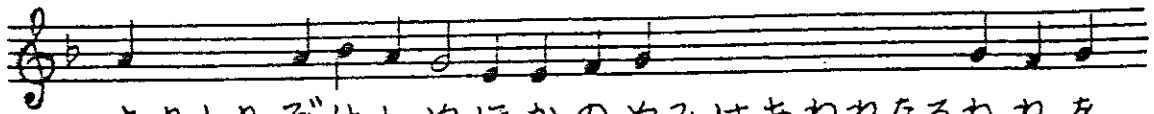
光 栄は汝のちからに 帰す

誦： 主よ、光栄は爾の聖なる復活に帰す。
 慈憐なる救世主よ、爾は敵なる我を甚だ愛せり。爾は驚くべき謙遜をも
 ちの地に臨み、我が至極の暴虐を辞せず、爾の至浄なる光栄の高きに在
 して、我かつて辱められし者を栄し給えり。
 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

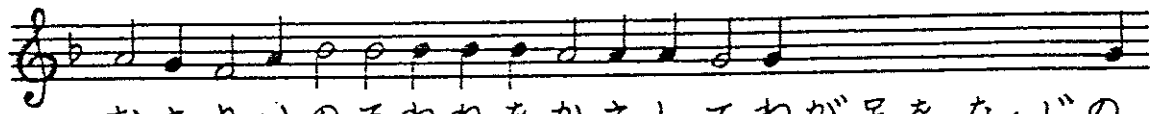
(5)



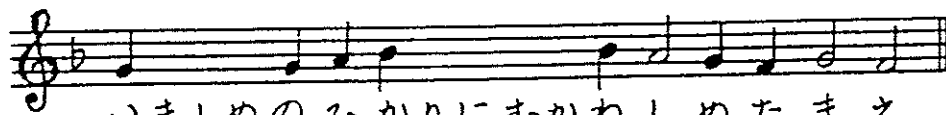
かくれざ^らるひかりやなんぞわれを汝のかんばせ



よりしりぞけしやほかのやみはあわれなるわれを



おえりいのるわれをかえしてわが足をなんじの



いましめのひかりにむかわしめたまえ

誦： 主よ、光榮なんじは爾なんじの聖まなる復活まに歸す。
 ハリストス救世主きゅうせいしゅよ、爾なんじは辱はずかしめられて、苦あかまうわざしみの前まに絳あか袍まうを衣きせらるる
 を忍しのびて、始しめに造つくられし者ものの醜みにくき裸はだかを被おおい、裸はだかなる身みにて十字架じゅうじかに釘てい
 せられて、死しの衣ころもを脱ぬぎ給たまえり。
 光榮なんじは父ちちと子こと聖せい神しんに歸かえり、今いまも何いつ時ときも世よ々に、アミン。

(6)

きゅう世主せしゅやわが不法ふぽう は多おほ しいのるわれをき
 よめたまえわれを悪あくの洵すよりひきあげたまえ
 われ汝なんぢに呼よべばなりわが救すくいの神かみやわれに
 ききたまえ

< 小 聯 禱 >

誦： 我等復またまた又あんなれ安和あんわにして主しゅに祈いのらん。

主 あ わ れ め よ

誦： 神なんじや、爾なんじの恩寵おんちゆうをもつて、我等われらを佑たすけ救すくい憐あはれみ護まもれよ。



輔：^{しせい しけつ} 至聖至潔にして^{いた} 至りて^{さん び} 讚美たる我等の^{こうえい じよさい しょうしんじよ} 光栄の女宰・生神女・永貞童女マ
^{しよせいじん} リヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び^{あのおれ か たが あのおの か} 互いに各の身を以て、並
^{ことごと} びに悉くの我等の^{いのち} 生命を以て、ハリストス神に^{いたく} 委託せん。



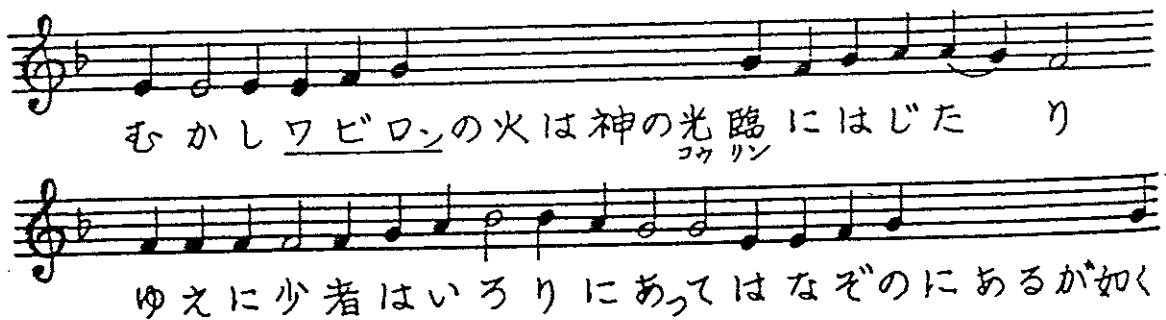
司：^{けだしなんじ} 蓋爾は平安の王及び我が^{わ たまし} 霊の救主なり、我等^{こうえい なんじ} 光栄を爾父と子と^{せいしん けん} 聖神に献
 ず、今も何時も世々に。



誦： < 小讚詞〔コンダク〕 > (第 8 調)

^{だいじんじ} 大仁慈なる主よ、爾は墓より復活して、死せし者を^お 起こし、アダムを復
^{なま} 活せしめ給えり。エワは爾の復活を楽しみ、世界の極は爾が死より^お 起き
 たるを^{いわ} 祝う。

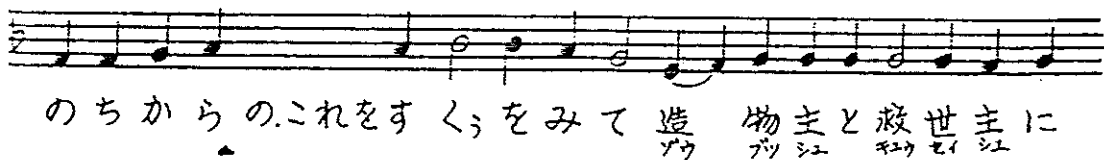
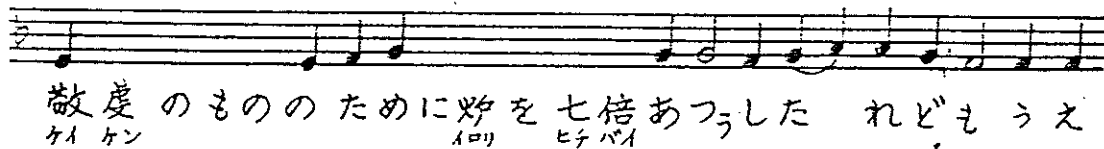
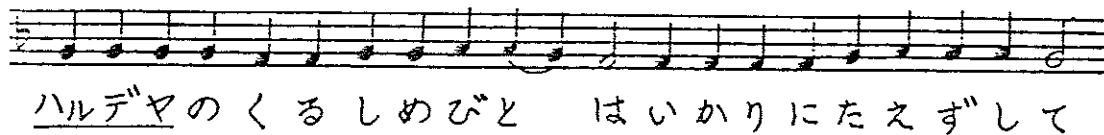
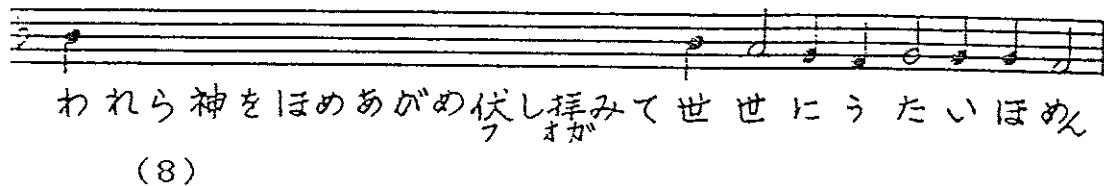
(7)





誦： 主よ、^{なんじ}光栄は爾の^キ聖なる復活に帰す。

ハリストスよ、爾の^{へりくだり}光栄なる謙虚、爾が^{ひんきゆう しんみょう}貧窮の神妙なる富は^{とか}諸^{しよてんし}天使を^{おどろ}驚かす、^わ彼等は、^{せんぞ}吾が^{かみ}先祖の神よ、爾は^{あが}崇め^ほ讃めらると、^よ信じて^{あの}呼ぶ者を救わ^{ため}ん為に、爾が^{てい}十字架に釘せらるるを見ればなり。
光栄は父と子と^{せいしん}聖神に^き帰す、^{いつ}今も^{よよ}何時も^{よよ}世々に、アミン。



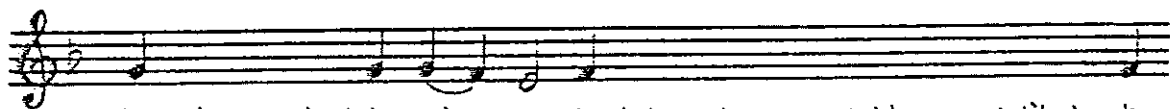


うたえよ民や万世にとゞとみあがめよ
アミ パンセイ

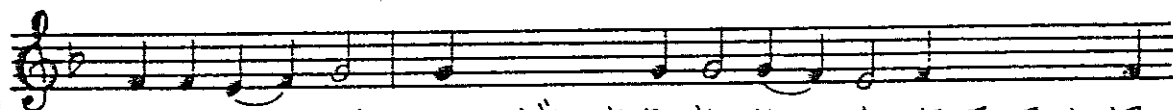
誦： 主よ、^{なんじ}光榮は爾の聖なる復活に^き帰す。
イイススの神性の至りて神妙なる力は神に合うが如く我等の中に輝けり、
彼衆人の為^{かれしゅうじん ため}に身にて十字架の死^なを嘗めて、地獄の堅堡を破りたればなり。
少者よ、常に彼を崇め^{あが}讚めよ、司祭よ、^ほ讚め歌え、民よ、万世に^{ばんせい}尊み崇
めよ。
父と子と聖神の一なる神を^{せいしん}讚め揚げん、今も何時も世々に、アミン。

輔： 生神女、^{しょうしんじょ}光の母を^ほ讚め歌をもつて^ほ讚め揚げん。

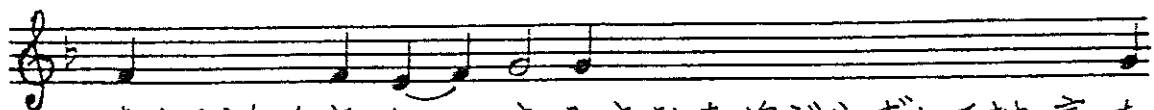
< 我が心は主を崇め >



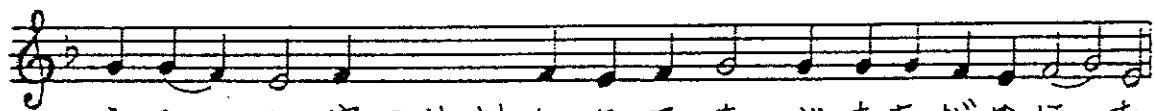
わが心は主をあがめ わがたましいは神わが救主を
カミ



よろこぶ ヘルヴムよりとゞとくセラフィムに



ならびなくさか えみさおをやぶらずして神言を
カミ コトバ



うみ し実の生神女たるなんじをあがめほむ
ジツ ショウシンヂョ



その婢のいやしきを顧みたまえり今より万世われを
ヒ ガエリ ヨロズヨ

さいわいなりといわ ヘルヴィムよりとくと く セラフィム

にナラ並びなくさか えみさおをやぶらずして神言カミ コトバを

うみ し実ジツの生神女たるなんじをあがめほ む

カカラをもち給タマえるものはわがヲ為ノに大いなることをなせり

その名は聖なりその憐アワレみは世世かれを畏オソるもののにぞま

ヘルヴィムよりとくと く セラフィムに並びなくさか え

みさおをやぶらずして神言カミ コトバをうみ し実ジツの生神女

たるなんじをあがめほ む そのひじの力チカラをあら

わして心のおごれるものを散チらしたまえり ヘルヴィム

よりとくと く セラフィムにナラ並びなくさか えみさおを

やぶらずして神言をうみ し 実の生神女たるなんじ

をあげめほむ 権あるものを位より退けいやしきもの

をあげうるものを善にあかせ富めるものを空しく返らせ

たまえり ヘルガイムよりとくとく セラフィムに並びなく

さか えみさおをやぶらずして神言をうみ し

実の生神女たるなんじをあげめほむ そのぼく

イスラエリをいれてわが先祖に告げしがごとく

アウラムとその赤を世世にあわれむことを記憶したまえり

ヘルガイムよりとくとく セラフィムに並びなくさか え

みさおをやぶらずして神言をうみ し 実の生神女

たるな_んじをあがめほむ

(9)

天はおそれ地のはてはおどろけり神は身にてひと

びとにあらわれ汝の腹は天より広きものとなりたれ

ばなりゆえに神の使と人々の群れは汝生神女

をあがめほむ

※ 145頁の「小聯禱」へ移る。

〈 共頌歌〔カタワシヤ〕 〉 (必要に応じて用いる)

(1)

わがくちをひらきてせいしにみてられことは

を女王母にたてまつりたのしみいわいよろこびて

「誦」(3)

そのきせきをうた わん 生 神 女 せい かつ

にしてつきざる いずみ や 祝うて 汝をほめ歌う者の 靈を
マシイ

かため 彼等に 汝が 神妙なる 光栄 の うちに 榮冠
エイカン

「小聯禱」(4)

を こうむらしめ たま え 光 栄 の うち に

神 性 の 宝 座 に ご す る イ イ ス が み は か る き く も に

泉 る が ご と く 朽 ち ざ る の 手 に い た か れ 来 た り て

「誦」

イ ス や 光 栄 は 汝 の 力 に 帰 す と 呼 ぶ も の を 救 い た ま え り
チカラ スク

(5)

万 物 は 汝 が 神 妙 の 光 栄 に お ど ろ か ざ る な し 汝 婚 配 を
マンブツ シンミョウ コンバイ

知 ら ざ る 童 貞 女 は 至 上 の 神 を は ら み 永 遠 の 子 を
コドメイジョ シンジョウ カミ エイエン

「誦」

生 み て お よ そ 汝 を ほ め 歌 う 者 に 平 安 を た ま え ば な り

(6)

かみの信者シンヤや来たりて神の母の子の神妙シンミョウなるいたつて

「小聯綺・小讃詞」

尊トウときまつりを祝い手を打ウツてかれより生まれし神を讃サンえいせん

(7)

けいけんの者は造物主ゾウブツにかえて造ゾウぶつにつかえず

火のおどしイサを勇ユウましくふみて喜ヨロコぶうたえり讃サン美ビたる主

先祖センゾのかみや汝はあがめほめらる

「誦」

我等ガレ神をほめあがめ伏フしおがみて世世にうたいほめ

(8)

生神女サンの産はけいけんの少者ショヤをいろりのうちにままれり

その時にあらかじめ記シるされ今すでにかないしこの産は

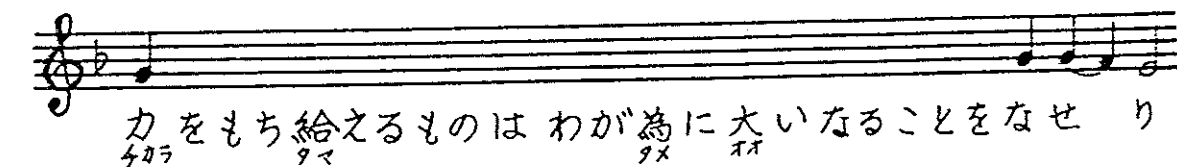
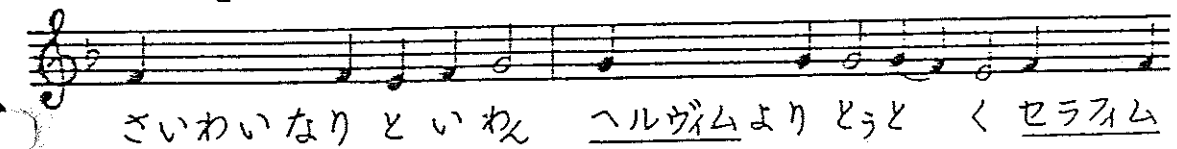
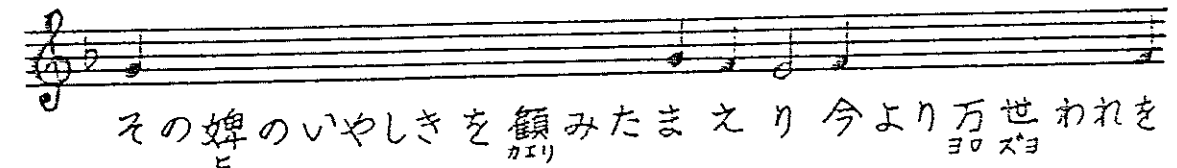
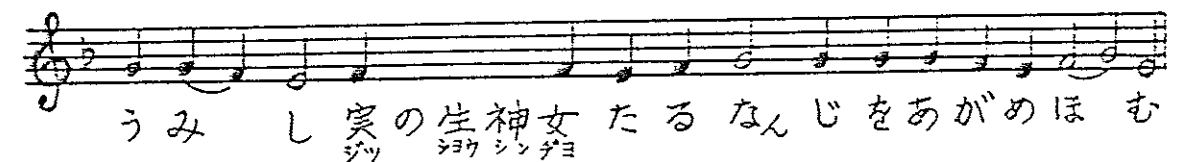
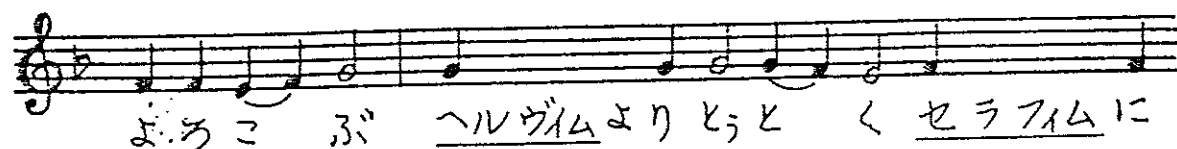
全世界にすゝめて汝に歌わしむ造物ゾウブツは主をうとて

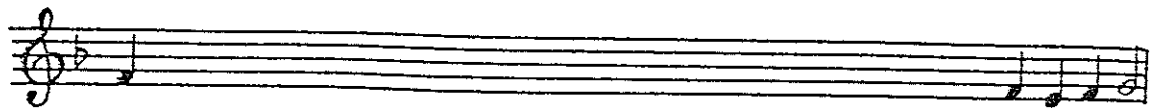
世々にほめあがよ

「誦」

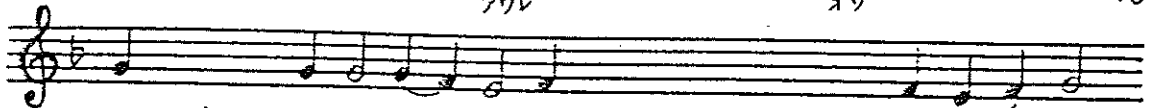
輔： 生神女、光の母を讃め歌をもって讃め揚げん。

< 我が心は主を崇め > (必要ならば用いる)

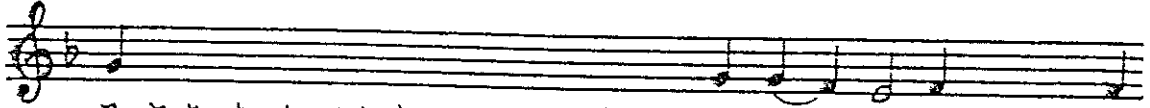




その名は聖なりその^{アツレ}憐みは世世かれを^{オソ}畏るもののにのぞま



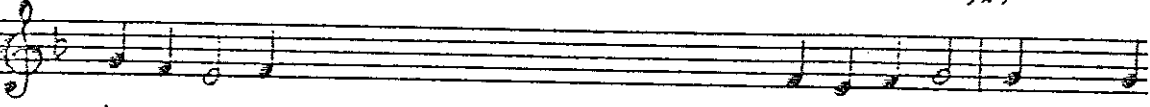
ヘルヱムよりとくとく セラフィムに並びなくさか え



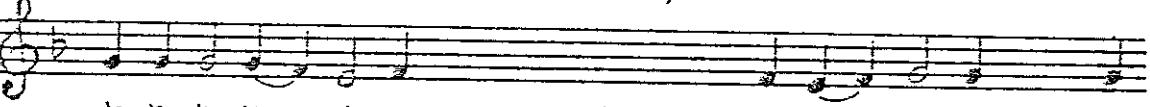
みさおをやぶらずして神^{カミ}言^{コトバ}をうみ し^{ジツ}実の生神女



たるなんじをあがめほむ その^{チカラ}ひじの力をあら



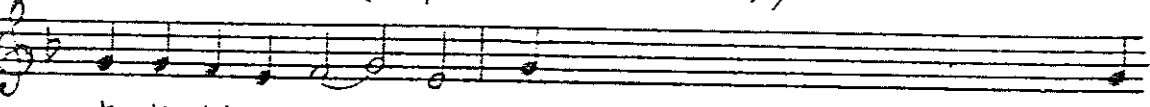
わして心のおごれるものを^チ散らしたまえり ヘルヱム



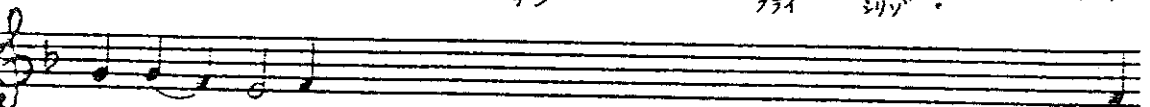
よりとくとく セラフィムに^チ並びなくさか えみさおを



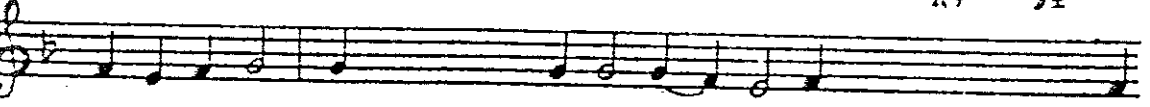
やぶらずして神^{カミ}言^{コトバ}をうみ し^{ジツ}実の生神女たるなんじ



をあがめほむ 種^{タネ}あるものを位^{ライ}より^{シツ}退けいやしきもの



をあ^クげうるものを善^{チン}にあかせ^ト富めるものを空^{カラ}しく返^{マゼ}らせ



たまえり ヘルヱムよりとくとく セラフィムに^チ並びなく

さか えみさおをやぶらずして神言^{カミ}をうみ^{コトバ}し

実の生神女たるなんじをあげめほむ そのぼく

イスラ^イリをいれてわが先祖に告^ツげしかがごとく

アウラムとその末^{スエ}を世世にあわれむことを記憶^{キオク}したまえり

ヘルガイムよりとくとくセラフムに並びなくさかえ

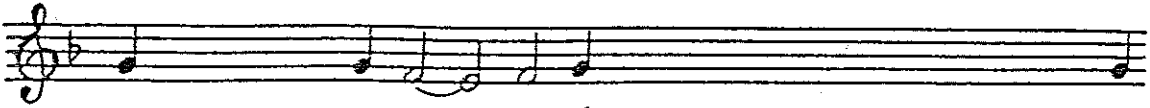
みさおをやぶらずして神言^{カミ}をうみ^{コトバ}し実の生神女

たるなんじをあげめほむ

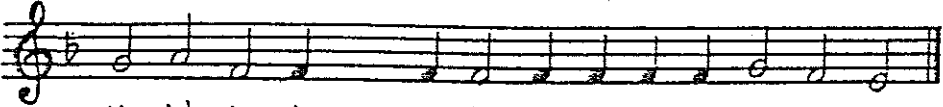
(9)

およそ地に生^ウまるるものは聖神^{テラ}に照^{テラ}されてたのしみ

かたちなき智慧^{チエ}の性^{セイ}もいわい神の母の聖なるまつりを



ととみて呼ぶべ し至ってさいわいなる いさぎよき



生神女えいてい童女ドウジョやよろこべよ

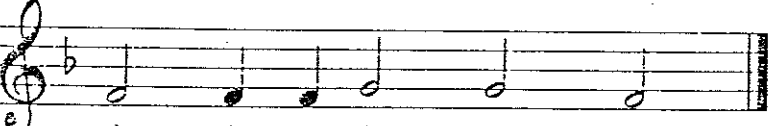
< 小 聯 禱 >

輔：^{またまた あんわ}我等復又安和にして主に祈らん。



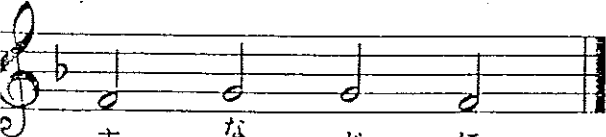
主 あ わ れ め よ

輔： 神や、爾の恩寵あんかろうをもって、我等をたす助け救い憐れみあはみ護れよ。



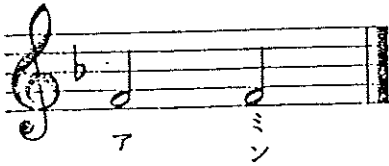
主 あ わ れ め よ

輔： 至聖至潔しせい しけつにして至りて讚美さんびたる我等に光荣じよさいの女宰・生神女・永貞童女しよせいじんマ
リヤと、諸聖人しよせいじんとを記憶おのちして、我等己の身及び互いに各の身をもって、
並びにことごとくの我等の生命いのちをもって、ハリストス神いとくに委託せん。

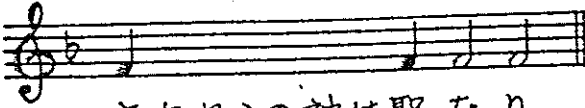


主 なん じ に

司： 蓋天けだしの衆軍しゆぐん爾を讚揚さんようす、我等も光荣じよさいを爾父と子と聖神せいしんにけん献ず、今も
何時いつも世々よよに。

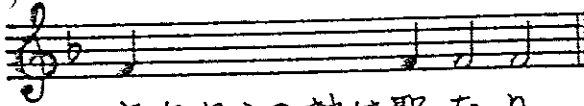


輔： 主我等の神は聖なり。



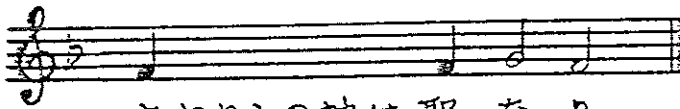
主われらの神は聖なり

輔： 主はシオンに於いて大いなり。
お おお



主われらの神は聖なり

輔： 主は高く衆民の上しゅうみんにあり。



主われらの神は聖なり

720ン渡

※ 「凡そ呼吸ある者〔讚揚歌〕」は、「その週の調」を用いる。

祭日の場合には「祭日経」の指示に従う。

- 第1調の場合は …… 147頁の「凡そ呼吸ある者」を歌う。
- 第2調の場合は …… 147頁の //
- 第3調の場合は …… 148頁の //
- 第4調の場合は …… 149頁の //
- 第5調の場合は …… 149頁の //
- 第6調の場合は …… 150頁の //
- 第7調の場合は …… 151頁の //
- 第8調の場合は …… 151頁の //

< 凡そ呼吸ある者 > (第 1 調)

およそ いきあるものは主をほめあげよ 天より主
をほめあげよいとたかきにかれをほめあげよ
ほめ歌は汝かみにきす そのことごとくの神使や
かれをほめあげよ そのことごとくの翼^{ツバ}やかれをほめあ
げよ ほめ歌は汝かみに帰^キす

※ 152頁の「光荣…生神女讃詞」へ移る。

< 凡そ呼吸ある者 > (第 2 調)

およそいきあるものは主をほめあげよ 天より主を
ほめあげよ至^イと高^カきにかれをほめあげよ ほめ歌は
なんじかみに帰す そのことごとくの神使やかれを

ほめあげよ そのことごとくの軍やかれを ほめあげよ
ほめ歌はなんじかみにきす

※ 152頁の「光栄…生神女讃詞」へ移る。

< 凡そ呼吸ある者 > (第3調)

およそいきあるものは主をほめあげよ天より主をほ
めあげよ 至と高きに かれをほめあげよほめ歌は汝
かみにきす そのことごとくの神使やかれを
ほめあげよ そのことごとくの軍やかれをほめあげ
よほめ歌はなんじかみに帰す

※ 152頁の「光栄…生神女讃詞」へ移る。

< 凡そ呼吸ある者 > (第 4 調)



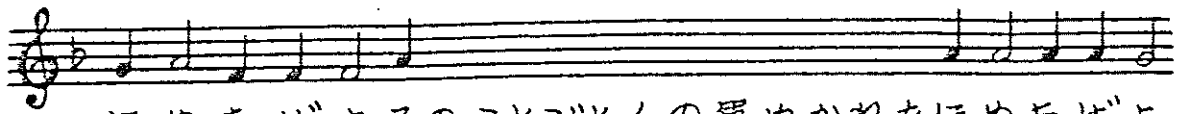
およそいきあるものは主をほめあげよ天より主を
ほめあげよいとたかきにかれをほめあげよ
ほめ歌は汝かみに帰すそのことごとくの神使や
かれをほめあげよそのことごとくの軍やかれをほめ
あげよほめ歌はなんじかみに帰す

※ 152頁の「光荣…生神女讃詞」へ移る。

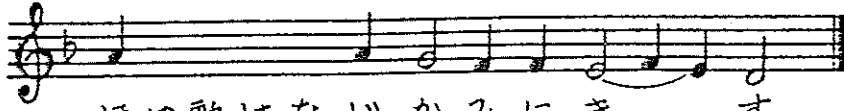
< 凡そ呼吸ある者 > (第 5 調)



およそいきあるものは主をほめあげよ天より主を
ほめあげよ至イと高きにかれをほめあげよほめ歌は
なんじかみにきすそのことごとくの神使やかれを



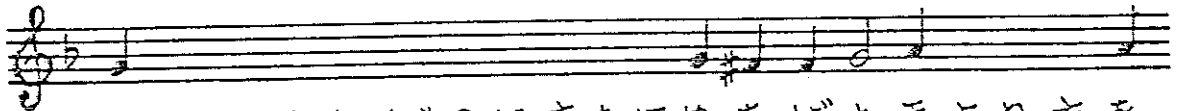
ほめあげよそのことごとくの軍やかれをほめあげよ



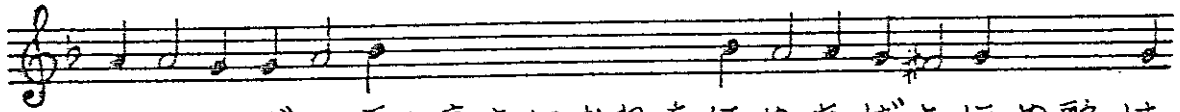
ほめ歌はなんじかみにきす

※ 152頁の「光荣・・・生神女讃詞」へ移る。

< 凡そ呼吸ある者 > (第6調)



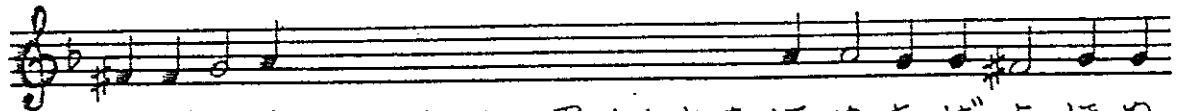
およそいきあるものは主をほめあげよ天より主を



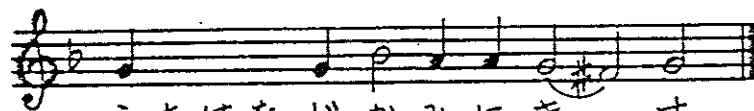
ほめあげよ至イと高きにかれをほめあげよほめ歌は



なんじかみにきすそのことごとくの神使やかれをほめ



あげよそのことごとくの軍やかれをほめあげよほめ



うたはなんじかみにきす

※ 152頁の「光荣・・・生神女讃詞」へ移る。


< 凡そ呼吸ある者 > (第 7 調)



およそいきあるものは主をほめあげよ天より主を
ほめあげよいとたかきに彼れをほめあげよほめ
歌はなんじかみに帰すそのことごとくの神使や
かれをほめあげよそのことごとくの暈やかれを
ほめあげよほめ歌はなんじかみに帰す

※ 152頁の「光荣…生神女讃詞」へ移る。

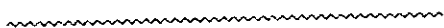
< 凡そ呼吸ある者 > (第 8 調)



およそいきあるものは主をほめあげよ天より主を
ほめあげよ至と高きにかれをほめあげよほめ
うたはなんじかみに帰すそのことごとくの神使や

かれをほめあげよ そのことごとくの軍やかれをほめ
 あげよ ほめ歌はなじかみに帰す

※ 続いて「光荣 … 生神女讃詞」を歌う。



< 光荣 … 生神女讃詞 > (祭日には“祭日経”の指示に従う)

南門、点灯

光荣は父と子と聖神に帰す今も いつも 世世 にアミン
 生神女讃詞

生神童てい女や汝は至_イって讚美_{サンヒ}たるものなり。なじ
シカシンドフ

に身を取りし主は地獄をとりこにしアダムを呼び起_キし

のろいをやぶ りエワをゆるし死を亡_スぼし

われらをいかせり 故_コにわれら歌_{ウタ}うてよ ぶかく行_イい

給^{たま}いし^スハ^カス^カト^ス神^{カミ}はあがめほめらる光えいはなんじ
に帰す

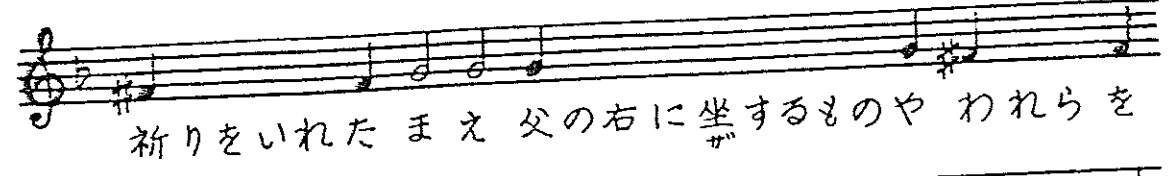
司： 光^{なんじ}榮^{ひかり}は爾^{あらわ}我等^まに光を顕せる主に帰す。

< 大 詠 頌 >

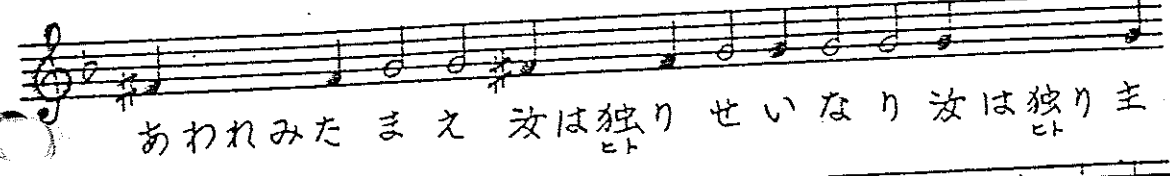
至^イと高^{タカ}きには光榮^{カミ}神^{カミ}に帰し 地には平安くだり
人^{ヒト}に恵^メみはのぞめり 主^{カミ}天^{テン}の王^{ワウ} 神^{カミ}父^フ全^{ゼン}能^{ノウ}者^{シャ}や
主^ユ独^{ドウ}生^{セイ}の子^コ イ^イス^スハ^カス^カト^ス およびせい神^{カミ}や 汝^ニの大^{ダイ}いなる
光榮^{カミ}によつて われら汝^ニをあげめ 汝^ニをほめあげ なんじを
伏^フし拝^{オガ}み汝^ニを尊^{トウ}とみ 歌^{ウタ}い なんじに感謝^{カンシャ}す主^{カミ}かみや
神^{カミ}の小^コ羊^{ヒツジ}父^フの子^コ 世^ヨの罪^{ツミ}をにないしものや我等^{われら}をあわ



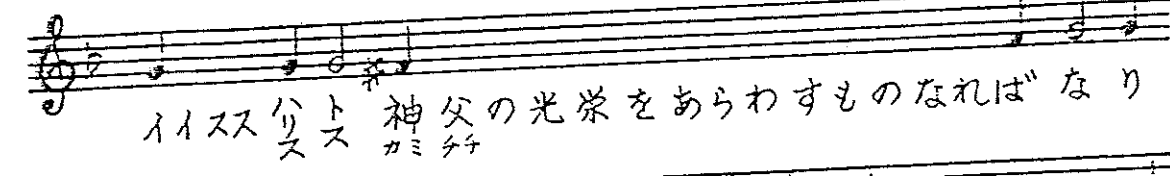
れみたまえ世のもろもろの罪を荷^ナいしものやわれらの



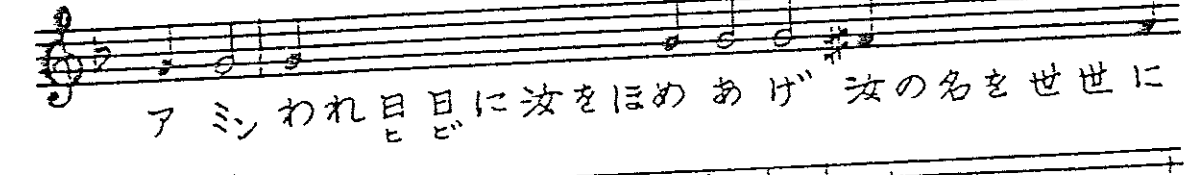
祈りをいれたまえ父の右に坐^カするものやわれらを



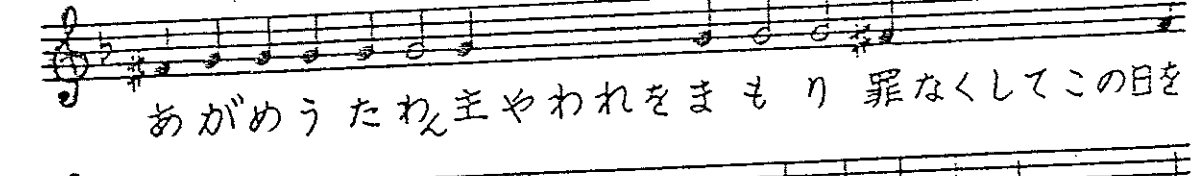
あわれみたまえ 汝は独^{ヒト}りせいなり 汝は独^{ヒト}りま



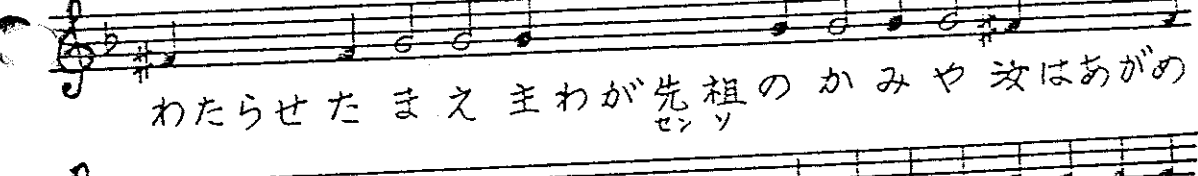
イス^スス^ス 神父の光栄をあらわすものなればなり



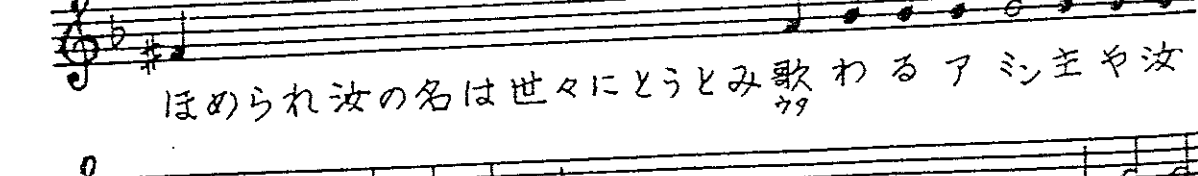
ア^ミン^ノ われ日^ヒ日^ヒに汝をほめあげ 汝の名を世世に



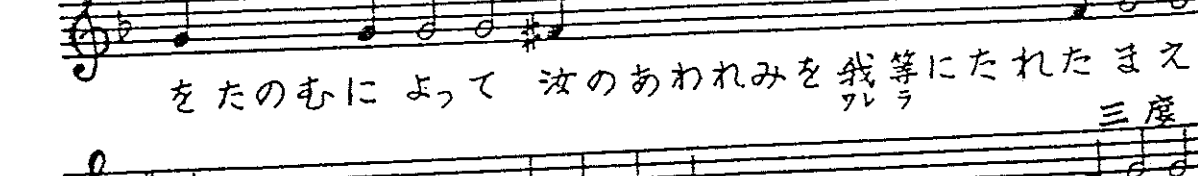
あがめうたわ^ん主やわれをまもり 罪なくしてこの日を



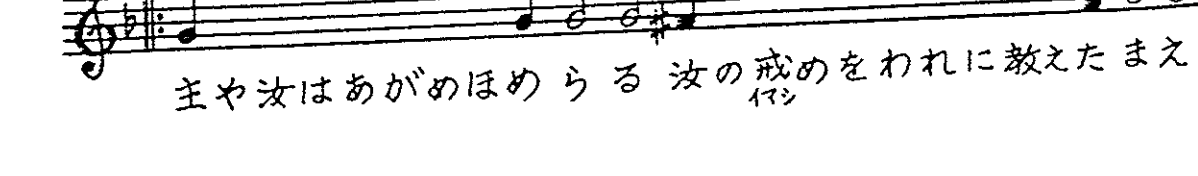
わたらせたまえ 主わが先^{セン}祖のかみや汝はあがめ



ほめられ汝の名は世々にとうとみ歌^{ウタ}われる ア^ミン^ノ主や汝



をたのむに よって 汝のあわれみを我^ワ等^レにたれたまえ



主や汝はあがめほめらる 汝の戒^{イハシ}めをわれに教えたまえ

三度

主や汝は世々 われらのかくれがたり われかつていえり

主やわれをあわれみわがたましいを医やしたまえわれ

罪を汝に得ればなり 主や汝に走りつく 汝の旨を行

なうをわれに教えたまえ 汝はわれのかみいのち

の源は汝にあればなり 汝の光において光をみん

あわれみを汝を知るものにつねにたれたまえ

聖なる神 聖なる勇氣 聖なる常生のものや我等をあわれめよ

光榮は父と子と聖神に歸す今もいつも世世にアミン

聖なる常生のものやわれらをあわれめよ せいなるか

みせいなる勇氣 せいなる常生のものやわれらをあわれめよ

※ 「定規の復活の讚詞」は、^{トロバリ} “奇数調” の場合には … 156頁へ
 “偶数調” // … 157頁へ
 祭日には “祭の讚詞” を歌う。

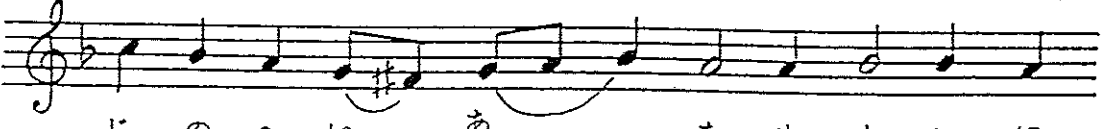
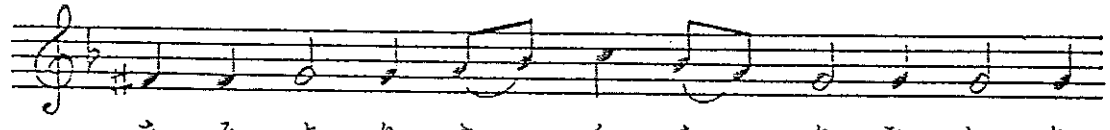
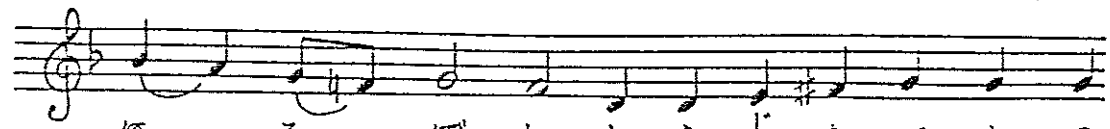
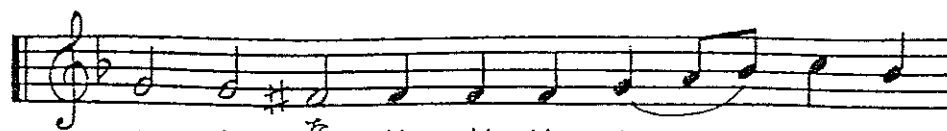
< 定規の復活の讚詞 ^{トロバリ} > (第1・3・5・7調の場合)



い ま す く い は せ か い に
 お よ べ り、わ れ ら は か よ
 り ふ く かつ し て、わ が い の ち の
 か し ら と な る の 主 に う た う。
 そ の し に て し を ほ ろ ほ し、わ
 れ ら に、勝 利 と、大 い な る じ
 れ ん を た ま え ば な り

※ 158頁の「重聯禱」へ移る。

< 定規の復活の讃詞 ^{トロワ} > (第2・4・6・8調の場合)



※ 次の「重聯禱」へ移る。

< 重 聯 禱 >

輔： 神や、爾の大いなる憐れみに因りて我等を憐れめよ、爾に祈る、聆き納
れて憐れめよ。



主あわれめ 主あわれめ 主 あわれ め よ
(以下毎句ごとこれを歌う)

輔： 又我が国の天皇及び国を司る者の為に祈る。

詠： 「主憐れめ 主憐れめ 主憐れめよ」

輔： 又教会を司る尊貴なる我等の東京の大主教及び全日本の府主教フェオド
シイ、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為に祈る。

詠： 「主憐れめ 主憐れめ 主憐れめよ」

輔： 又恒に記憶せらるる福たる此の聖堂の建立者、及び已に寝りし悉くの父
祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の為に祈る。

詠： 「主憐れめ 主憐れめ 主憐れめよ」

輔： 又神の諸僕、此の聖堂の兄弟に、慈悲、生命、平安、壮健、救贖、眷顧、
寛宥、及び諸罪の赦を賜わんが為に祈る。

詠： 「主憐れめ 主憐れめ 主憐れめよ」

輔： 又此の至尊なる聖堂に物を献り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及
び此に立ちて爾の大いにして豊なる憐れみを仰ぎ望む者の為に祈る。

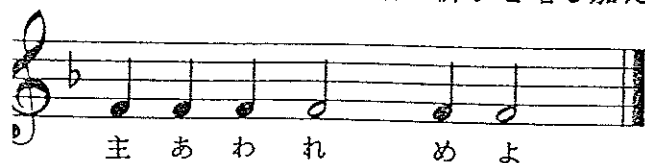
詠： 「主憐れめ 主憐れめ 主憐れめよ」

司： 蓋爾は慈悲にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、
今も何時も世世に。

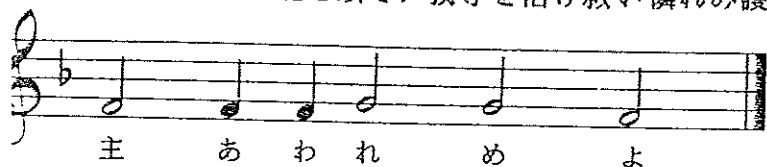


< 増 聯 禱 >

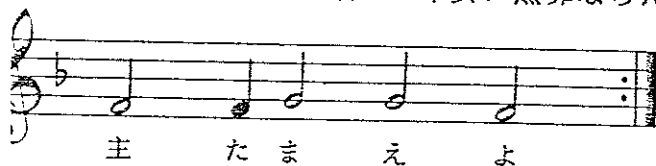
輔： 我等主の前に吾が朝の祈りを増し加えん。



輔： 神や爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐れみ護れよ。



輔： 此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む。



(以下毎句ごとこれを歌う)

輔： 平安の神使、正しき教師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む。

詠： 「主賜えよ」

輔： 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む。

詠： 「主賜えよ」

輔： 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む。

詠： 「主賜えよ」

輔： 我等の生命の余日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む。

詠： 「主賜えよ」

輔： 我等の生命の終りがハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハリストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む。

永： 「主賜えよ」

輔： 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互いに各の身を以て、並びに悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。



主 喃 じ に

司： 蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、
今も何時も世々に。



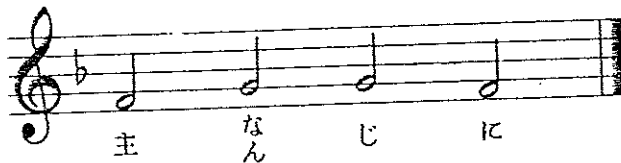
ア ミン

司： 衆人に平安。



喃 じ の 神 に も

輔： 我等の首を主に屈めん。



主 喃 じ に

司： 蓋我が神や、我等を憐れみて救うこと爾に帰す、我等光栄を爾父と子と
聖神に献ず、今も何時も世々に。



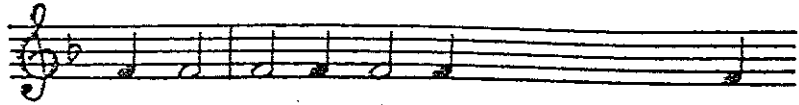
ア ミン

輔： 睿智。

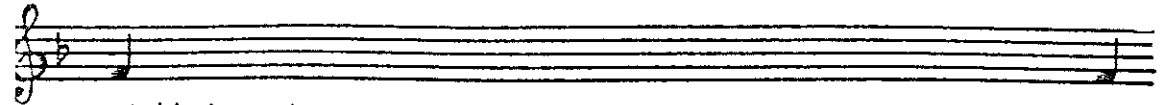


ふくをくだせ

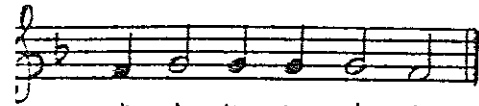
司： 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に。



ア ミン か み や わ が 国 の 天 皇 と

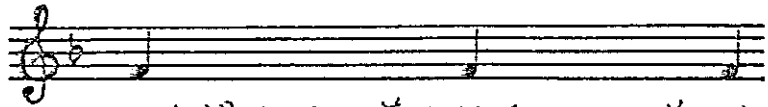


正 教 会 の 教 と 正 教 の す べ て の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン 等 を 永 く
オシエ ラ ナガ

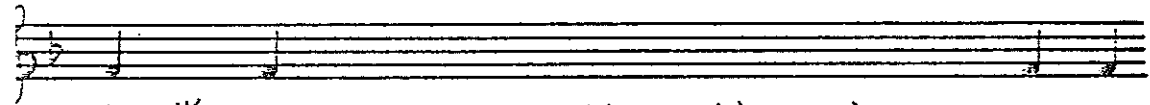


ま も り た ま え

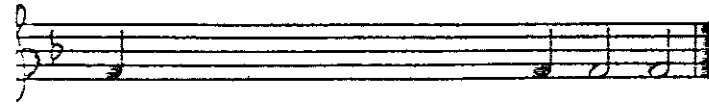
司： ^{し せい} 至 聖 なる ^{しょうしんじょ} 生 神 女 や、^{すく たま} 我 等 を 救 い 給 え。



ヘ ル ヴ ァ イ ム より ^{トホト} 尊 く セ ラ フ ィ ム に ^{アラ} 並 び

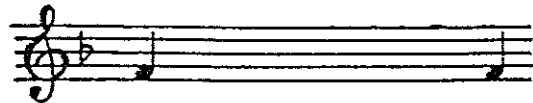


な く ^{サカ} 栄 え み さ お を や ぶ ら ず し て 神 こ と ば を 生 み し じ つ の



生 神 女 た る 汝 を あ が め ほ む

司： ^{かみ} ハ リ ス ト ス 神 ^{たのみ} 我 等 の 侍 や、^{なんじ き} 光 栄 は 爾 に 帰 す、光 栄 は 爾 に 帰 す。



光 栄 は 父 と 子 と 聖 神



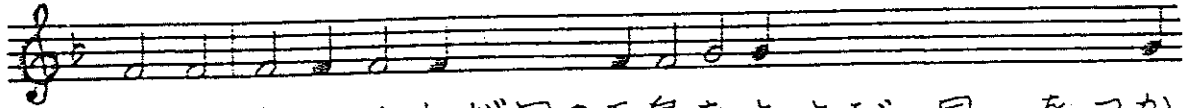
に 帰 す 今 も い つ も 世 世 に ア ミ ン 主 あ わ れ め 主 あ わ



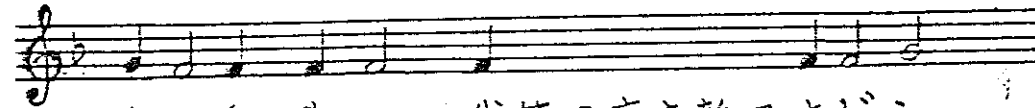
れめ、主あわれめよ ふくをくだせ

司： 死より復活せしハリストス我等の真の神は、その至浄なる母、光栄にして讃美たる聖使徒、聖某（本日記憶される聖人）、聖使徒日本の大主教聖ニコライ、及び諸聖人の祈禱に因りて我等を憐れみ救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり。

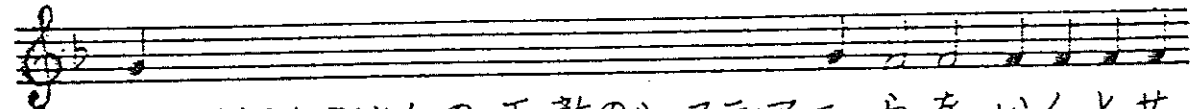
< 萬壽詞 >



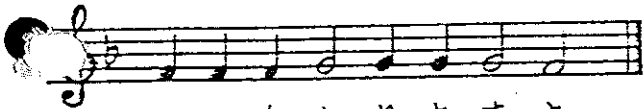
アミンかみやわが国の天皇をおよび 国をつか



さどるもの 我等の府主教フェオドシ-



およびことごとくの正教のハリストニアニシらをいくとせ



にもまもりたまえ

肉門、消灯、7EDを受
幕

D-ツクを消す

中央と不朽体は消さない、
(祭中は消さない)

【 第 一 時 課 】

誦： ^き来たれ我等の^{おうかみ こうはい}王神に叩拝せん。
^き来たれハリストス我等の^{おうかみ こうはい ふふく}王神に叩拝俯伏せん。
^き来たれハリストス我等の^{おう かみ まえ こうはい ふふく}王と神の前に叩拝俯伏せん。

「 第 5 聖 詠 」

^わ主や、^{ことば}我が言を^き聴き、^わ我が^{さと}思いを^わ悟れよ。^わ吾が^わ王、^わ我が^{かみ}神や、^わ我が^よ呼ぶ
^{こゑ}声を^{たま}聆納れ^{たま}給え、^{なんじ}われ^{なんじ}爾に^{あした}折れば^{あした}なり。^{あした}主や^{あした}晨に^{あした}我が^{あした}声を^{あした}聴き^{あした}給え、^{あした}わ
^{あした}れ^{あした}晨に^{あした}爾の^{あした}前に^{あした}立ち^{あした}て^{あした}待たん、^{あした}けだし^{あした}爾は^{あした}不法^{あした}を^{あした}喜ば^{あした}ざる^{あした}神^{あした}なり。^{あした}悪人
^{あした}は^{あした}爾に^{あした}居る^{あした}を得^{あした}ず、^{あした}不^{あした}度^{あした}の^{あした}者^{あした}は^{あした}爾の^{あした}目^{あした}の前^{あした}に^{あした}止^{あした}ま^{あした}ら^{あした}ざ^{あした}らん。^{あした}爾^{あした}は^{あした}凡^{あした}そ^{あした}不
^{あした}法^{あした}を^{あした}行^{あした}う^{あした}者^{あした}を^{あした}憎^{あした}む、^{あした}爾^{あした}は^{あした}偽^{あした}りを^{あした}言^{あした}う^{あした}者^{あした}を^{あした}亡^{あした}さん。^{あした}残^{あした}忍^{あした}詭^{あした}譎^{あした}の^{あした}者^{あした}は^{あした}主^{あした}これ
^{あした}を^{あした}悪^{あした}む。^{あした}唯^{あした}われ^{あした}爾^{あした}が^{あした}憐^{あした}れ^{あした}み^{あした}の^{あした}多^{あした}き^{あした}により^{あした}て^{あした}爾^{あした}の家^{あした}に^{あした}入^{あした}り、^{あした}爾^{あした}を^{あした}畏^{あした}れて^{あした}爾
^{あした}が^{あした}聖^{あした}堂^{あした}に^{あした}伏^{あした}拝^{あした}せん。^{あした}主^{あした}や^{あした}我^{あした}が^{あした}敵^{あした}の^{あした}為^{あした}に^{あした}我^{あした}を^{あした}爾^{あした}の^{あした}義^{あした}に^{あした}導^{あした}き、^{あした}我^{あした}が^{あした}前^{あした}に^{あした}爾^{あした}の
^{あした}道^{あした}を^{あした}平^{あした}かに^{あした}せ^{あした}よ、^{あした}けだし^{あした}彼^{あした}等^{あした}の^{あした}口^{あした}には^{あした}真^{あした}実^{あした}なく、^{あした}彼^{あした}等^{あした}の^{あした}心^{あした}は^{あした}悪^{あした}逆^{あした}、^{あした}彼^{あした}等
^{あした}の^{あした}喉^{あした}は^{あした}開^{あした}け^{あした}し^{あした}枢^{あした}、^{あした}その^{あした}舌^{あした}にて^{あした}媚^{あした}び^{あした}へ^{あした}つ^{あした}ら^{あした}う。^{あした}神^{あした}や^{あした}彼^{あした}等^{あした}の^{あした}罪^{あした}を^{あした}定^{あした}め、^{あした}彼^{あした}等
^{あした}に^{あした}その^{あした}謀^{あした}を^{あした}も^{あした}つ^{あした}て^{あした}自^{あした}ら^{あした}敗^{あした}れ^{あした}し^{あした}め、^{あした}彼^{あした}等^{あした}が^{あした}不^{あした}度^{あした}の^{あした}基^{あした}だ^{あした}し^{あした}き^{あした}により^{あした}て^{あした}之^{あした}を^{あした}逐
^{あした}い^{あした}給^{あした}え、^{あした}彼^{あした}等^{あした}爾^{あした}に^{あした}逆^{あした}ら^{あした}え^{あした}ば^{あした}なり。^{あした}凡^{あした}そ^{あした}爾^{あした}を^{あした}頼^{あした}む^{あした}者^{あした}は^{あした}喜^{あした}び^{あした}て^{あした}永^{あした}く^{あした}楽^{あした}し^{あした}み、
^{あした}爾^{あした}は^{あした}彼^{あした}等^{あした}を^{あした}庇^{あした}護^{あした}らん。^{あした}爾^{あした}の^{あした}名^{あした}を^{あした}愛^{あした}す^{あした}る^{あした}者^{あした}は、^{あした}爾^{あした}を^{あした}も^{あした}つ^{あした}て^{あした}自^{あした}ら^{あした}ほ^{あした}こ^{あした}ら^{あした}ん^{あした}と
^{あした}す、^{あした}けだし^{あした}主^{あした}や^{あした}爾^{あした}は^{あした}義^{あした}人^{あした}に^{あした}福^{あした}を^{あした}降^{あした}し、^{あした}恵^{あした}み^{あした}を^{あした}も^{あした}つ^{あした}て^{あした}盾^{あした}の^{あした}如^{あした}く^{あした}之^{あした}を^{あした}環^{あした}らし
^{あした}ま^{あした}衛^{あした}れば^{あした}なり。

「 第 8 9 聖 詠 」

^{なんじ}主^{なんじ}や^{なんじ}爾^{なんじ}は^{なんじ}世^{なんじ}々^{なんじ}我^{なんじ}等^{なんじ}の^{なんじ}避^{なんじ}所^{なんじ}たり。^{なんじ}山^{なんじ}未^{なんじ}だ^{なんじ}生^{なんじ}ぜ^{なんじ}ず、^{なんじ}爾^{なんじ}未^{なんじ}だ^{なんじ}地^{なんじ}と^{なんじ}全^{なんじ}世^{なんじ}界^{なんじ}を^{なんじ}造^{なんじ}ら

ざるの先、且つ世より世までも爾は神なり。爾人を塵に帰らしめ、すな
 わち日、人の子や帰れと。けだし爾が目の前に千年は過ぎし昨日の如
 く、夜間の更の如し。爾は大水の如く彼等を流す、彼等は夢の如く朝に
 生うる草の如し。朝には花さきて青く、暮れには刈られて稿る。けだし
 我等は爾の怒りに因りて消え、爾の憤りによりて驚き惶る。爾は我等の
 不法を爾の前に置き、我等の隠れたる事を爾が顔の光の前に置けり。我
 等がことごとくの日は爾が怒りの中に逝き、我等は我が歳を失うこと音
 の如し。我が歳の数は70年、或いは健やかなれば80年なり。その間、
 壯なる時も苦勞と疾病あり。けだしその過ぐることを速やかにして、我等
 すなわち飛び去る。誰か爾が怒りの力を知り、又爾を畏るの度に依り
 て爾の憤りを識らんや。願わくは我等に我が日を計ることを教えて知恵
 の心を獲せしめ給え。主や面を回えせよ、何の時に至るや、爾の僕を憐
 れみ給え。夙に爾の憐れみをもって我等に飽かしめよ、然せば我等生涯
 歎び楽しまん。爾かつて我等を撲の日と、我等が禍に遣いし年に代えて、
 我等を楽しませ給え。願わくは爾の行う所は爾の諸僕に著われ、爾の
 光榮はその諸子に著われん。願わくは主吾が神の恵みは我等に在らん。
 願わくは我が手の工作を我等に助け給え、我が手の工作を助け給え。

「第 100 聖 詠」

われ憐れみと審判を歌わん、主や爾に歌を奉らん、われきずなき道と思
 わん、爾何の時我に至るや。われきずなき心をもって我が家の中に行か
 ん。我が目の前には邪なる物を置かざらん。法に背くの行は、われ之を
 疾む。それ必ず我に附かざらん。壊れし心は我に遠ざかり、悪しき者は
 われ之を識らざらん。隠に己の隣をそしる者は、われ之を逐い、目傲り、
 心高ぶる者は、われ之を容れざらん。我が目はこの地の忠信ある者を願
 み、彼等を我が傍に居らしめんとす。きずなき路を行く者は我に事えん。
 貳心を行う者は我が家に居るを得ず。偽を言う者は我が目の前に止らざ
 らん。農にわれ此の地のことごとくの不度者を滅ぼし、凡そ不法を行う

もの 主の 城邑より 絶たれしめんとす。

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神や光荣は爾に帰す。(3回)

主憐れめよ。(3回)

光荣は父と子と聖神に帰す、

※ 「主日の讃詞〔トロバリ〕」は、「その週の調」を用いる。

祭日には「祭日の讃詞」を用いる。

トロバリ
< 主日の讃詞 > (第 1 調)

救世主よ、イウデヤの人墓を封じて、兵卒爾の潔き身を守る時、爾は三日目に復活して、世界に生命を賜えり。故に天軍は爾生命を施す主に呼び、ハリストスよ、光荣は爾の復活に帰し、光荣は爾の国に帰す、獨人を慈しむ主よ、光荣は爾のおもんばかりに帰す。

※ 167頁の「今も何時も世々に、アミン」へ移る。

トロバリ
< 主日の讃詞 > (第 2 調)

死せざる生命よ、爾死に降りし時、神の性の光にて地獄を殺せり。死せし者を地下より復活せしめし時、天軍皆呼びて日えり、生命を賜う主ハリストス吾が神よ、光荣は爾に帰す。

※ 167頁の「今も何時も世々に、アミン」へ移る。

< 主日の讚詞 > (第 3 調)

天に在る者^{あ たの}樂しめよ、地に在る者^{あ よろこ}悦べよ、主はその肘^{ひじ}の力^{ちから}を顕^{あらわ}して、死
をもつて死^{ほろ}を滅^{ほしめ}ぼし、復活^{はしめ}の首^{たま}となり、我等^{あわ}を地獄^{はら}の腹^{たま}より救^{たま}い、世界
に大^{あわ}いなる憐^{たま}れみを賜^{たま}いたればなり。

※ 167頁の「今も何時も世々に、アミン」へ移る。

< 主日の讚詞 > (第 4 調)

主の女弟子^{おんなでし}は復活^{おとすれ}の光^{あかり}る音^ねを天使^{てんし}より聞^きき受^うけて、元祖^{がんそ}よりの定罪^{ていざい}を振^ふ
るい棄^すて、使徒^{しと}に誇^{ほこ}りて日^ひえり、死^{ほろ}は滅^{ほしめ}ぼされ、ハリストス神^{かみ}は復活^{はしめ}
して、世界^{あわ}に大^{あわ}いなる憐^{たま}れみを賜^{たま}えり。

※ 167頁の「今も何時も世々に、アミン」へ移る。

< 主日の讚詞 > (第 5 調)

信者^{しんじや}よ、父^{ちち}と聖神^{せいじん}と偕^{とも}に始^{はじ}めなき言^{ことば}、吾^{われ}が救^{たす}いの為^{ため}に童貞女^{どうていじよ}より生まれ
し者^{もの}を讃^ほめ歌^{うた}いて拝^{あが}むべし、彼^{かれ}甘^{あま}んじてその身^みにて十字架^かに上^{のぼ}り、死^しを
忍^{しの}び、その光榮^{こうえい}の復活^{はつぷく}にて死^しせし者^{もの}を復活^{はつぷく}せしめ給^{たま}いしに困^{まど}る。

※ 167頁の「今も何時も世々に、アミン」へ移る。

< 主日の讚詞 > (第 6 調)

天使^{てんし}の軍^{ぐん}爾^にの墓^{はら}に現^{あら}れしに、番兵^{ばんべい}死^しせし者^{もの}の如^{ごと}し、マリヤ墓^{はら}に立^たちて、

いさぎよ からだ たす 爾の潔き体を尋ねたり。いざな 爾は地獄に誘われずして、とりに 地獄を虜にし、いのち 生命を賜う者として、しよじよ あ たま 処女に逢い給えり。死より復活せし主よ、光栄は爾に帰す。

※ 167頁の「今も何時も世々に、アミン」へ移る。

< 主日の讃詞 > (第 7 調)

かろ なんじ ハリストス神よ、爾は十字架にて死を滅ぼし、ほろ とうぞく たぬ てんどう ひら 盗賊の為に天堂を開き、けいこうじよ かな なくさ しと 携香女の悲しみを慰め、使徒に爾が復活して世界に大いなるあわ たま 憐れみを賜いしを伝えさせ給えり。

※ 167頁の「今も何時も世々に、アミン」へ移る。

< 主日の讃詞 > (第 8 調)

なんじ 恵み深き主よ、爾は高きよりくだ 降り、三日の葬りを受けて、ほろむ 我等を苦しみよりと たま 積き給えり。わ いのち 吾が生命と復活なる主よ、光栄は爾に帰す。

※ 次の「今も何時も世々に、アミン」へ移る。

誦： 今も何時も世々に、アミン。

あゝ、おんちやう 恩寵に満たさるる者や、我等何をもつてなんじ 爾を称せんか、天とせん、爾は義の日を照らせばなり。楽園とせん、爾は枯れざる花を開けばなり。どうていじよ 童貞女とせん、爾は貞操を壊らざればなり。けいよ 淨き母とせん、爾は聖なる

ふところ ばんぶつ かみ こ いだ たましい
懐に万物の神たる子を抱けばなり。彼に我等の霊の救われることを祈り
たま わ あし ことば かた たま もろもろ ふ ほう
給え。我が足を爾の言に固め給え、諸の不法の我を制するを許すなかれ。
はくがい たま われ めい まも
我を人の迫害より救い給え、しかせば我爾の命を守らん。爾が顔の光に
ぼく おきて おし たま わが
て爾の僕を照らし、爾の律を我に誨え給え。主や願わくは我が口は讚美
か ひび い げん たま
に満てられ、我に爾の光栄を歌い、日々爾の威厳を歌わしめ給え。
かか ゆう き じょうせい あわ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者や、我等を憐れめよ。(3回)
せいじん せいじん き いっ よよ
光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。
しせいさんしや あわ いさぎよ しゅさい あやまち
至聖三者や我等を憐れめよ、主や我等の罪を潔くせよ、主宰や我等の愆
ゆる のち やまい いや たま よ
を赦せ、聖なる者や臨みて我等の病を癒し給え、ことごとく爾の名に因
る。

主憐れめよ。(3回)

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、アミン。

いま なんじ せい き
天に在す我等の父や、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来たり、
じわ ごと にちよう かに ごんにち
爾の旨は天に行わるるが如く地にも行われん。我が日用の糧を今日我等
たま おいめ くる ごと おいめ くる たま
に与え給え。我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。
いごな おらび ぎょうあく たま
我等を誘いに導かず、なお我等を凶悪より救い給え。

司： けだし けんのう せいじん き いっ よよ
蓋国と権能と光栄は、爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に。

誦： アミン。

※ 「主日の小讃詞【コタマ】」は、「その週の調」を用いる。
祭日には「祭日の小讃詞」を用いる。

< 主日の小讃詞 > (第 1 調)

しゅさい なんじ かみ よ うち
主宰よ、爾は神なるに因りて光栄の中に墓より復活し、世界をも共に復

活せしめ給えり。人の性は爾を神として讃め歌い、死は滅ぼされ、アダ
ムは楽しみ、エワは今縛より釈かれて、歡びて呼ぶ、ハリストスよ、爾
は衆人に復活を賜う主なり。

※ 171頁の「主憐れめよ」へ移る。

＜ 主日の小讃詞 ＞ (第 2 調)

全能の救世主よ、爾墓より復活せしに、地獄は奇蹟を見て慄き、死者は
起き、造物は見て爾と共に喜び、アダムは共に楽しみ、我が救世主よ、
世界は常に爾を讃め歌う。

※ 171頁の「主憐れめよ」へ移る。

＜ 主日の小讃詞 ＞ (第 3 調)

慈憐なる主よ、爾は今墓より復活して、我等を死の門より升せ給えり。
今アダムは楽しみ、エワは歡び、諸預言者は列祖と共に絶えず爾の権柄
の神聖なる能力を讃め歌う。

※ 171頁の「主憐れめよ」へ移る。

＜ 主日の小讃詞 ＞ (第 4 調)

我が救世主及び贖罪主は神として地に生まれし者を桎梏より釈きて、墓
より復活せしめ、地獄の門を破りて、主宰として三日目に復活し給えり。

※ 171頁の「主憐れめよ」へ移る。

コングク
< 主日の小讃詞 > (第 5 調)

わ まのうせいしゅ 人が愛する主よ、爾は地獄に降り、全能者としてその門を
やぶ ぞうせいしゅ ぶつを己と共に復活せしめ、死の刺を折き、アダム
のろいと たま ゆえ みな よ を詛より釈き給えり。故に我等皆呼ぶ、主よ、我等を救い給え。

※ 171頁の「主憐れめよ」へ移る。

コングク
< 主日の小讃詞 > (第 6 調)

いのち げんいん 生命の原因たるハリストス神は、生命を施す手をもって死せし者を暗き
たに い たま しゅうじん きゅうせいしゅ 谷より出だして、復活を人類に賜えり、衆人の救世主、復活と生命、及
しゅうじん かみ び衆人の神なればなり。

※ 171頁の「主憐れめよ」へ移る。

コングク
< 主日の小讃詞 > (第 7 調)

けん すて ひとびと と あた くだ ちから 死の権は既に人々を捕らうる能わず、けだしハリストスは降りてその力
やぶ ほろ たま しば よげんしゃ どうしん よ きゅう せしゅを敗りて滅ぼし給えり。地獄は縛られ、預言者は同心に喜びて呼ぶ、救
せいしゅ しん お 世主は信に居る者に現れたり、信者よ、復活して出でよ。

※ 171頁の「主憐れめよ」へ移る。

コングク
< 主日の小讃詞 > (第 8 調)

だいじんじ なんじ おこ 大仁慈なる主よ、爾は墓より復活して、死せし者を興し、アダムを復活

せしめ^{たま}給えり。エフは爾の復活を楽しみ、世界の極^{はて}は爾が死より興きたる^おを祝う。

※ 次の「主憐れめよ」へ移る。

誦： 主憐れめよ。(40回)

何の日、何の時、天にも地にも叩^{こう}拝^{はい}讚^{さん}榮^{えい}せられ、寛^{かん}忍^{にん}、鴻^{こう}慈^じ、至^し善^{ぜん}にし
て義^ぎ人を愛^{あい}し、罪^{ざい}人を憐^れれみ、来^{らい}世^{せい}の福^{ふく}を約^{やく}して萬^{よろず}の者^{もの}を救^{すく}いに招^{まね}くハ
リ^かス^かト^かス^か神^{しん}や、爾^{なんじ}主^みや、自^{みづか}ら我^わが此^この時^{とき}の祈^{いのち}りをも受^うけ、我^{われ}等^らの生^{いのち}命^{めい}を
爾^{なんじ}の誠^{まこと}に向^{むか}かわしめ給^{たま}え。我^{われ}等^らの盞^{たましい}を聖^{せい}にし、體^{からだ}を潔^{いさぎよ}くし、應^{おもんばかり}を直^{ただ}くし、
思^{おも}いを浄^{きよ}くし、我^{われ}等^らをこ^{ごと}とく^{ごと}の憂^{うれ}いと禍^{わざわい}と疾^{やまい}より救^{すく}い、爾^{なんじ}の聖^{せい}なる
神^{しん}使^しをもつて我^{われ}等^らを環^{めぐ}り、我^{われ}等^らがそ^{かこ}の囲^{まも}みに衛^{まも}り導^{みちび}かれて、信^{しん}の一^{いつ}なる
と、爾^{なんじ}の近^{ちか}づき難^{がた}き光^{こう}榮^{えい}を悟^{さと}るに至^{いた}らせ給^{たま}え。けだし爾^{なんじ}は世^よ々に崇^{あが}め讚^ほ
めらる。アミン。

主憐れめよ。(3回)

光^{こう}榮^{えい}は父^{ちち}と子^こと聖^{せい}神^{しん}に帰^{かへ}す、今^{いま}も何^{なん}時^{とき}も世^よ々に。アミン。

ヘルヴィムより尊^{とうと}く、セラフィムに並^{なら}びなく榮^{さか}え、貞^{めい}操^{さう}を壊^{やぶ}らずして神^{かみ}
言^{ことば}を生^うみし、実^{じつ}の生^{しょう}神^{しん}女^{じよ}たる爾^{なんじ}を崇^{あが}め讚^ほむ。

神^{しん}父^ふや、主^なの名^なをもつて福^{ふく}を降^{くだ}せ。

司： 神^{かみ}や、我^{われ}等^らに恩^{おん}を被^{こうむ}らし、我^{われ}等^らに福^{ふく}を降^{くだ}し、爾^{なんじ}が顔^{かほ}をもつて我^{われ}等^らを照^て
し、並^{なら}びに我^{われ}等^らを憐^{あわ}れみ給^{たま}え。

誦： アミン。

司： 真^{まこと}の光^ひなるハリス^{およ}トス、凡^{まづ}そ世^よに來^きたる人^{ひと}を照^てらし且^{かつ}つ聖^{せい}にする者^{もの}や、
願^{ねが}くは爾^{なんじ}が顔^{かほ}の光^ひは我^{われ}等^らに輝^{かがや}き、我^{われ}等^らはこれに依^よりて近^{ちか}づき難^{がた}き光^ひを見

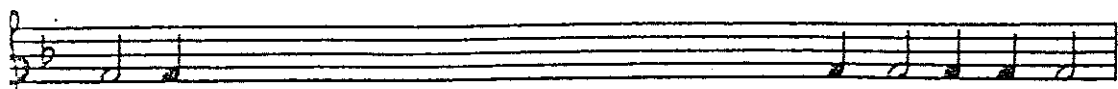
^えるを得ん、^{ねが}願くは爾が^{しじょう}至浄の母と爾が^{しよせいじん}諸聖人の^{まとう}祈禱に依りて、我等の足
 を爾の^{いまし}戒めを行うに向かわしめ^{たま}給え。アミン。

< 生神女小讃詞 >

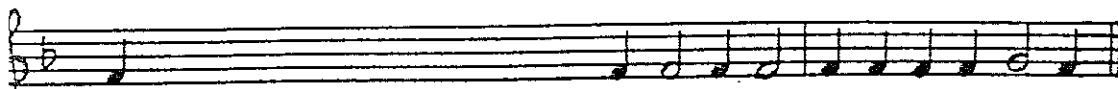
クロアチカ杖オルシツ
 主教 — 南陽 暮
 神父 — 用いぬい

生神女やわれらなんじのぼくひはわざわい
 よりたすけられしをもつてなんじよくかつの
 将^{シヨウ}すいに勝ち歌と感謝をたてまつる勝たれぬ
 ちからをたもつによつてわれらをもろもろの
 苦^ク難^{ナン}よりすくいなんじをうとつてよめならぬ
 よめやよろこべよと呼ばしめたまえ

司： ハリストス神^{かみ}我等の^{たのか}恃や、^{かんじ}光荣は爾に^ま帰す、^{かんじ}光荣は爾に^ま帰す。



光栄は父と子と聖神に帰す今といつも世々にアミン



主あわれめ主あわれめ主あわれめよ ぶくをくだせ

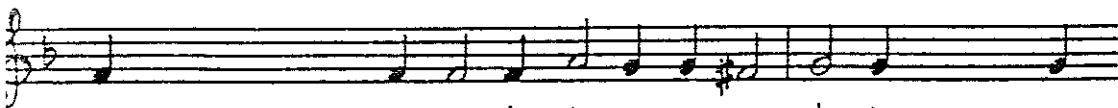
司： 死より復活せしハリストス我等の真の神は、その至浄なる母、克肖捧神
なる吾が諸神父、及び諸聖人の祈禱に因りて、我等を憐れみ救わん、彼
は善にして人を愛する主なればなり。



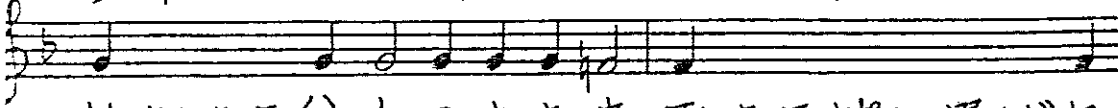
ア
ミン

< 亜使徒ニコライのトロバリ >

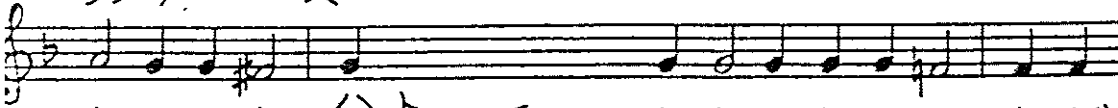
南内 → 出たら 内幕内



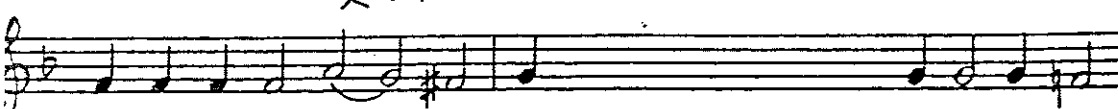
使徒とひとしく同座なるもの忠実にして



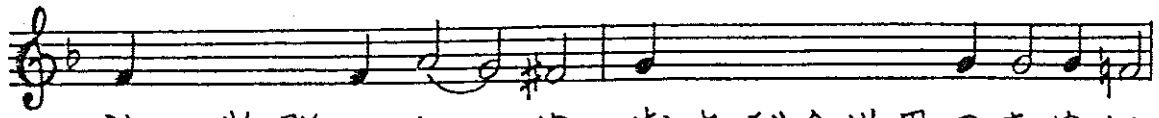
神智なる^シハリスのえき者^{シヤ}聖なる神に選ばれ



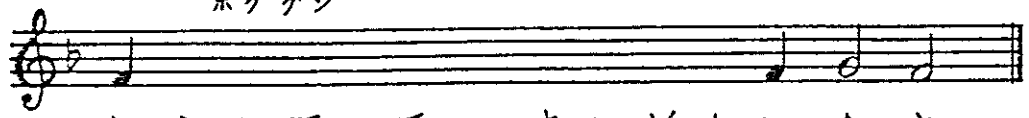
たるふえ^シハリスの愛にみちたるうつわわが



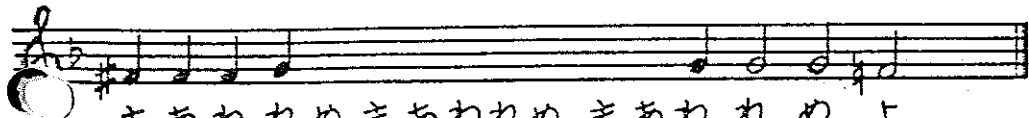
くにの光照者^{シヤ}亜使徒主教^{アシトシヤキョウ}聖ニコライ^{セイ}よ



汝の牧群のため および全世界のために
ボツゲン



生命を保つ聖三者に祈りたまえ
イノタ タモ セイサンシヤ



主あわれめ、主あわれめ、主あわれめよ

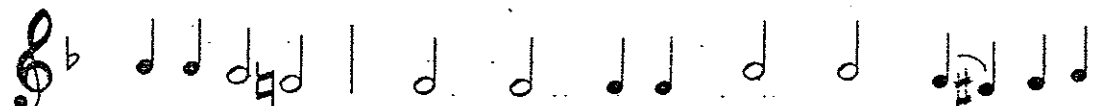
— 徹夜禱終わり —

< 我が幼き時より >

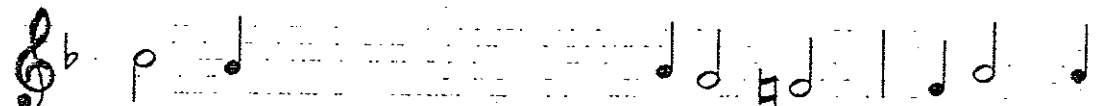
(祭日など必要な時に歌う)



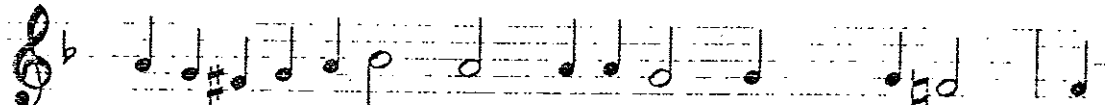
わが おさなきと - き - よ り 多 くの 欲はわ



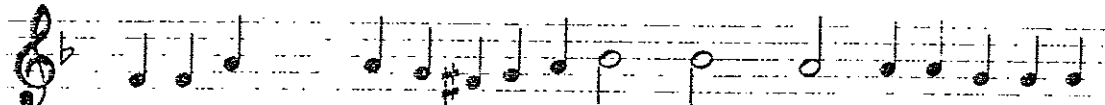
れを 攻む 救 世 主や なんじ み - ずか



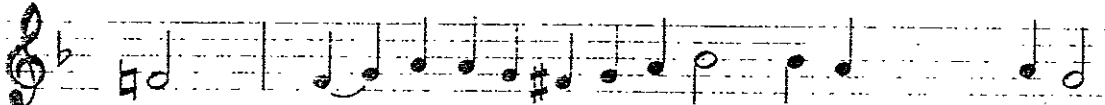
ら われを守り 防ぎて 救いたま え シオンを



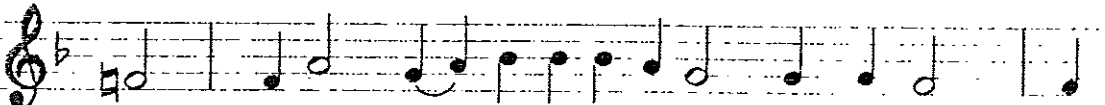
にくむものや 主 よりは じを受けよ く



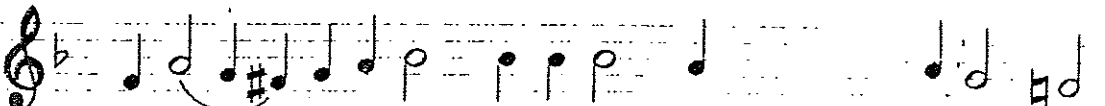
さの火に 焼かるるがごと く なんじもつくさ



れん 光 - えいはちちと子 とせいしんに 帰



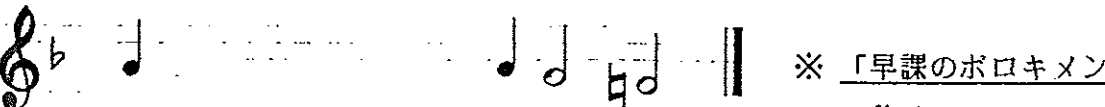
す いま も - いつも 世々に、アミン お



よそ - - のたま しいは 聖神にて 生かさ れ



きよきをもって いよいよのほ り 聖三者の



いったい 全体にて 奥密に 照らさ る

※ 「早課のポロキメン」
へ移る。

< ファリセイの光栄 >

〔 税吏とファリセイの主日か
ら大斎第五主日まで歌う 〕

光ツク えいはちちと子とせいしに帰キす

いキリのちを たもりの主 やわれにツか

いのツ門をひらけよけだしわがた

ましいまた くけがれしからだのツ堂

にこめるものなん ぢのせいどう

にむかてあさのきどうをたて

まっるねが わくはなんじジン仁慈ジなる

によつてなんぢの恩オン寵ツク 19分

にてわれをきよめたま えいまも

1. *fact*
 いつも世 世にアミン かみのははや
 われをすくいのみちにみちびけよけだし
 われはずべき罪^{ツミ}をも てわがたましいをけ
 が し おこたりて生命^{イノチ}をついやせ りねがわ
 くは汝の祈^キ禱^{トワ}をも てわれをおよそのけがれより
 2. *slow*
 すくいたま え 神^{オホ}や汝の大いなるあわれみに
 よってわれをあわれ み汝がめぐみのおおきに
 よってわれの不法^{フホウ}をけしたま え われ
 不当^{フトウ}のもの^{オホ}の多くのおかせし罪^{ツミ}をおも いおそ
 るべき審判^{シンパン}の日におのの ぐただ汝の深き仁慈^{ジンジ}をた

のみ ダヴィド の 如く 汝に 呼ぶ 神や汝の 大いなる
 あわれみによつてわれをあわれみたまえ

※ 63頁の聯禱「神や爾の民を救い…」へ移る。

< 第百三十六聖詠 > (蕩子、断肉、断酪の各主日に歌う)

(1)

われら ワビロン の か わき しに 座 し、
 シ オン を おも て シ オン を おも て
 泣 け り、 ア リル イ ヤ

※ 49頁の「主や爾は崇め讃めらる」へ移る。

< 第百三十六聖詠 > (II)

わ ねーら かつて ワビロンの かわ べに^と座

ーしシオンーをおもうて泣けり アーールル

ーイヤ ^か彼のうちにお いてわれら のこ

とーをやな ^かぎに懸けり アーールルーイ

ヤ かしーこには われら を捕ら えしも

の われらーにうた のことば をもとめ

われら を攻む るもの われら にたのし

みをもと めていえ りわ が た めにシ

オンのうた をうた えーよ アーールルー

イヤ

※ 49頁の「主や爾は崇め讃めらる」へ移る。

< ハリストス死より復活し > (復活祭の讚詞)

ハリス
トス死よりふくかつし死をもって死をほろぼ
しはかにあるものにい のちをたまえり

< 死せざるのハリストス神や > (復活祭の小讚詞)

死せざるのハリス
トス か みや なんじはかにくだれども
じどくのちからをふみ破りて復活せり あぶらをたずさるおん
なによろこべよと言い なんじ使徒にへいあんをあた え ほろびしも
のにふくか つをたま えり

< 神の使い >

(復活祭第九イルモスの共頌)^{カタラソ}

神の使^{カミ}い^{ツカ}いつくしみをみちこ^ヨむるものに^ヨ呼ん

でいわ くいさぎよき^{シヨ}処女^{シヨ}やよろこべ

よまた言^イうよろこべよ なんじの子^{ミツ}三日^タ目に^メふ

くか^クつし死^シせしものをおこ^オせり人^{ヒト}びとや

たのしめよ あらたなる イエルサリム^{ヒカリ}や光^{ヒカリ}ひかれよ

神の光榮^{ヒカリ}汝^ニにかがやけは^ハなり シオンやたのしみ

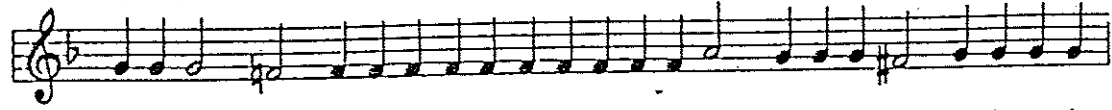
いわえ なんじいさぎよき神のははや汝の生^ナみし

主の復活^{ヒカリ}をよろこびたまえ

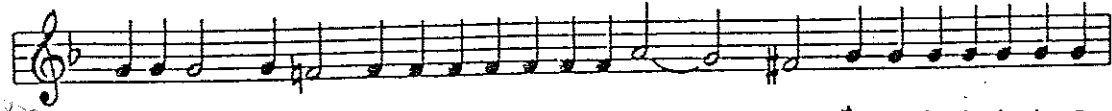
< ハリストス我が神や > トロリ
(降誕祭の讃詞)



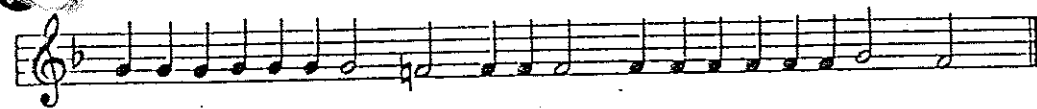
ハリストわがか み や 夜じの降誕は世かいに知恵のひかりを



照らせり これによてほしにつとむ るものは ほしにお



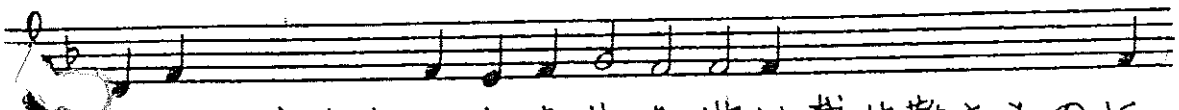
しえら れて 夜じ義の日をおが ー み 夜じうえよりの



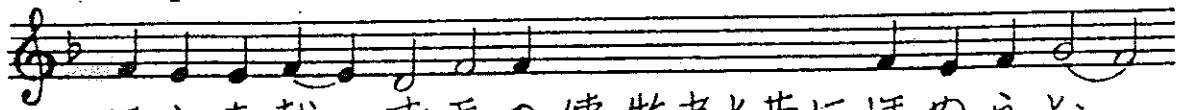
ひがしをさとれり 主や光 えいは夜じにき す

< 処女は今 > コンタフ
(降誕祭の小讃詞)

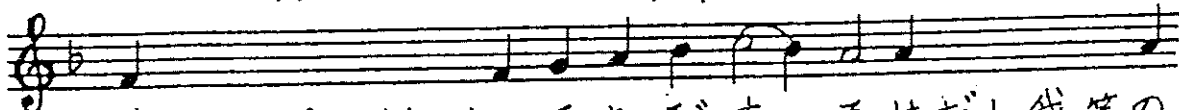
(I)



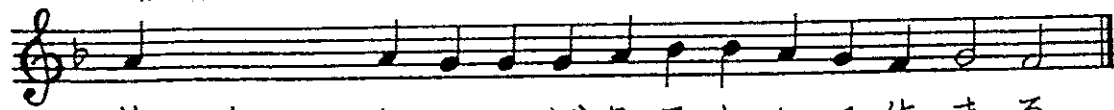
処女は今永在の主を生む地は載せ難きものに
シヨ シヨ イイ エイ ヴイ ック ン ガッ



ほらを献 ず天の使牧者と共にほめうと
ケン アン ツカイ ボク シヤ トエ



博士は星に従がってたびす るけだし我等の
ハカ セ シタ



為に永久のかみみどり子として生まる
タメ エイキョウ

< 今処女は >

コンタク
(降誕祭の小讃詞)

(II)

いま_{シヨ}処_{シヨ}女は いま処女は えいごいの
主_シを 生_クむ主_クを 生_クむ地_チは
地は のせがた きものに ほら_ンを 献_{ケン}ず
ほら_ンを 献_{ケン}ず 天のつかい 天のつかい ぼく
者_{シヤ}と ともに ほめうと ほめうと
はかせ はかせ ほしにしたがて
たび するたび するけだしわれ
ら のために えい_{キョク}すのかみ みどり
子_コとして うまれたり みどり子_コとして
生_クまれたり